

くろもりちょう

黒森町Ⅰ遺跡

—平成3年度発掘調査報告書—

1992.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書32

A Report on the Archaeological Research in Miyako City No.32

くろ もり ちょう
黒 森 町 I 遺 跡

—平成3年度発掘調査報告書—

1992.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education
Miyako, Iwate
Japan.

序 文

宮古市では、これまでに多くの遺跡が確認、調査されております。その大半が縄文時代、古代、中世の遺跡でありましたが、今回報告書にまとめられた黒森町Ⅰ遺跡は、「近世」の江戸時代のものであります。調査は、宅地造成工事に伴い緊急に実施されたものであります。

黒森町Ⅰ遺跡は、宮古でもとりわけ古い歴史を持つ黒森神社を擁する黒森山の麓にあり、遺跡からは鑄造関連の遺物をはじめとして、皿や碗などたくさんの陶磁器が出土いたしました。

金属を鑄型に流し込んで生活の道具を作るという技術は、はるか紀元前3,500年頃の中東にはじまり、中国を経て日本に伝えられたのは弥生時代と言われております。その製品は、銅剣、銅鐸などからはじまりエンジンなどの工業製品にまで及び、ながく人々の暮らしを支えてきたことは周知とするところであります。その技術がいつ頃宮古に伝えられたのかは定かではありませんが、今回の調査により江戸時代の宮古に於ける鑄造業の展開の一端を知る手懸かり得ることができました。

また、江戸時代は、大量の陶磁器が庶民のあいだに出回った時期といわれております。今回出土した多くの陶磁器は、そういう時代を反映しているものと思われます。海と陸のどちらの道を経て伝えられたのでしょうか。これまた大変に興味深い問題と思われます。

いずれにしても「鉄」や「陶磁器」の宮古への道をたどることは、とりもなおさず宮古の文化を明らかにすることであります。黒森町Ⅰ遺跡の貴重さをあらためて認識させられると同時に、本報告書が広く活用され、文化財保護理解の一助となることを願わずにはられません。

最後に、発掘調査、報告書作成にご協力戴きました地権者をはじめ関係者各位に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例 言

1. 本書は、平成3年度に実施した黒森町I遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査、整理作業および報告書刊行の主体は宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）であり、発掘調査および本書の執筆、編集は阿部が担当し、高橋、鎌田が補佐した。
3. 調査座標は、平面直角座標第X系を座標変換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためRを冠して表示した。

座標軸方向 第X系に準ずる

調査座標原点 X -38000,000 Y +95000,000

4. 高さは、標高値をそのまま使用した。
5. 土層観察に際しては、『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄）を参考とした。
6. 発掘調査及び遺物の整理、報告書の作成にあたり、次の方々からご教示、ご指導戴いた。

記して感謝申し上げます。（敬称略）

昆野 靖（岩手県立総合教育センター）	岸 昌一（宮古市史編さん室）
佐々木 清文（岩手県立博物館）	竹下 将男（宮古市史編さん室）
室野 秀文（盛岡市教育委員会）	中沢 新平（宮古市在住）
	小西 英二（株式会社 小西鑄造）

7. 出土した遺物、実測図、写真など調査にかかわる資料は、一括して宮古市教育委員会で保管している。
8. 本書は、(有)オガサワラ産業の多大なる御理解、御協力のもとに刊行することが出来たことを記しておく。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要旨	1
3. 調査体制	1
II 遺跡の位置と環境	2
1. 宮古市の地形概観	2
2. 黒森町 I 遺跡について	5
III 調査内容	6
1. 調査の方法	6
2. 基本層序	6
3. 遺構の検出状況	10
4. 検出された遺構と遺物	13
IV 調査のまとめ	102

挿 図 目 次

第1図	位置図	3
第2図	遺跡周辺の地形	4
第3図	遺跡の立地状況	5
第4図	調査区全体図	7
第5図	調査区土層断面図（Ⅰ区）	9
第6図	調査区土層断面図（Ⅱ区）	10
第7図	墓石、墓壙出土状況（ⅡC、D区）	11
第8図	墓壙域（ⅡC、D区）	12
第9図	第1号墓壙	13
第10図	第1号墓壙出土遺物	13
第11図	第2号墓壙	14
第12図	第2号墓壙出土遺物	15
第13図	第3号墓壙	16
第14図	第3号墓壙出土遺物	17
第15図	第4号墓壙	18
第16図	第4号墓壙出土遺物	18
第17図	第5号墓壙	19
第18図	第5号墓壙出土遺物	19
第19図	第6号墓壙	20
第20図	第6号墓壙出土遺物	20
第21図	第7号墓壙	21
第22図	第8号墓壙	22
第23図	第8号墓壙出土遺物	22
第24図	第9号墓壙、第15号墓壙	23
第25図	第9号墓壙出土遺物(1)	24
第26図	第9号墓壙出土遺物(2)	25
第27図	第10号墓壙	26
第28図	第10号墓壙出土遺物	26
第29図	第11号墓壙	27
第30図	第11号墓壙出土遺物	27
第31図	第12号墓壙	28
第32図	第12号墓壙出土遺物(1)	29
第33図	第12号墓壙出土遺物(2)	30
第34図	第13号墓壙	31
第35図	第13号墓壙出土遺物	31

第36図	第14号墓壙	32
第37図	第14号墓壙出土遺物(1)	33
第38図	第14号墓壙出土遺物(2)	34
第39図	第16号墓壙	35
第40図	第16号墓壙出土遺物	35
第41図	第17号墓壙	36
第42図	第17号墓壙出土遺物(1)	37
第43図	第17号墓壙出土遺物(2)	38
第44図	第18号墓壙	38
第45図	第18号墓壙出土遺物	39
第46図	第19号墓壙	40
第47図	第19号墓壙出土遺物	40
第48図	墓碑拓影	41
第49図	II A区焼土遺構	42
第50図	II A区焼土遺構出土遺物	42
第51図	第1号、第2号掘立柱建物跡	45
第52図	柱穴、土壙断面図(1)	47
第53図	柱穴、土壙断面図(2)	48
第54図	柱穴、土壙出土遺物	49
第55図	第1号炉跡	50
第56図	第1号炉跡出土遺物	50
第57図	第2号炉跡 検出状況、操業時	52
第58図	第2号炉跡 完掘状況	53
第59図	第2号炉跡出土遺物(1)	54
第60図	第2号炉跡出土遺物(2)	55
第61図	第2号炉跡出土遺物(3)	56
第62図	第3号炉跡 検出状況	58
第63図	第3号炉跡断面図	59
第64図	第3号炉跡出土遺物	60
第65図	I B区焼土遺構	62
第66図	I F区墨炭の広がり	63
第67図	I B区焼土遺構、I F区炭の広がり出土遺物	63
第68図	II J区VI b層遺物出土状況	65
第69図	遺構外出土遺物(1)	80
第70図	遺構外出土遺物(2)	81
第71図	遺構外出土遺物(3)	82
第72図	遺構外出土遺物(4)	83
第73図	遺構外出土遺物(5)	84

第74図	遺構外出土遺物(6)……………	85
第75図	遺構外出土遺物(7)……………	86
第76図	遺構外出土遺物(8)……………	87
第77図	遺構外出土遺物(9)……………	88
第78図	遺構外出土遺物(10)……………	89
第79図	遺構外出土遺物(11)……………	90
第80図	遺構外出土遺物(12)……………	91
第81図	遺構外出土遺物(13)……………	92
第82図	遺構外出土遺物(14)……………	93
第83図	遺構外出土遺物(15)……………	94
第84図	遺構外出土遺物(16)……………	95
第85図	遺構外出土遺物(17)……………	96
第86図	遺構外出土遺物(18)……………	97
第87図	溶解炉(1)……………	103
第88図	溶解炉(2)……………	103

図 版 目 次

第1図版	調査区(西から)、II C、D区墓壙域……………	111
第2図版	第2号炉跡と出土遺物……………	112
第3図版	第3号炉跡 検出状況、断面……………	113
第4図版	第2号掘立柱建物跡、II I、J区遺物出土状況……………	114
第5図版	II J区出土の陶磁器……………	115
第6図版	第12号墓壙、II J区出土遺物(陶磁器)……………	116
第7図版	第3号墓壙、遺構外出土遺物(陶磁器、播鉢、土製品)……………	117
第8図版	墓壙、遺構外出土遺物(土製品、石製品、銅製品)……………	118
第9図版	遺構外出土遺物(羽口)……………	119
第10図版	遺構外出土遺物(埴塼、鉄滓)……………	120

付 表 目 次

第1表	第1号掘立柱建物跡柱穴計測表……………	44
第2表	第2号掘立柱建物跡柱穴計測表……………	44
第3表	鉄銭計測表……………	98
第4表	鉄滓の分布……………	99
第5表	自然遺物(貝類)……………	101
第6表	自然遺物(魚類)……………	101
第7表	自然遺物(哺乳類、鳥類)……………	101
第8表	墓壙の切り合い……………	102
第9表	黒森町I遺跡出土陶磁器の変遷……………	107

I 調査経過

1. 調査に至る経過

黒森町 I 遺跡は、宮古市黒森町75-1, 75-3, 76-3, 77-1に所在します。平成元年、宅地造成に伴って行われた試掘により、陶磁器、銅銭、掘立柱建物の跡などが検出され、江戸時代の遺跡であることが確認されてきました。

今回の本調査は、本遺跡内における宅地造成によるものであり（平成3年3月28日(有)オガサワラ産業により申請）、申請者と宮古市教育委員会との協議の結果、遺跡の記録保存を前提とした緊急発掘調査を実施するに至りました。

2. 調査要旨

調査地 宮古市黒森町75-1, 75-3, 76-7, 77-1

調査原因 宅地造成（オガサワラ産業）

調査期間 平成3年4月1日～平成3年7月21日

調査対象面積 1200㎡

調査面積 1200㎡

検出遺構 墓壇 19基、掘立柱建物跡 2棟、鑄造関連の炉跡 2基、遺物包含層

出土遺物 陶磁器（江戸時代）、銅銭、鉄銭、鉄製品、鑄型、鉄滓など

3. 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査総括 大 森 翼 宮古市教育委員会社会教育課長

山 崎 吉 章 宮古市教育委員会社会教育係長

坂 下 昇 宮古市教育委員会社会教育係主任

調査員 高 橋 憲太郎 宮古市教育委員会社会教育係主事

鎌 田 祐 二 宮古市教育委員会社会教育係主事

阿 部 豊 宮古市教育委員会社会教育係埋蔵文化財調査員(主担当)

調査の実施にあたり、次の各位から多大の御協力をいただいた。

<地 権 者> (有)オガサワラ産業

<発掘調査> 古館 友三 佐々木 茂 北村 忠治 吉田 昭 佐伯 裕則 崎山 幸治郎

中屋 東一 小野寺 青治郎 木村 博 刈屋 昭三 今津 東一 菊地 清八

神林 信吉 山内 専太郎 永田 美弥子 久保田 チエ 久保田 亜矢子

山野目 崇子 斎藤 貞子 菅原 テルミ 藤谷 晶子 館崎 礼子

<整理作業> 永田 美弥子 久保田 チエ 中村 明子

II 遺跡の位置と環境

1. 宮古市の地形概観

宮古市は、岩手県の三陸沿岸のほぼ中央に位置する。海岸線は、宮古を境として北は隆起海岸、南は沈降海岸を形成している。南の海岸線はリアス式海岸として名高く、天然の良港に恵まれ、多くの景勝地を有する。

北東に突出する重茂半島は、本州最東端に位置し、宮古湾を形作っている。北東にむかって展望のひらけた湾をもつ宮古市の西と北には黒森山山地、南には花輪山地の小起伏山地が控え、その前面に千徳丘陵、八木沢丘陵が連なっている。

宮古湾には、南から津軽石川、西から閉伊川の二つの大きな河川が流れ込んでいる。閉伊川は黒森山山地と花輪山地の間を貫いて流れ、支流の山口川は北西から黒森山山地、千徳丘陵を開析して流れ、閉伊川河口付近で合流する。現在の市街地は両河川の氾濫平野の上に築かれており、黒森町Ⅰ遺跡は、千徳丘陵の末端部に位置し、市街地からは約700メートルの距離にある。

江戸時代の宮古

ここで黒森町Ⅰ遺跡の背景となる宮古の江戸時代を大まかに振り返ってみたい。

「東北太平洋岸の海運が動き始めるのは、慶長末年か元和初年（1610年代）である」（註1）。宮古に代官所が設置されたのが慶長16年（1611年）とされている。ついで元和元年（1615年）南部27代藩主利直が、津浪巡見の際に宮古村を訪れ、町割り（都市計画）を決め、宮古港の開港を進めたと言われている。

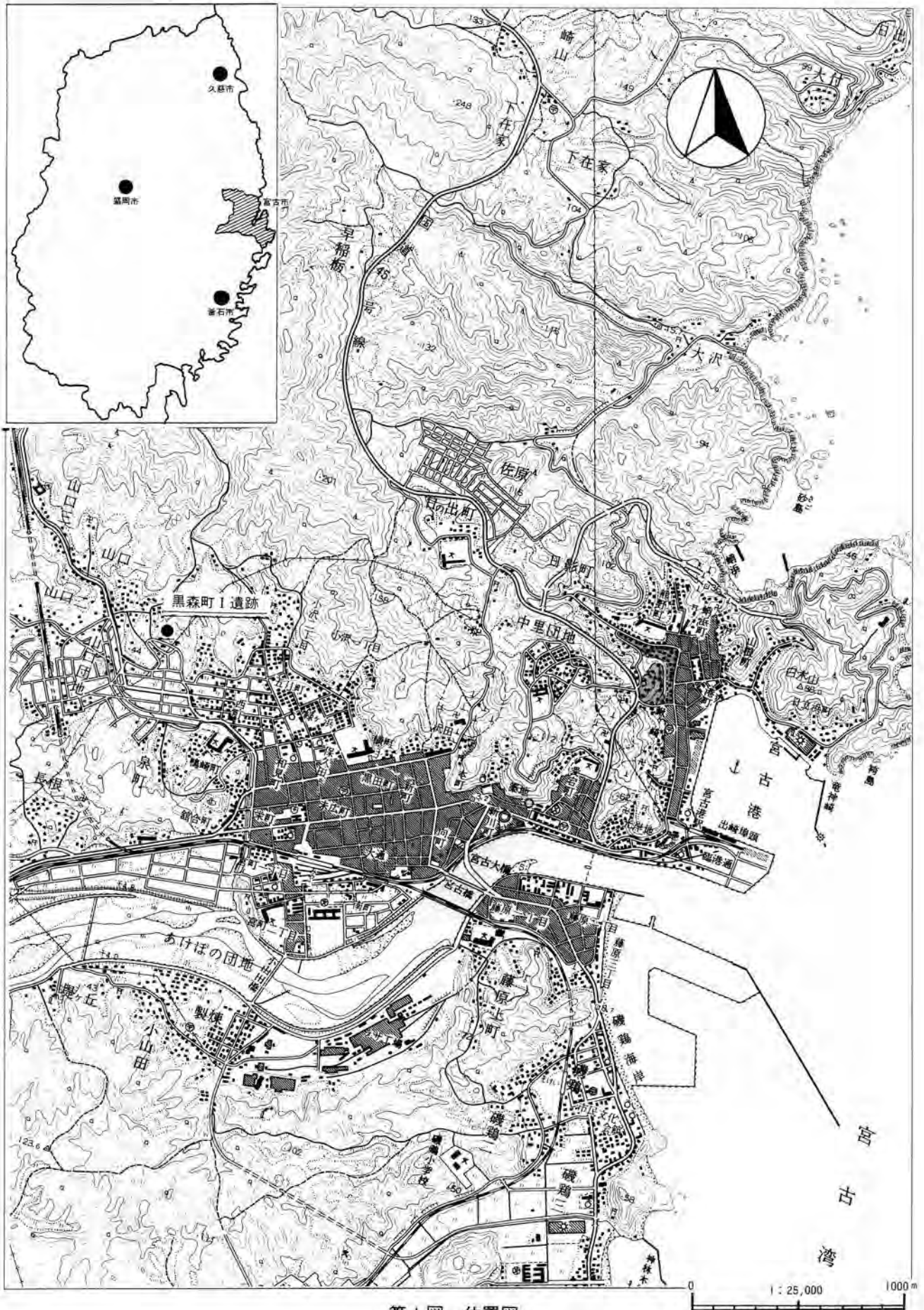
「北上川の舟運で南部藩米が運ばれるのは慶安期（1648～51）からで、それ以前は三陸沿岸の宮古、大槌、山田などの諸湊から積み出された」（註2）南部藩の商港兼軍港として整備が進められていくなかで、宮古は、宮古港に面した嶽々崎地区を中心に発展していく。

藩米の移送が、北上川経由の石巻湊に移されてからは、産物である海産物、鉄、材木の移送に力をいれている。ことに長崎俵物と称された海産物（塩鮭、のしあわび、カンボウ、フカヒレ、イリコなど）の取引が盛んに行われ、藩の財政をうのおわしている。

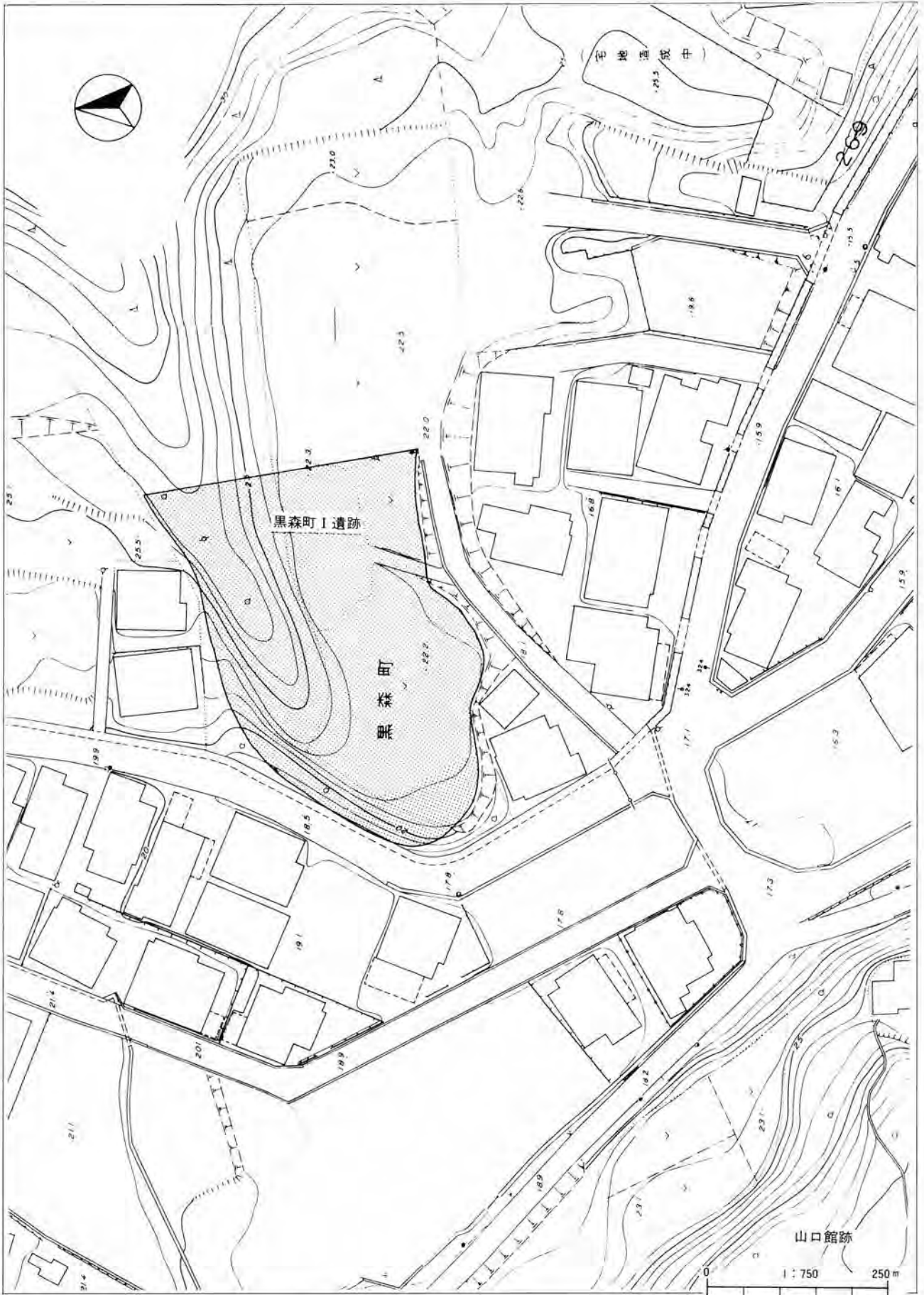
また寛文11年（1671年）河村瑞軒により東廻り航路が開発されると、那珂湊からの陸送が廃止され、江戸と直結することとなり、海運業はさらに促進されていくことになる。

寛文4年（1664年）に八戸藩が分封されると、南部藩は九戸の製鉄地帯を失い、下閉伊地方の鉄山経営に力をいれることになる。その生産活動が活発になるのは18世紀後半以降のことである（註3）。そのころから宮古でも鉄を巡る動きがみられ、岩泉から移送される荒鉄の記録などが残っている。安政4年（1856年）に大島高任が洋式高炉の建設に成功し、その9年後元治2年、宮古通近内村（宮古市の西方、近内川の小さな谷間に位置する）に製鉄場を建設することになる。大島高任らが、御用懸りに任命され、翌年建設に着手している。結局、実現にいたらずに終わるわけであるが、宮古の鉄の歴史のなかでも解明すべき点の多い、特筆に価する出来事である。

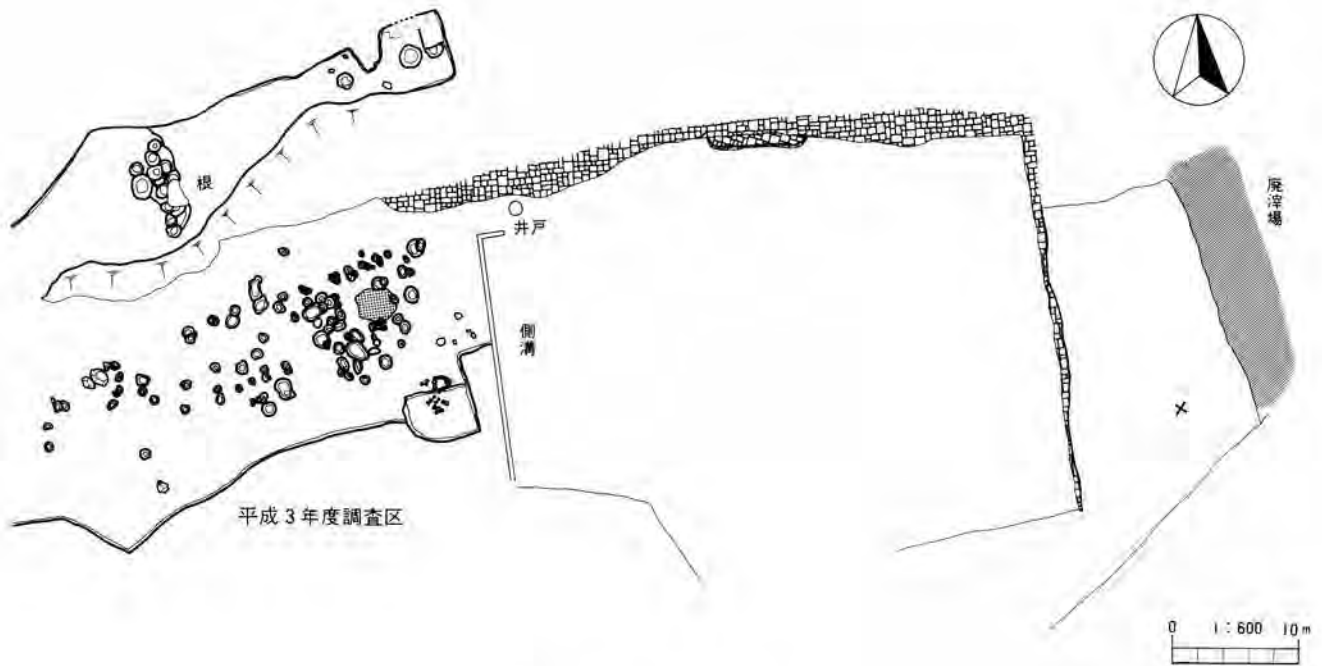
明治になると宮古港は、函館戦争の前哨戦となった明治2年の宮古港海戦の舞台となっている。宮古では、明治にはいと海岸の埋立工事が始まる。埋立工事は、昭和まで続き、現在の市街地が形成されていく。それにつれて生活の舞台も宮古港周辺から現在の市街地へ移っていくことになる（註4）。



第1図 位置図



第2図 周辺の地形



第3図 遺跡の立地状況

遺跡の周辺

黒森町Ⅰ遺跡は、黒森山の登り口に位置する。黒森山の中腹にある黒森神社は、応安三年（1370年）の棟札をもつ宮古地方で最古の神社である。本遺跡の南には山口館跡があり、山口館は小笠原氏が築城し、拠った所と伝えられている。また、本遺跡の尾根の北に位置する洞地は、寺沢と呼ばれ、天保5年（1834年）廃寺となった赤龍寺跡と言われている場所である。

ここで今回の調査区が、黒森町Ⅰ遺跡全体のなかで占めている位置を確認しておきたい。

黒森町Ⅰ遺跡は、尾根と削平地からなる。今回の調査区は、遺跡の西端に当たる側溝から西の部分である。北斜面には高さ3メートルばかりの石垣が廻してある。東は、高さ約1メートルの石垣を組み、段差を設けて上下の平地を区画している。

下段の平地は、現在畑地であるが、屋敷が建っていたといわれている。上段の平地には、×印の位置に巨石が据えてある。古老の話では、釜（溶解炉103頁参照）の置かれていたといわれる場所で、昔から大事にされてきたということである。井戸は3基あったといわれているが、現在1基しか確認されていない。

上段の平地の背後は急傾斜地であるが、比高十数m付近まで鉄滓が敷き詰めたように広がる廃滓場となっている。

註1．渡辺信夫「海からの文化」(河出書房新社 1992年)

註2．註1同14頁

註3．岩手県立博物館「北の鉄」1990年

註4．「宮古のあゆみ」(昭和49年)「宮古市史年表」(平成3年)

Ⅲ 調査内容

1) 調査の方法

調査対象区域は、東西に延びる尾根の先端部であり、尾根と削平、整地された平坦部に分かれる。調査にあたり、平坦地をⅠ区、尾根をⅡ区とし、ベルトを境にしてそれぞれを更にA～J区に分けた。

2) 基本層序 (第5図、第6図)

調査区では、大別して9層の土層が観察された。

Ⅰ層は表土で、調査区全体を覆っている。建物跡が検出したⅠ区中央部ではかなり薄く、周辺部ではやや厚目に堆積する。基本土は締まりのない暗褐色出土で、Ⅱ区では鉄滓などの遺物を含む。

Ⅱ層は盛土層で、Ⅰ区の南斜面を覆う。基本土は真砂土の混じる暗褐色土。Ⅱb層は、炭化物、真砂土を含む。

Ⅲ層は、Ⅰ区中央部から南に広がる層で、基本土は締まりのある褐色土。Ⅲb、Ⅲc層は焼土の混じる暗褐色土や真砂土を多く含む褐色土。

Ⅳ層は、南の斜面で観察された旧表土層である。→第63図(57頁)参照。

Ⅴ層は、古い盛土層で、第3号炉が構築される以前に盛られた層である。基本土は固くやや締まりのある褐色土。Ⅴb層は固めの黄褐色土層。Ⅳc層は、締まりのある褐色土。Ⅰ区の遺構のほとんどがⅤ層上面から掘り込まれている。

Ⅵ層、Ⅶ層、Ⅷ層、Ⅸは、ⅡI、J区に堆積する層である。→第68図(63頁)参照。

Ⅵ層は2層に細分される。Ⅵa層の基本土は、柔らかく締まりのない暗褐色土。Ⅵb層は、やはり柔らかく締まりのない褐色土であるが、下層に細砂層が薄く堆積する。Ⅵ層から本遺跡の大半の遺物が出土している。

Ⅶ層は、にぶい黄褐色土を基本土とする遺物を含まない層である。

Ⅷ層はⅡI区の北側に堆積する層である。

Ⅸ層は、黒褐色土を基本土とし、鈍い黄褐色土が混じる締まりのある層である。縄文土器片が出土している。

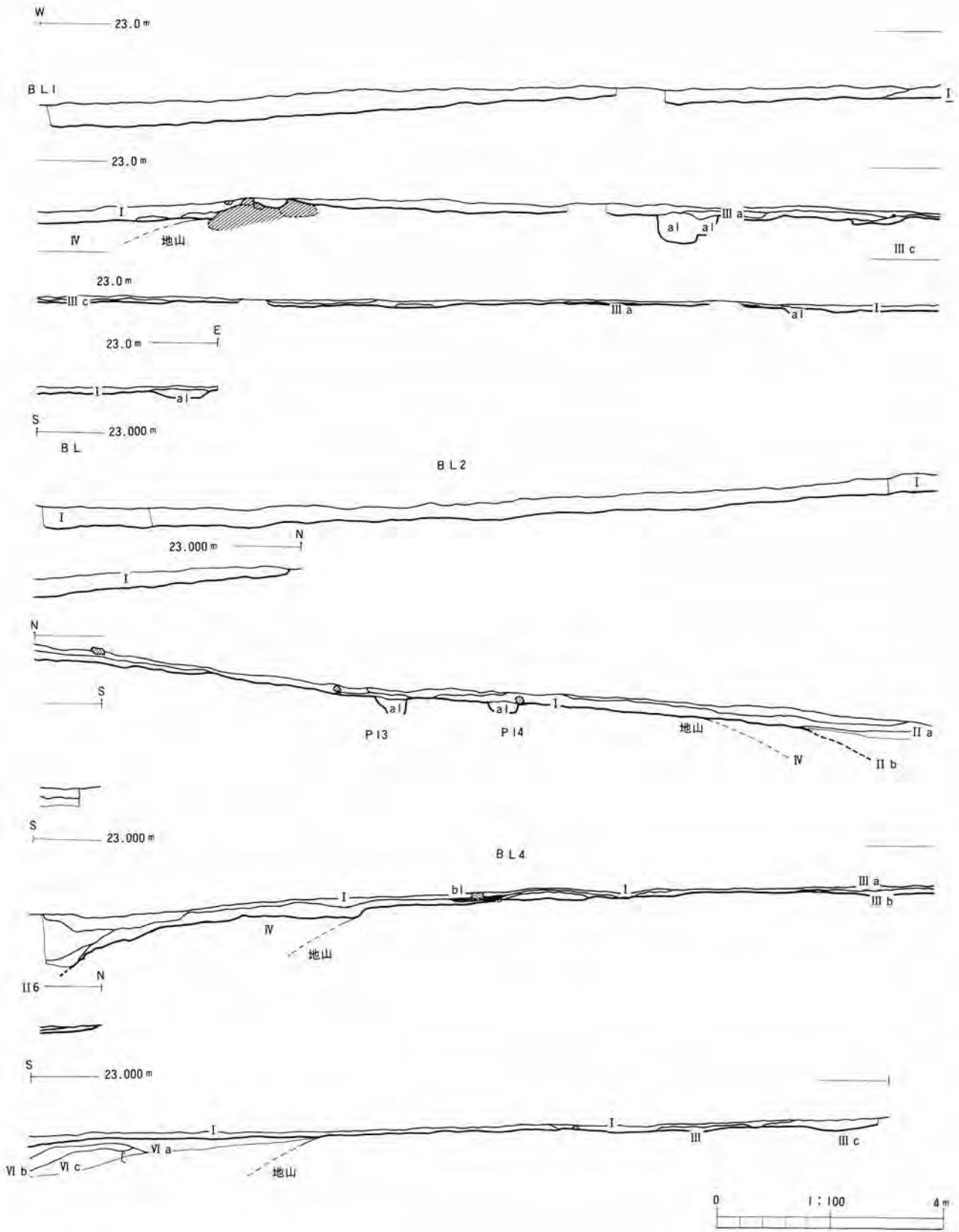
Ⅹ層は、褐色土を基本土とし、暗褐色土が混じる柔らかく締まりのない層である。

Ⅰ区とⅡ区の堆積層の対応関係は確認できなかった。

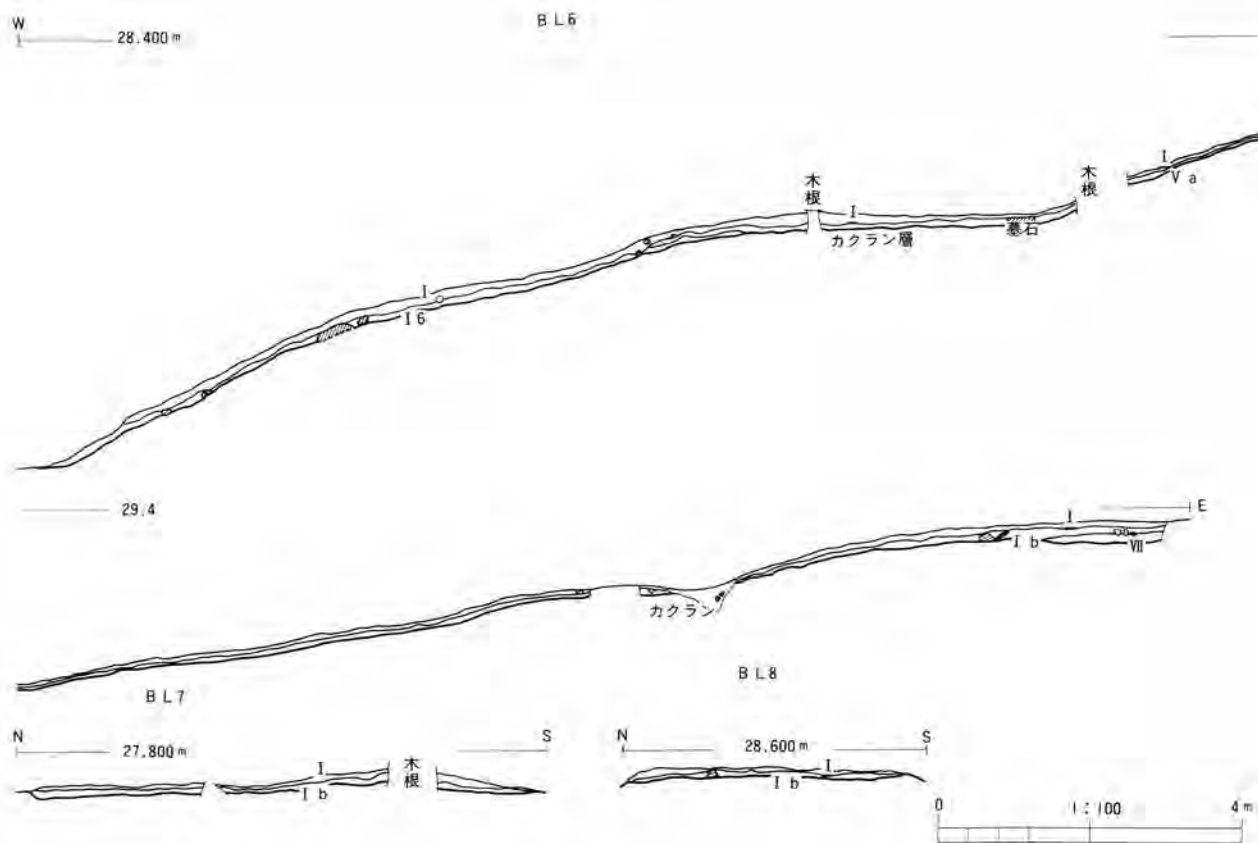


第4図 調査区全体図

B L 1



第 5 図 調査区土層断面図 (I 区)



第6図 調査区土層断面図（II区）

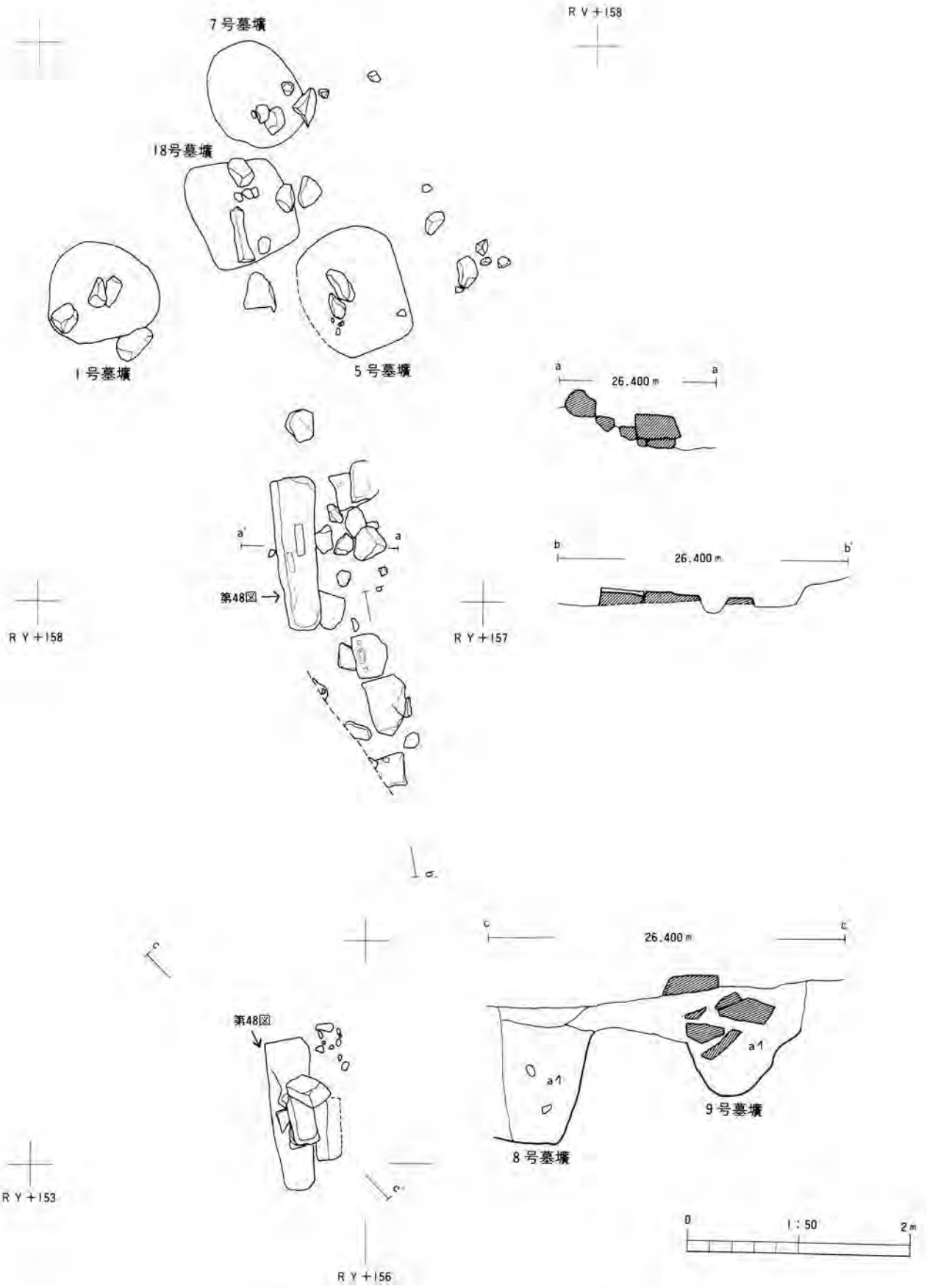
3) 遺構の検出状況

検出された遺構は、墓墳19基、大量の遺物を含む遺物包含層、掘立柱建物跡2棟、炉跡3基と炭の広がりを含む焼土遺構である。

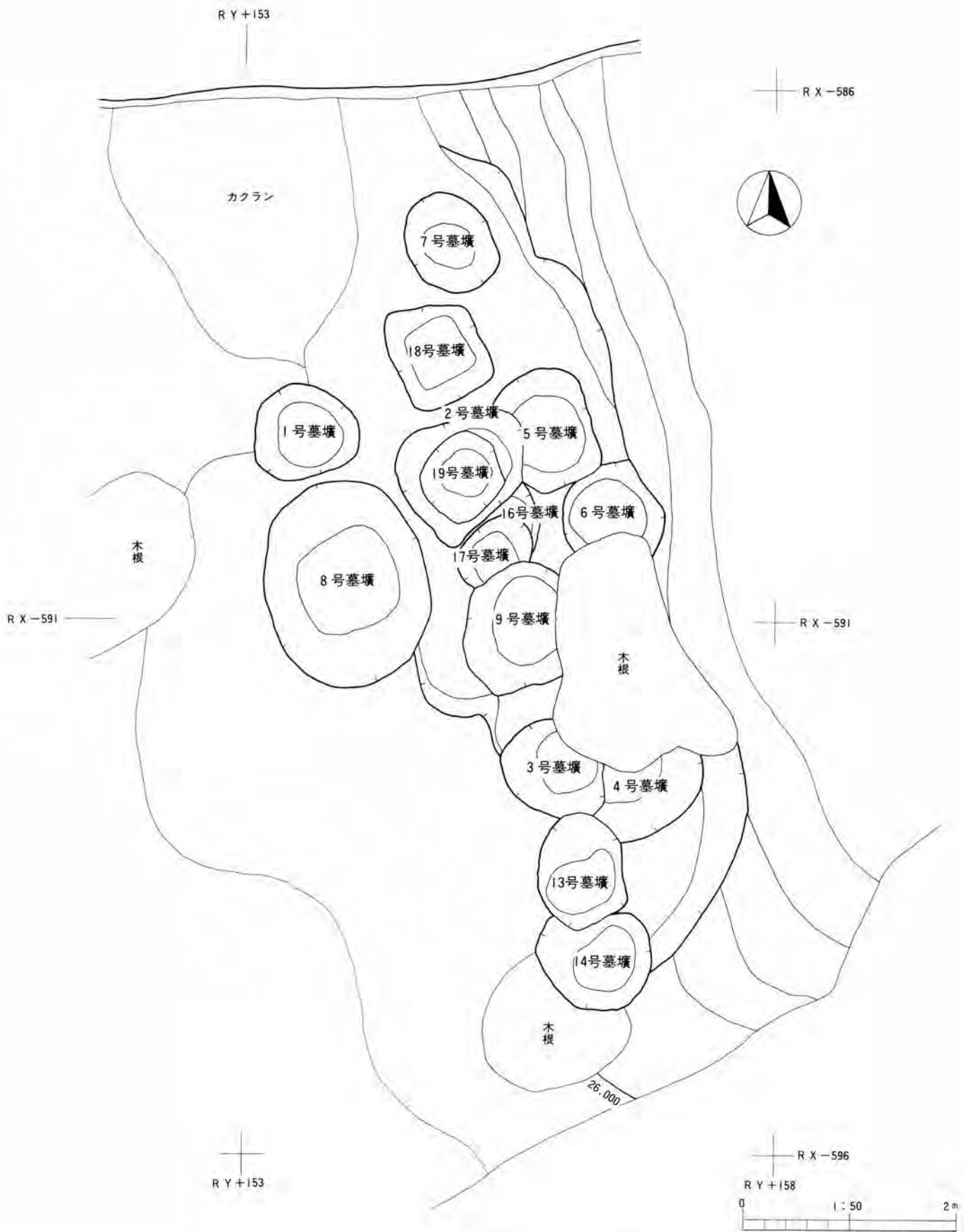
墓墳は、II C, D区で16基、II H区で1基、II I, J区で3基検出した。II C, D区の墓墳の大部分が攪乱を受けており、掘り込み面は不明であるが、一部はV層上面から掘られている。II H, I, J区の墓墳はVI層上面が掘込面である。(第7図)

遺物包含層は、尾根上段のV層である。

掘立柱建物跡2棟の検出面は、I区IV層面である。炉跡と焼土遺構の検出面は、III層上面とVI層上面に分かれる。



第7图 II C, D区墓石、墓坑出土状况

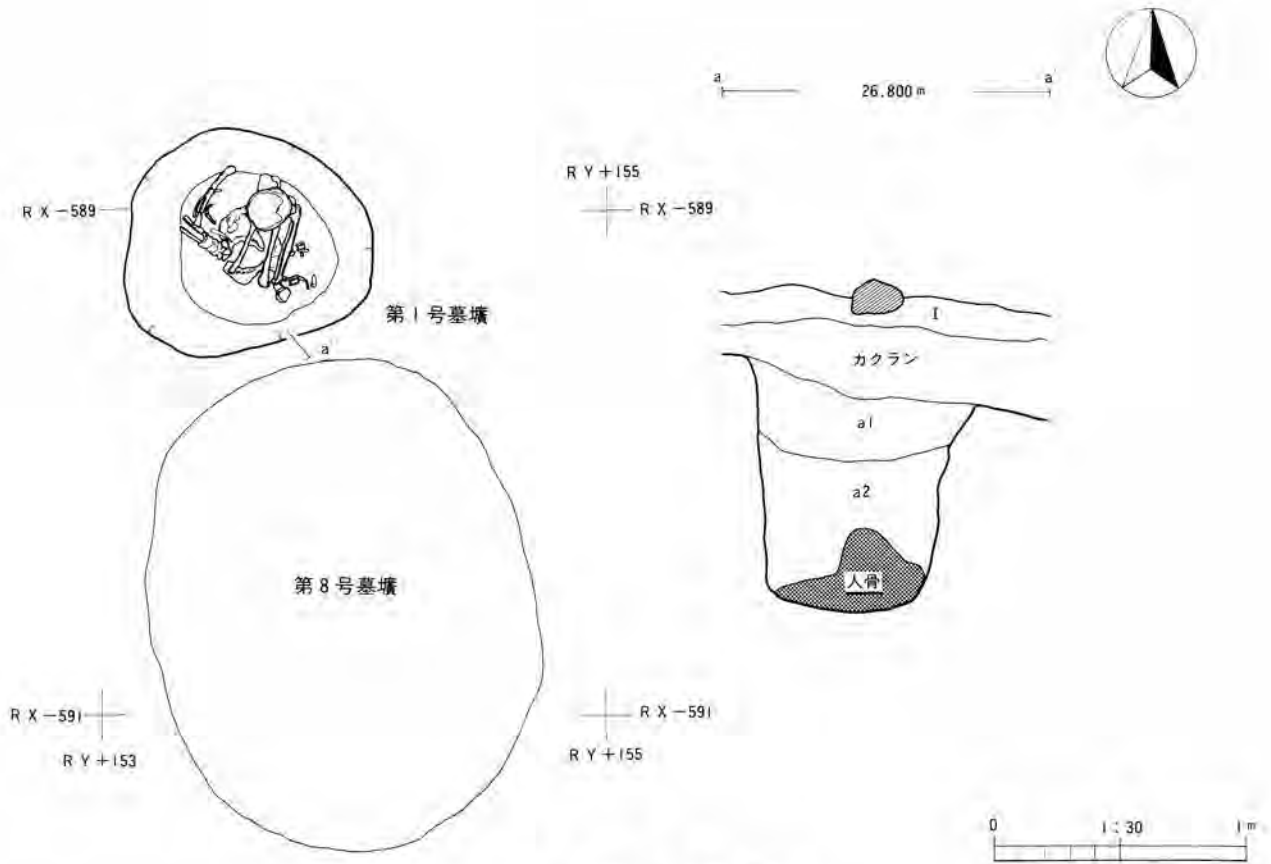


第8図 II C, D区墓塚域

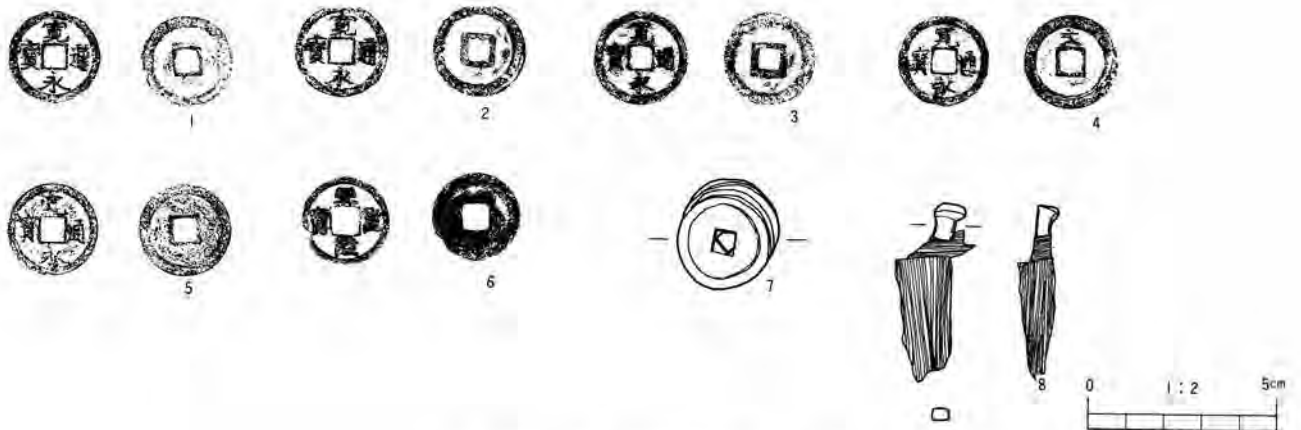
4) 検出された遺構と遺物

a. 墓壙

墓壙域は二つに分かれる。II G, H, I, J区の上段の平場とII C, D区の中段の平場である。上段で3基、中段で16基検出した。II C, D区の墓壙は大部分が重複し、更に後代に大きく攪乱されており(第7図)、墓壙と墓石の関係をつかめないだけでなく、墓壙の新旧関係自体も確認できないものもあった。



第9図 第1号墓壙



第10図 第1号墓壙出土遺物

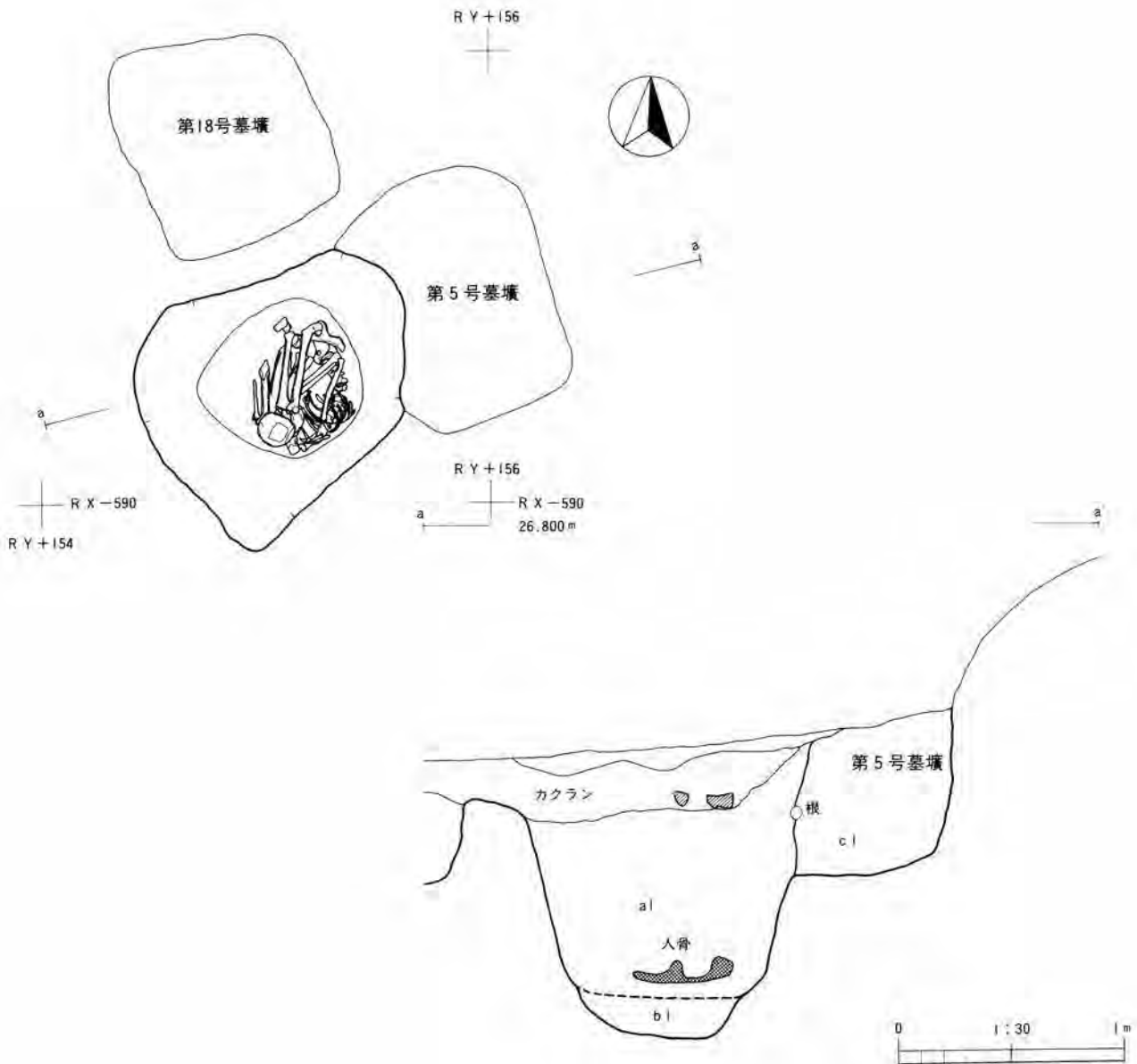
また中段の墓壙域では3基の墓石が出土している(享保十八年(1733年)、安永八年(1779年)、文化口年)。安永八年の墓石は、本遺跡の性格をよく表しているものと思われ、拓影を付した。(第48図)

第1号墓壙(第9図)

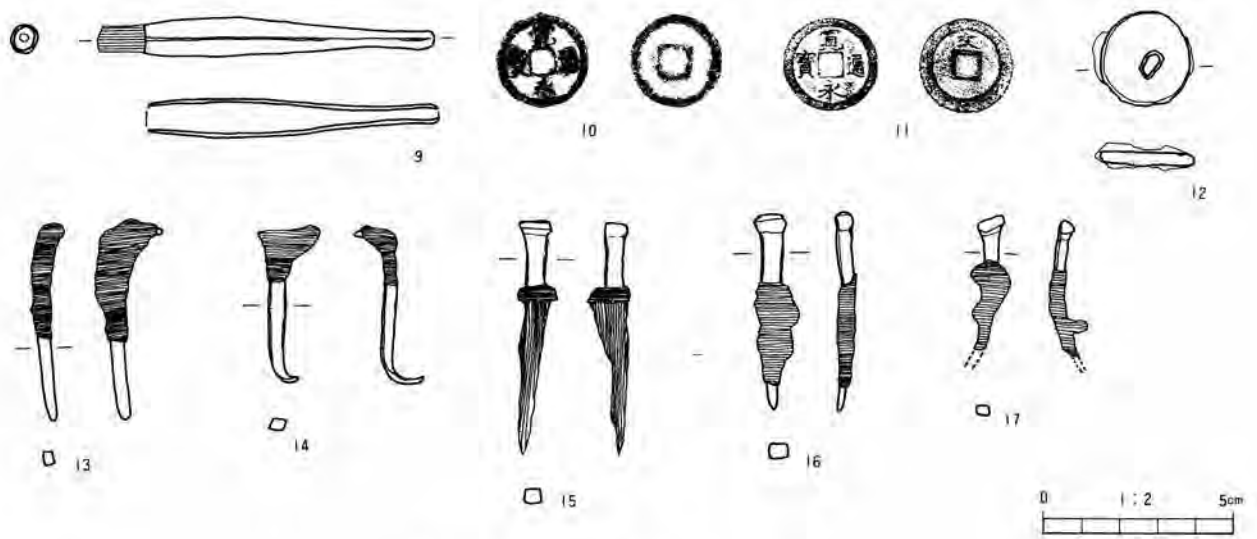
II C区の北西、平坦部の端に位置する。平面形は、不整形で、径95cm×85cm、深さは検出面から90cmを測る。埋土層の基本土は褐色土で、鉄滓と炭が混入する。

**葬法
共伴遺物**

土葬人骨は一体分揃っており、両膝を折り曲げ、その間に頭蓋骨が落ちている。成人、性別不明。共伴遺物は1～5が寛永通寶。4は背文に「文」がはいり、6は元豊通寶である。7は銅銭1～6の出土状況を示す。8は角釘で完形品で木質部が付着している〔4.4cm〕。



第11図 第2号墓壙



第12図 第2号墓壙出土遺物

第2号墓壙（第11図）

II C, D区のはほぼ中央に位置する。第5号墓壙と第16号墓壙を切り、第19号墓壙と重複する。平面形は不整形で、125cm×95cm、深さは検出面から80cmを測る。埋土の基本土は、褐色土である。

土葬人骨は一体分揃っている。両膝を折り曲げ、その上に頭蓋骨がのり、西向きに横たわる。 **葬法**
成人、男性。

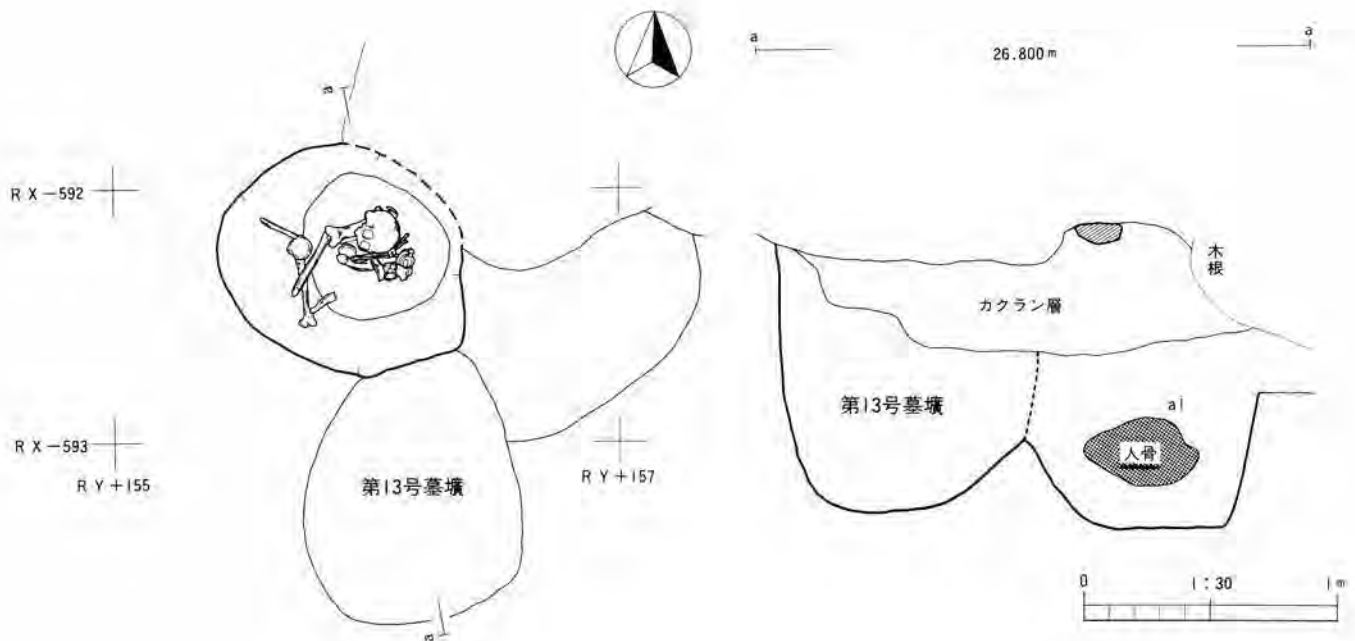
共伴遺物は9が煙管の吸口である〔全長7.7cm×最大径1.1cm〕。10、11は寛永通寶で、11は背文に「文」がはいる。12は鉄銭（銭銘不明）。13～17は木質の付着した角釘である〔完形品で5.6cm～6.4cm〕。 **共伴遺物**

第3号墓墳（第13図）

II D区平坦面のほぼ中央部に位置する。第4号墓墳を切り、第13号墓墳に切られている。平面形は、やや不整形形で100cm×90cm、深さは検出面から50cmを測る。埋土の基本土は、黄褐色土である。

葬法 土葬人骨はほぼ一体分そろい、両膝を立て、その上に頭蓋骨が乗っている。西側の床面から頭蓋骨の一部と大腿骨が出土したが、第4号墓墳のものと思われる。成人、性別不明。

共伴遺物 共伴遺物は18が陶器の鬘盥^{ついで}。埋土の下層から出土したものである。水面に摺絵文様を施す。美濃産で、17世紀前半に伴う〔残長10.2cm×幅3.6cm×高4.1cm〕。19は土製品で地藏菩薩像である。型起こしによる成形で、胎土は、鈍い黄橙色を呈す〔全長8.0cm×最大幅3.2cm〕。20は煙管^{たばこ}の吸口〔全長6.1cm×最大幅1.1cm〕。21～29は寛永通寶、28、29は背文に「文」が入る。31は、木質や糲穀の付着した銅銭。30は鉄銭。32～41は木質の残る角釘で〔完形品で5.0cm～5.3cm〕、42は、つまみの付いた板状の鉄製品である。



第13図 第3号墓墳

第4号墓墳（第15図）

II D区の東、斜面際に位置する。木根のため平面形は不明。第3号墓墳に切られている。深さは検出面から80cm。埋土の基本土は黄褐色土である。

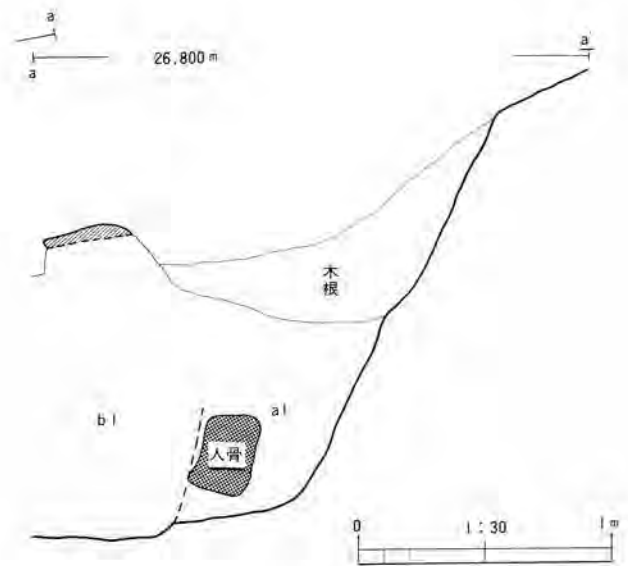
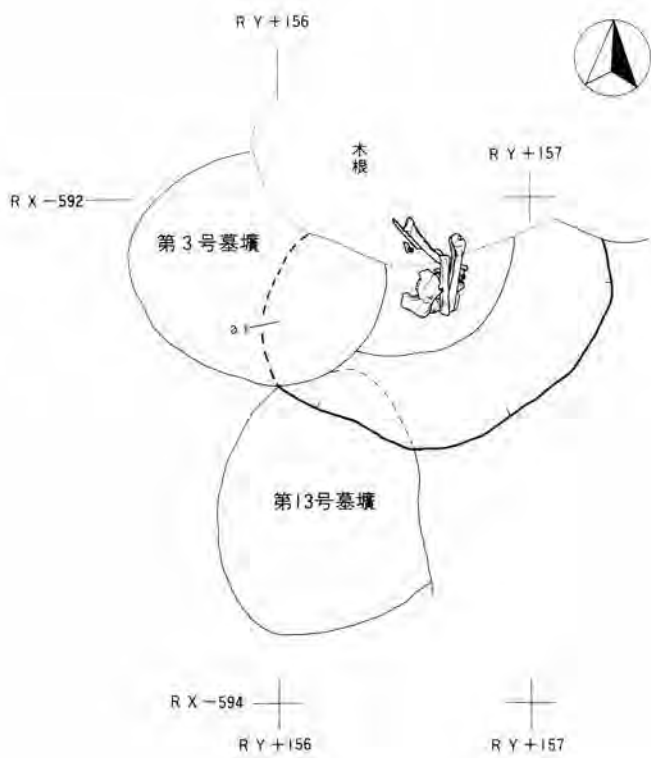
土葬人骨は、頭蓋骨の一部、大腿骨、脛骨、腓骨が出土する。性別不明。

共伴遺物は43は寛永通寶（背文は「文」）である。44は、内面に木質を残す楕円状の輪金具で（鎌の柄の首に使用したものか）〔3.0cm×2.3cm〕、45～56は、木質の付着する角釘〔完形品で5.5cm〕である。

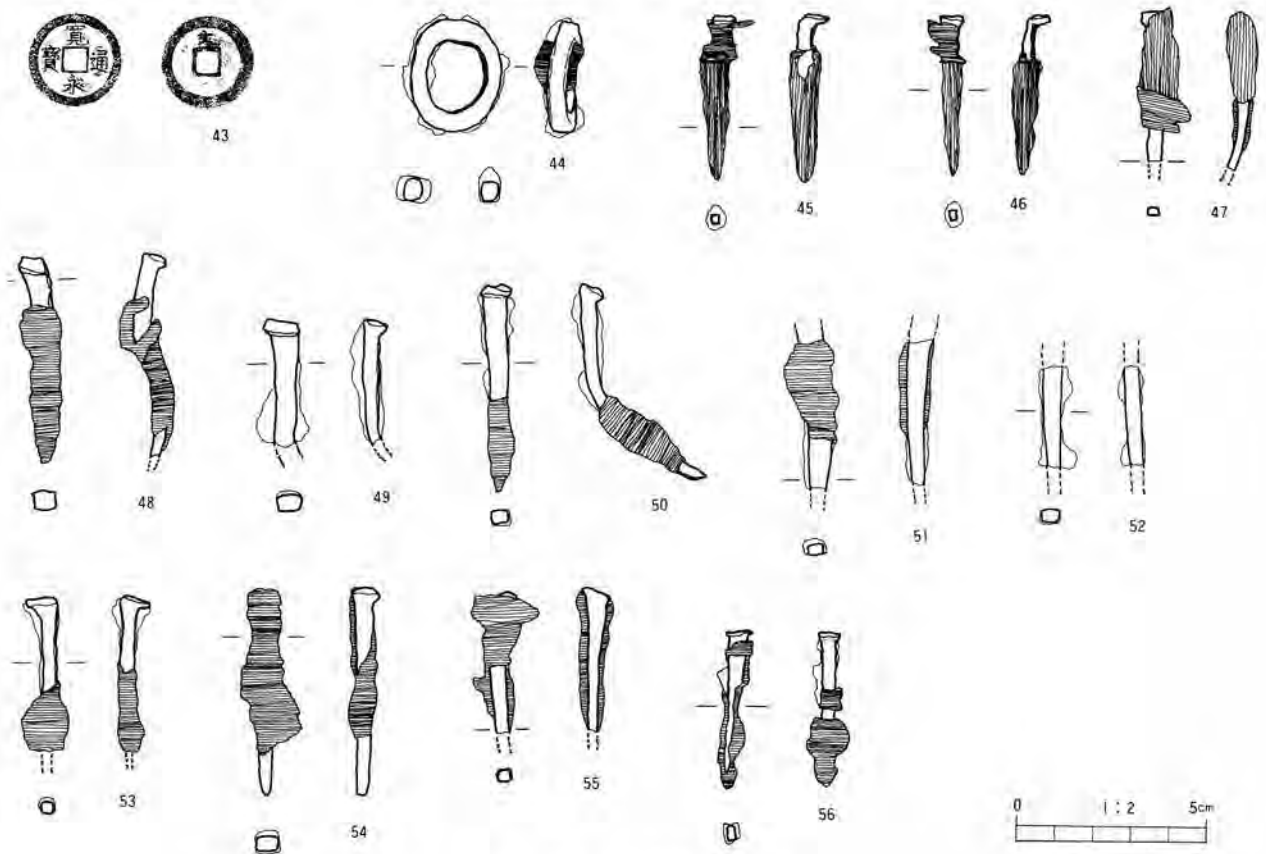
葬法
共伴遺物



第14図 第3号墓墳出土遺物



第15图 第4号墓坑



第16图 第4号墓坑出土遗物

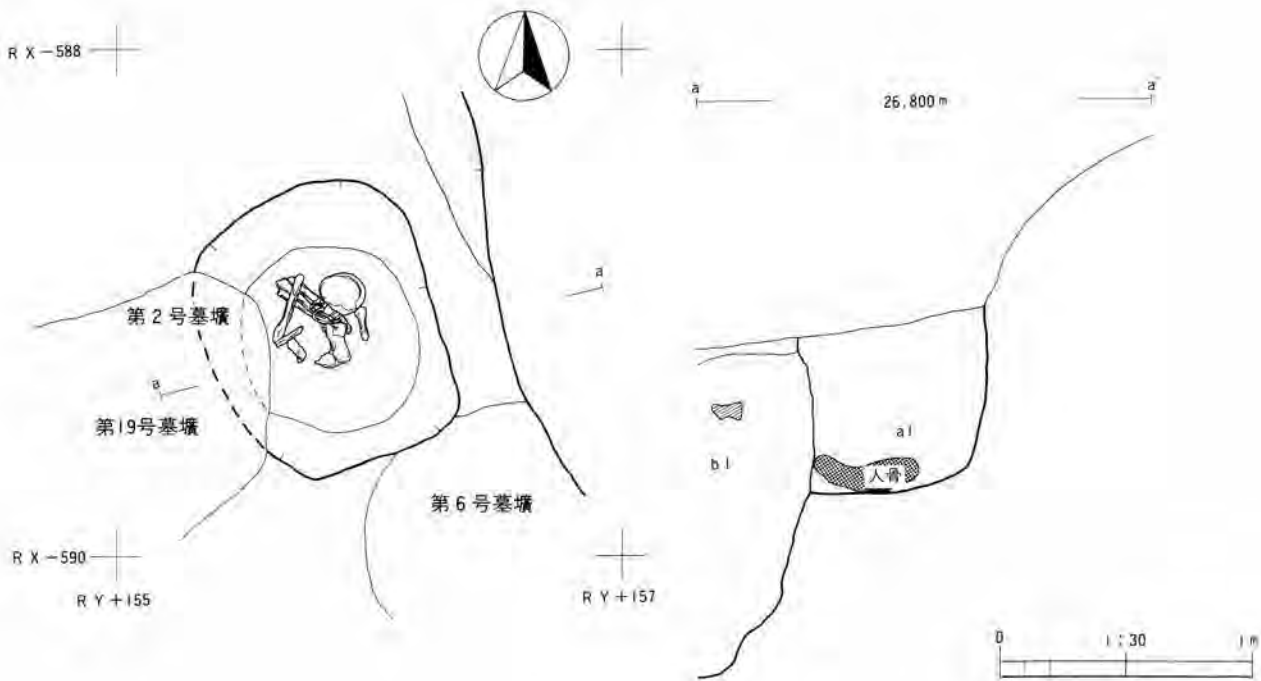
第5号墓壙（第17図）

II C区東の斜面際に位置する。第2号墓壙に切られている。平面は不整形形で110cm×90cm。深さは検出面から65cm。埋土の基本土は軟らかい黄褐色土である。

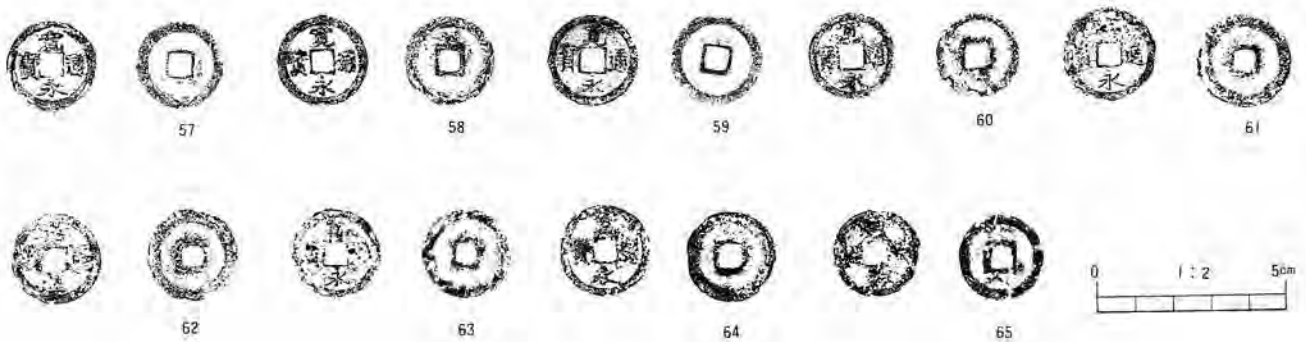
土葬人骨は、頭蓋骨、顎骨、寛骨の一部、大腿骨の一部が出土する。

共伴遺物の57～61、63、64は寛永通寶で62、65は銭銘不明のものである。

葬法
共伴遺物



第17図 第5号墓壙



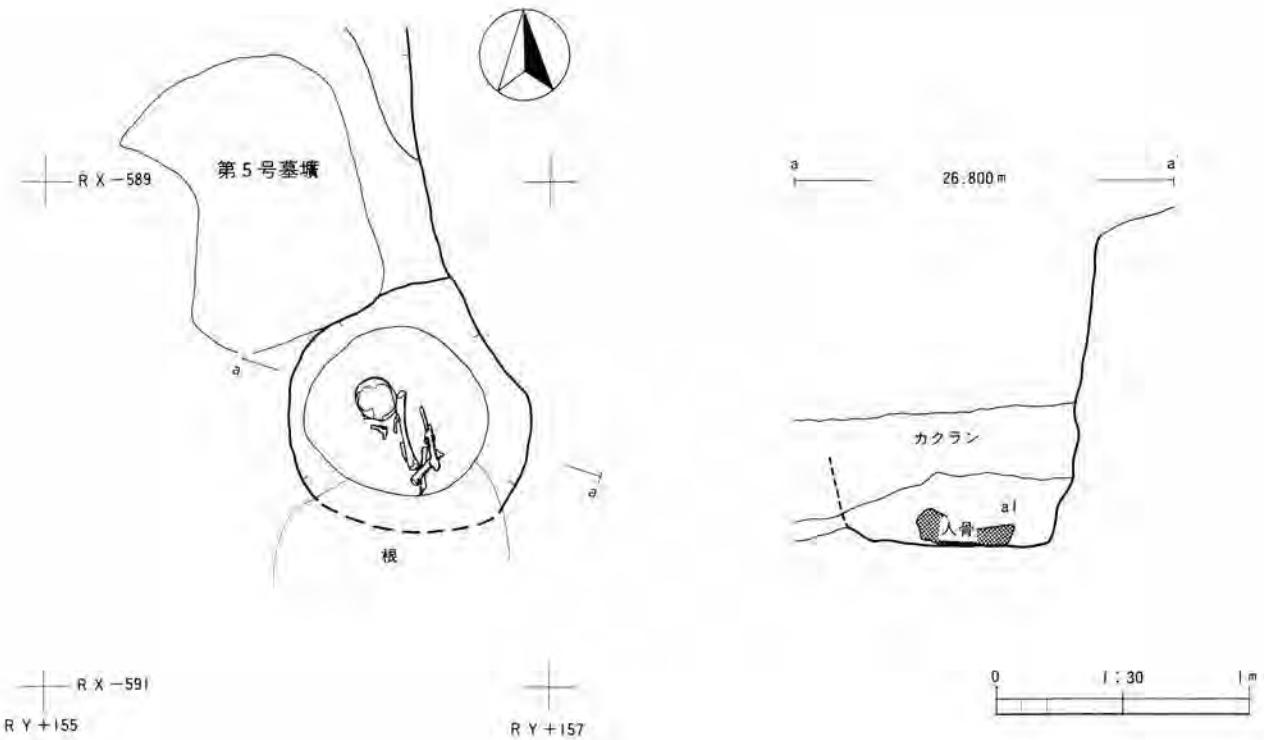
第18図 第5号墓壙出土遺物

第6号墓墳 (第19図)

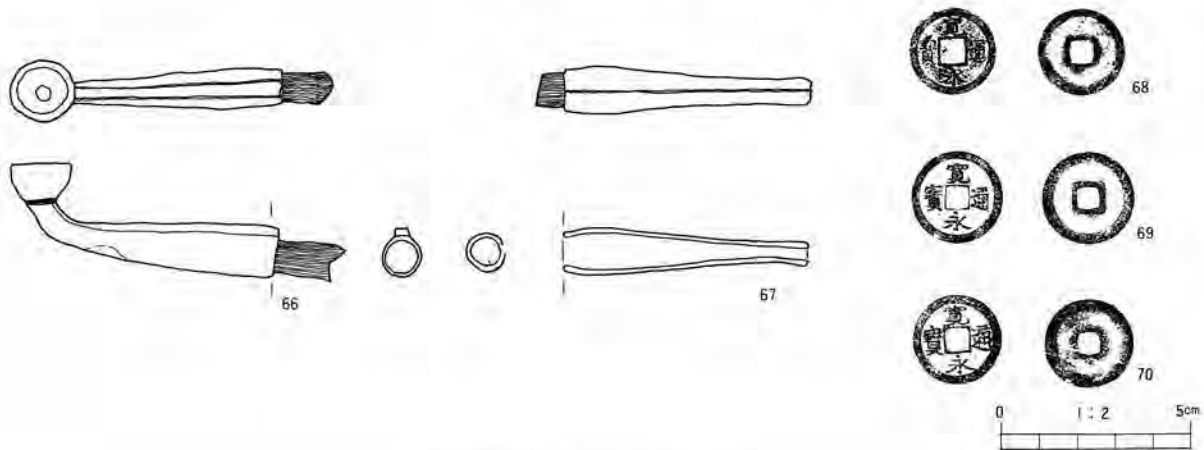
II C、D区中央部、第5号墓墳の南に位置する。平面形はやや不整円形で100cm×90cm。深さは検出面から55cm。

葬法 土葬人骨は、頭蓋骨、顎骨、大腿骨などが出土する。性別不明。

共伴遺物 共伴遺物の66は煙管の雁首で〔全長7.2cm×首部最大径1.6cm×火皿径1.7cm〕、67は吸口〔全長6.5cm×最大径1.3cm〕であり、いずれも羅字の一部が残っている。68～70は寛永通寶である。



第19図 第6号墓墳



第20図 第6号墓墳出土遺物

第7号墓墳（第21図）

II C区の一番北寄りに位置する。C、D区では墓石を伴って検出された唯一の墓墳である。平面形は、楕円形で、100cm×80cm、深さは検出面から85cmを測る。埋土の基本土は褐色土である。

土葬人骨は、ほぼ一体分そろい、小さくまとめられている。再葬墓の可能性も考えられる。

墓石には特に加工痕は認められなかった。

遺物は検出されなかった。

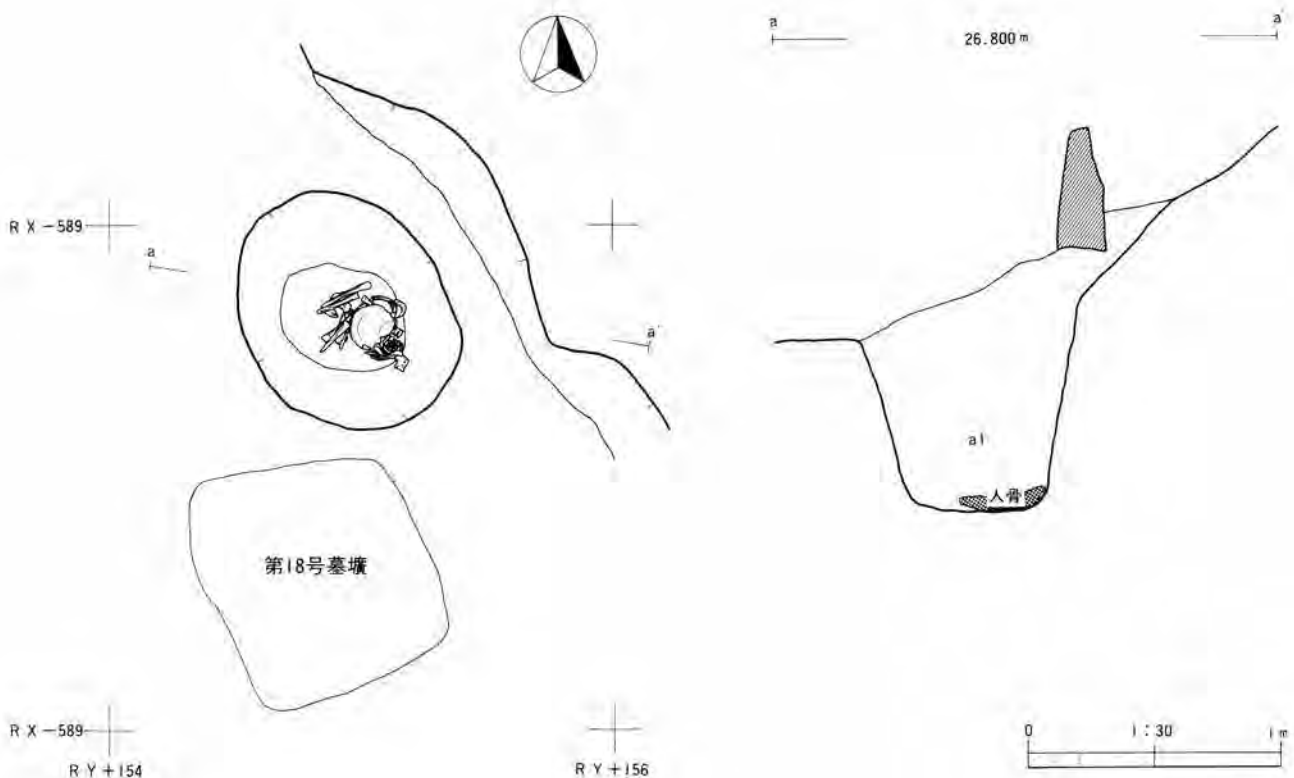
第8号墓墳（第22図）

II C、D区墓墳域の中央に掘り込まれた最も大規模な墓墳である。平面形はやや楕円形を呈し、195cm×150cm、深さは検出面から130cmを測る。埋土の基本土は鈍い黄褐色土である。

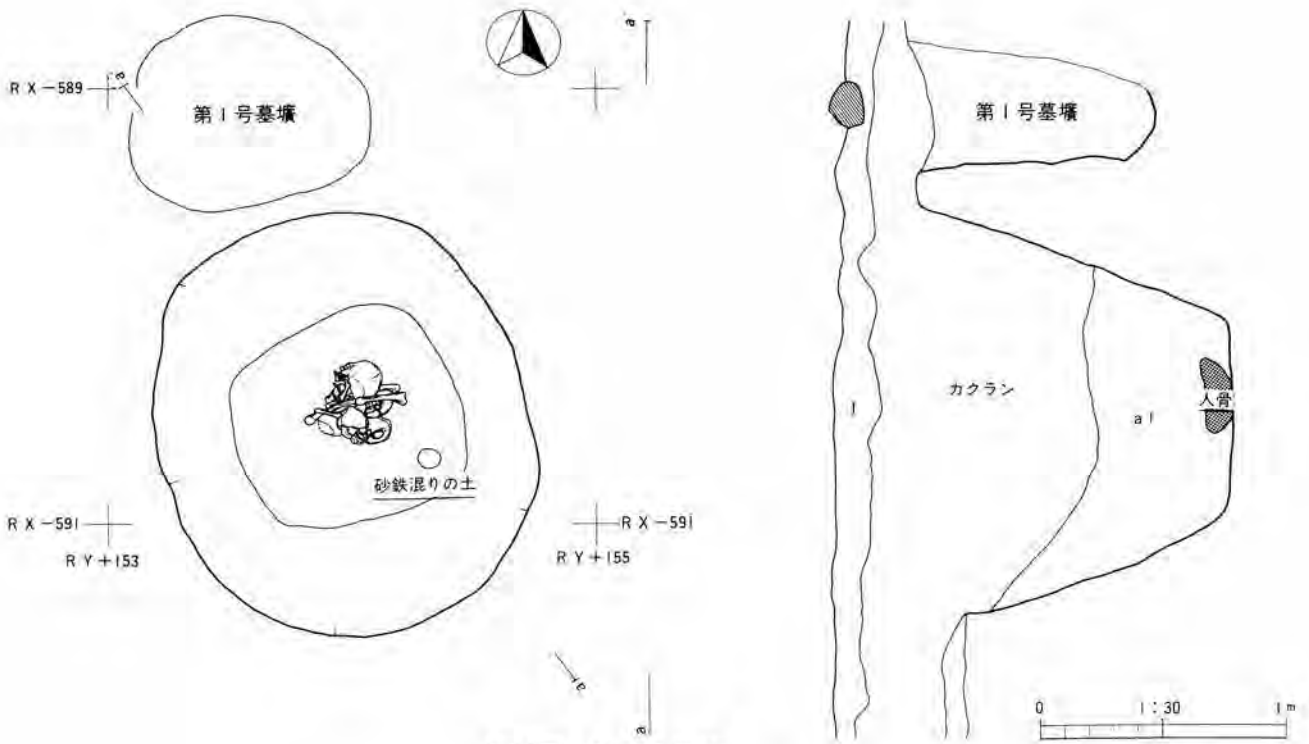
土葬人骨は、ほぼ一体分そろっているが、かなりもろくなっている。膝を立てた姿勢で座り、**葬法** 膝の間に頭蓋骨が落ちている。成人。男性。

共伴遺物は71～91が寛永通寶で、89～91は背文に「文」が入る。92～96は角釘である〔完形品で7.2cm〕。**共伴遺物** 他に南東の床面から砂鉄の混った土が出土している。

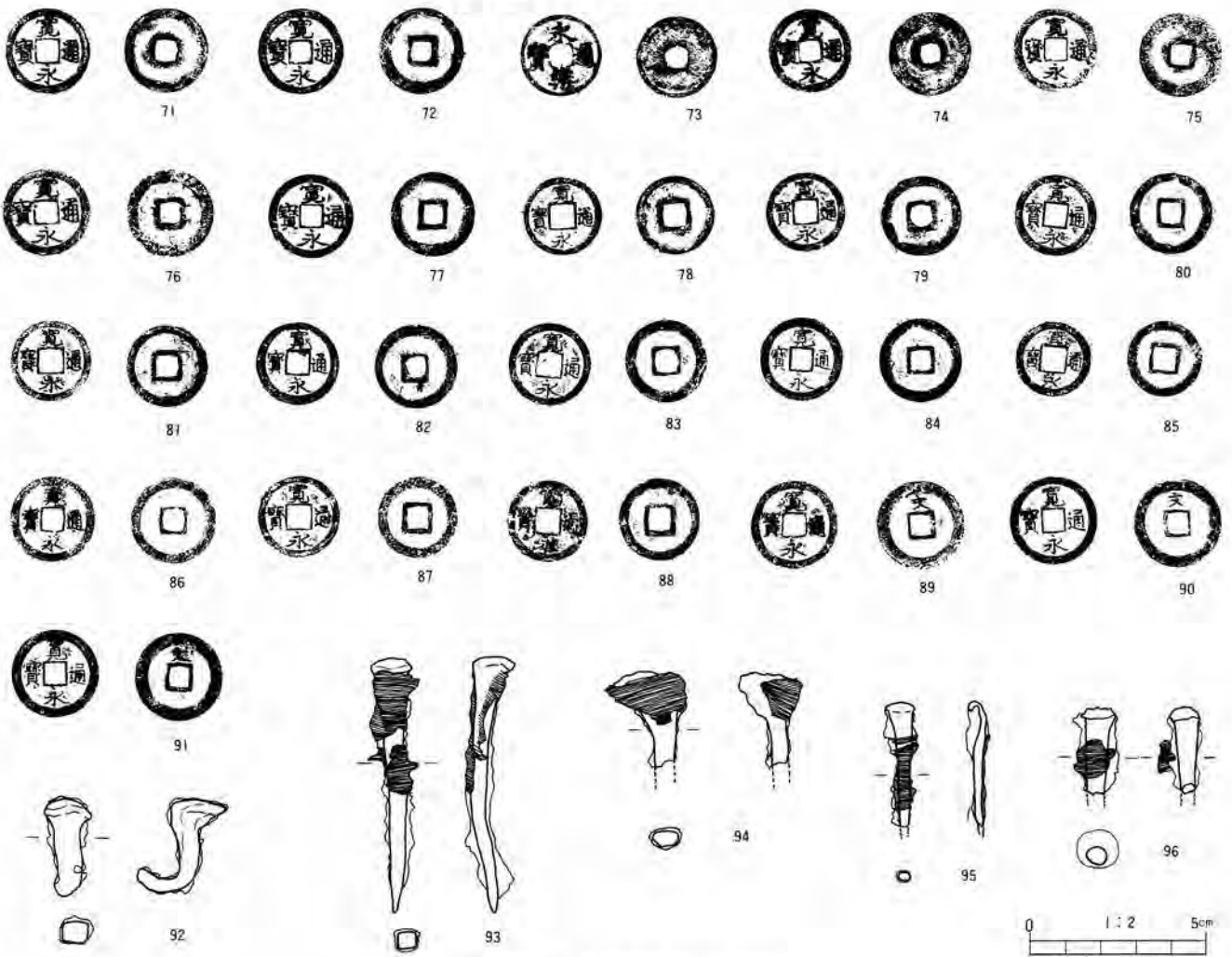
墓墳の規模や位置、遺物等からみて、拓影を付した墓石（第48図）に伴う墓墳ではないかと推測される。



第21図 第7号墓墳



第22図 第8号墓壙



第23図 第8号墓壙出土遺物

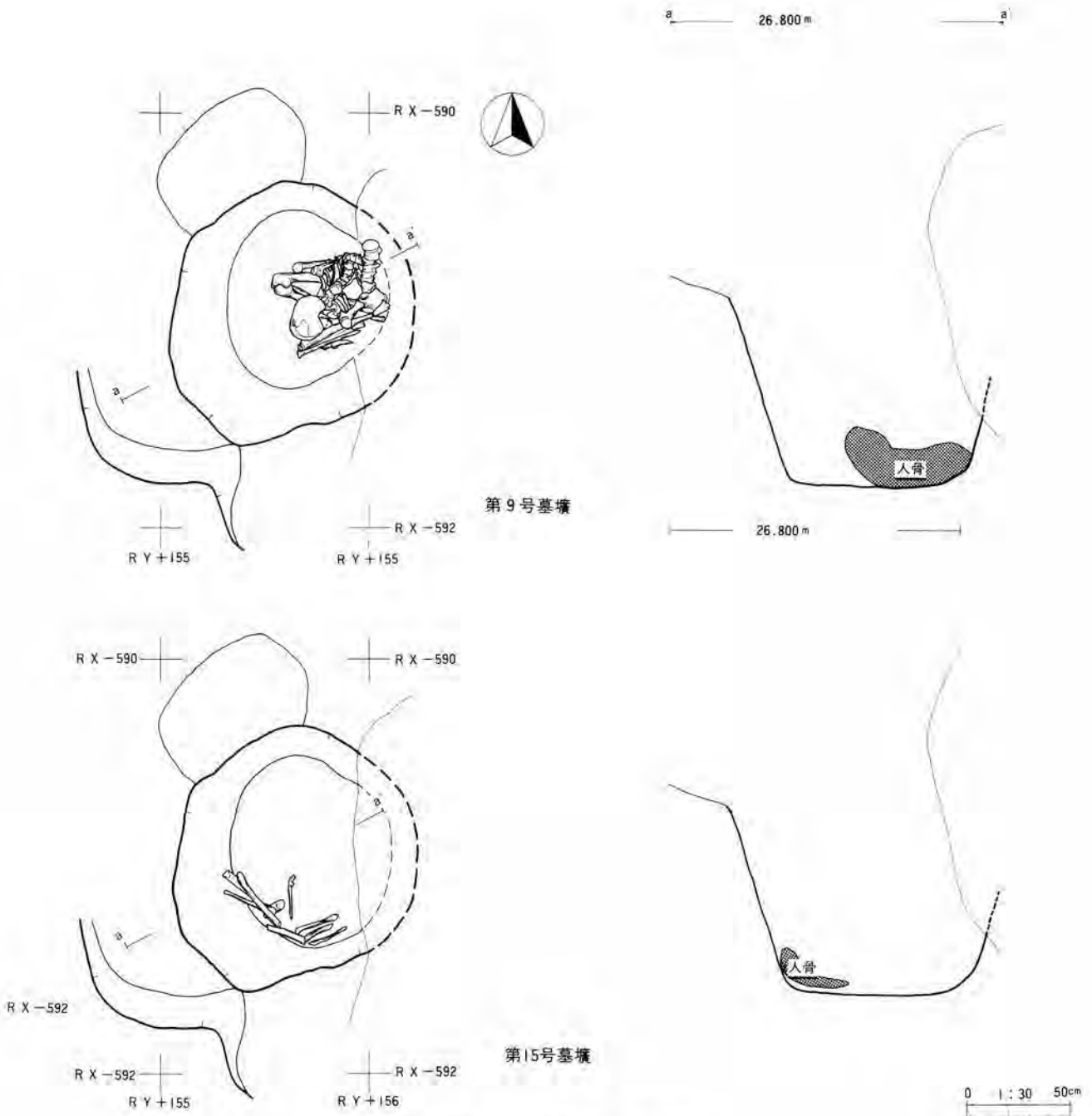
第9号墓墳、第15号墓墳（第24図）

II C、D区の中央、東寄りに位置する。第9号墓墳は、第15号墓墳のやや東側からほぼ同じ深さで掘り込まれている。上層は、墓石が埋められ攪乱を受ける→第7図参照。平面形は、正円形で、径120cm、深さは、検出面から90cmを測る。埋土の基本土は黄褐色土。

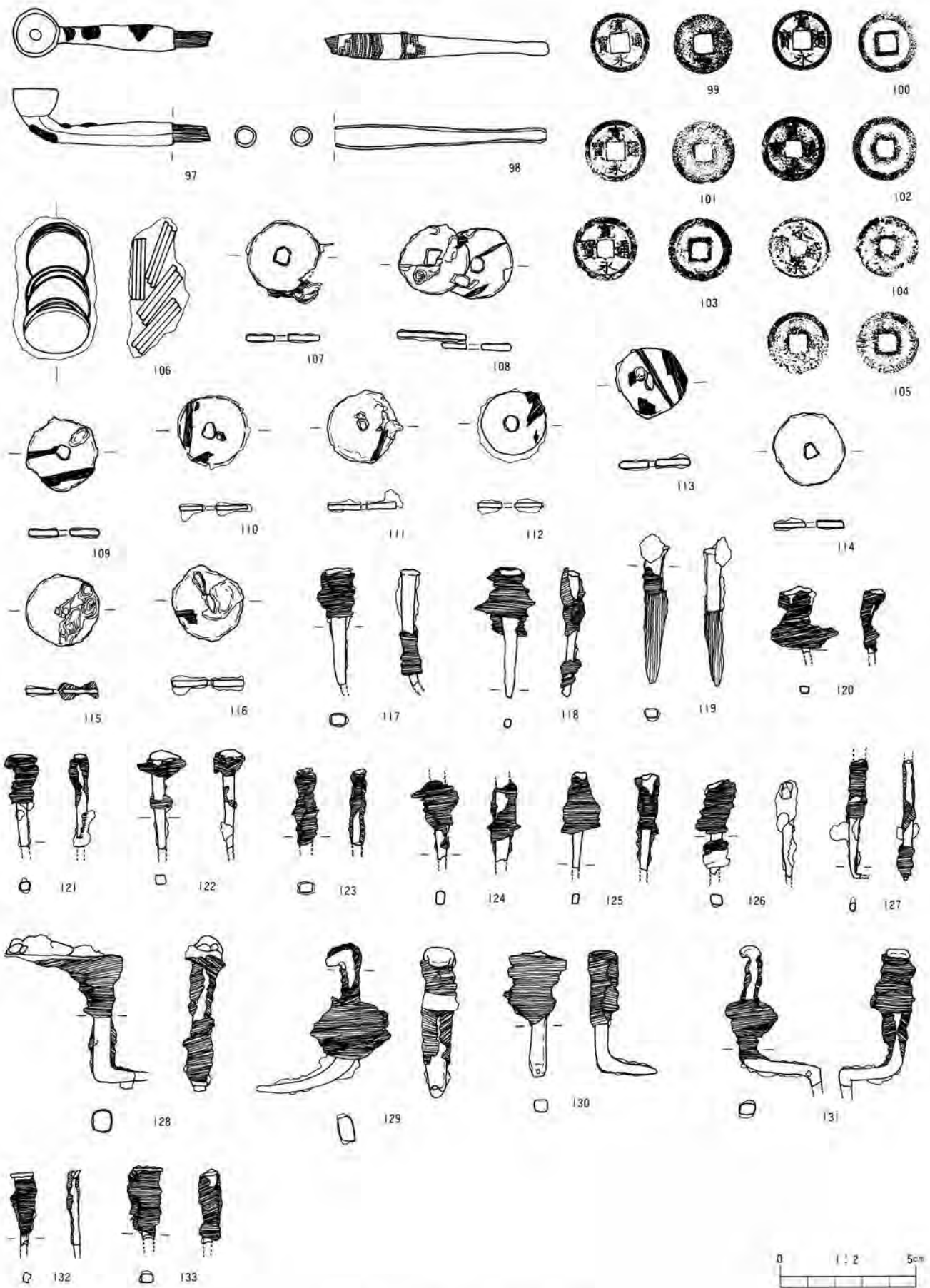
土葬人骨は、一体分そろっている。膝を立てて座り、膝の間に頭蓋骨がのる。成人、男性。

共伴遺物は97が煙管の雁首で〔全長6.0cm×首部最大径0.9cm×皿径1.7cm〕、98が吸口である〔全長7.8cm×最大径0.9cm〕。雁首と吸口の一部に布が残存している。99～103は寛永通寶で、105は永樂通寶である。106は、一塊りになって出土した銅銭で、107～116はガラス質の塊と木質が付着する銅銭である。117～133は角釘である〔完形品で5.5cm～8.0cm〕。134は小刀である〔刃渡り11.8cm〕。

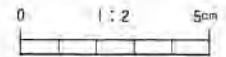
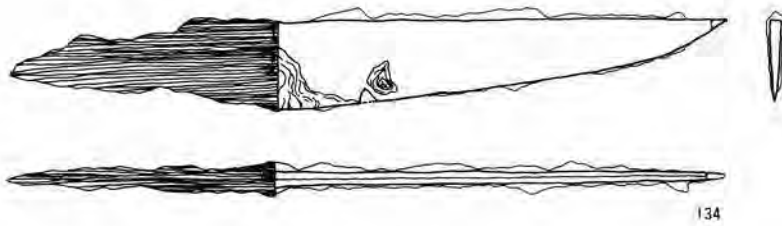
葬法
共伴遺物



第24図 第9号墓墳、第15号墓墳



第25图 第9号墓出土遗物(1)



第26図 第9号墓壙出土遺物(2)

第15号墓壙

第9号墓壙と重複するが、やや西寄りに位置する。平面形は円形を呈するものと推測されるが、推計で、径110cm、深さは検出面から90cmを測る。

土葬人骨は、鎖骨、とう骨、大腿骨などが出土した。

共伴遺物は、検出されなかった。

葬法

第10号墓壙 (第27図)

尾根上段の平坦地II日区の中央部に位置する。平面形は正円形を呈し、径110cm、深さは検出面から90cmを測る。埋土の基本土は黄褐色土である。

土葬人骨は、頭蓋骨、とう骨、尺骨、大腿骨、腓骨、足根骨などが出土している。性別不明。

葬法

共伴遺物の135～142、144～151は寛永通寶で、147～151は背文に「文」がはいる。143は銭銘不明である。

共伴遺物

第11号墓墳 (第29図)

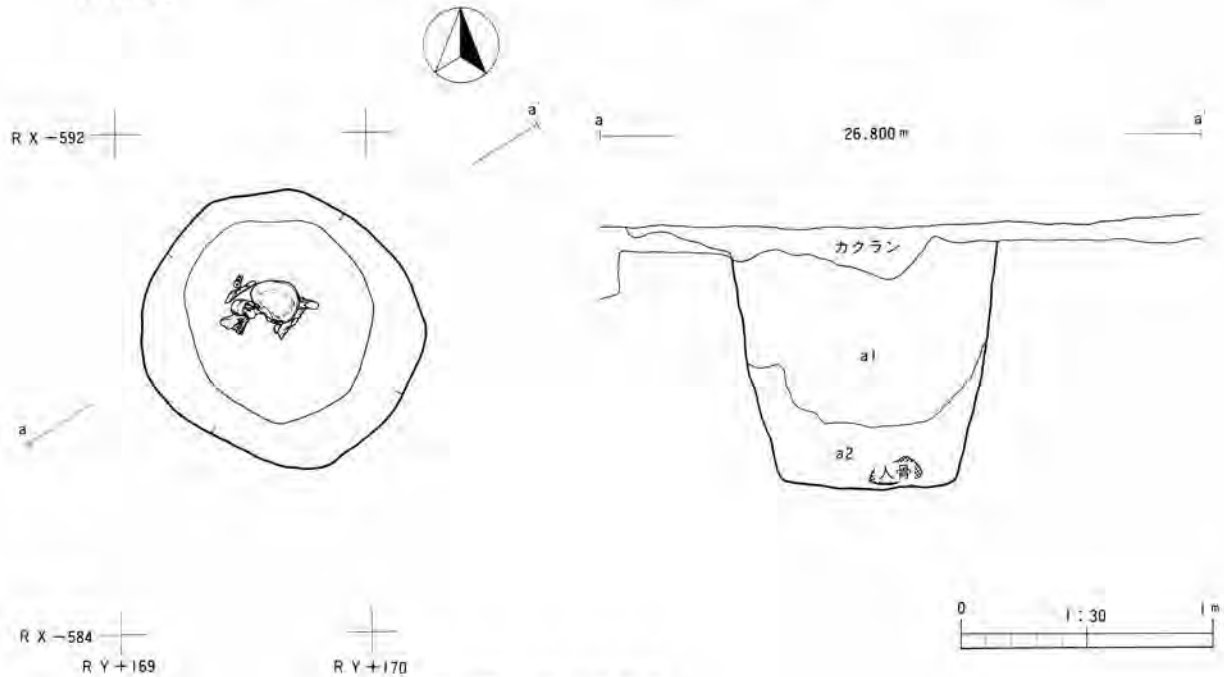
尾根の上段平地の東端、II I、J 区の中央部に位置する。電柱の支線棒を繋ぐ丸太が埋められていたため、半分だけの調査となった。VI 層下の地山面から掘り込まれている。

平面形は、ほぼ正円形で、径115cm、深さは検出面から100cmを測る。埋土の基本土は褐色土
 土葬人骨は、一体分そろっており、膝をたてて座り、前屈している。成人、女性。

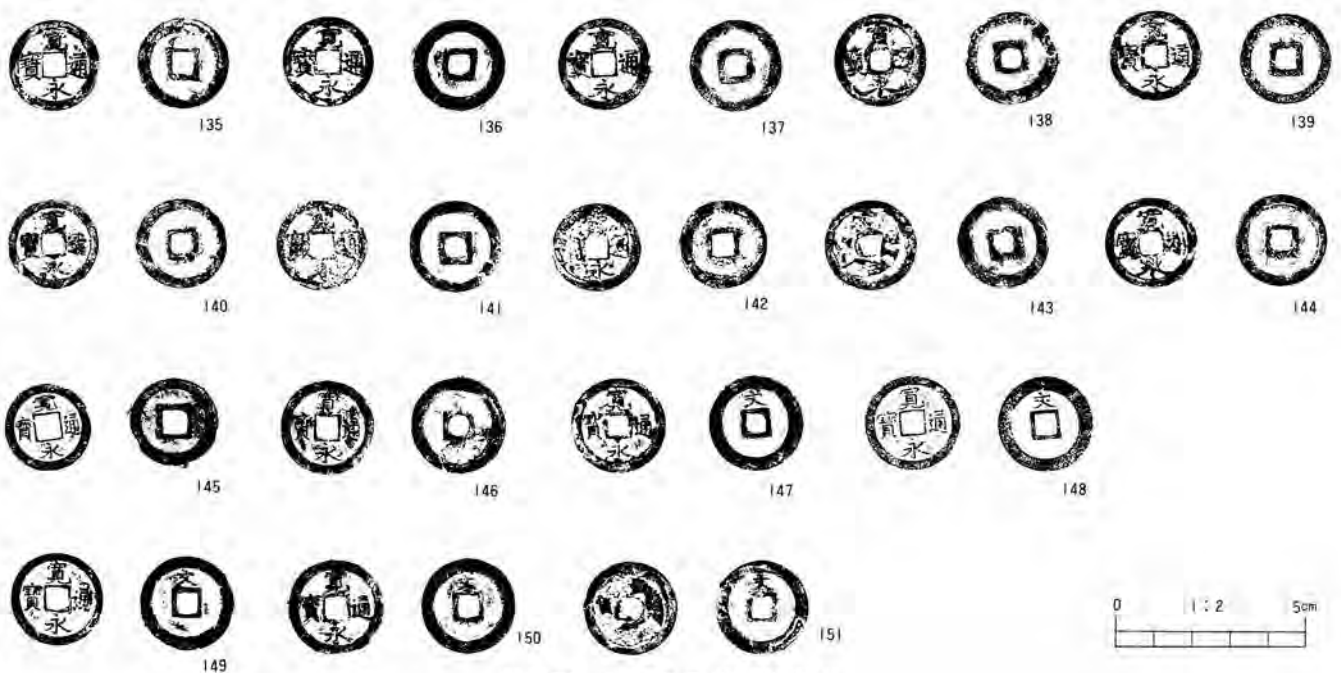
葬法

共伴遺物

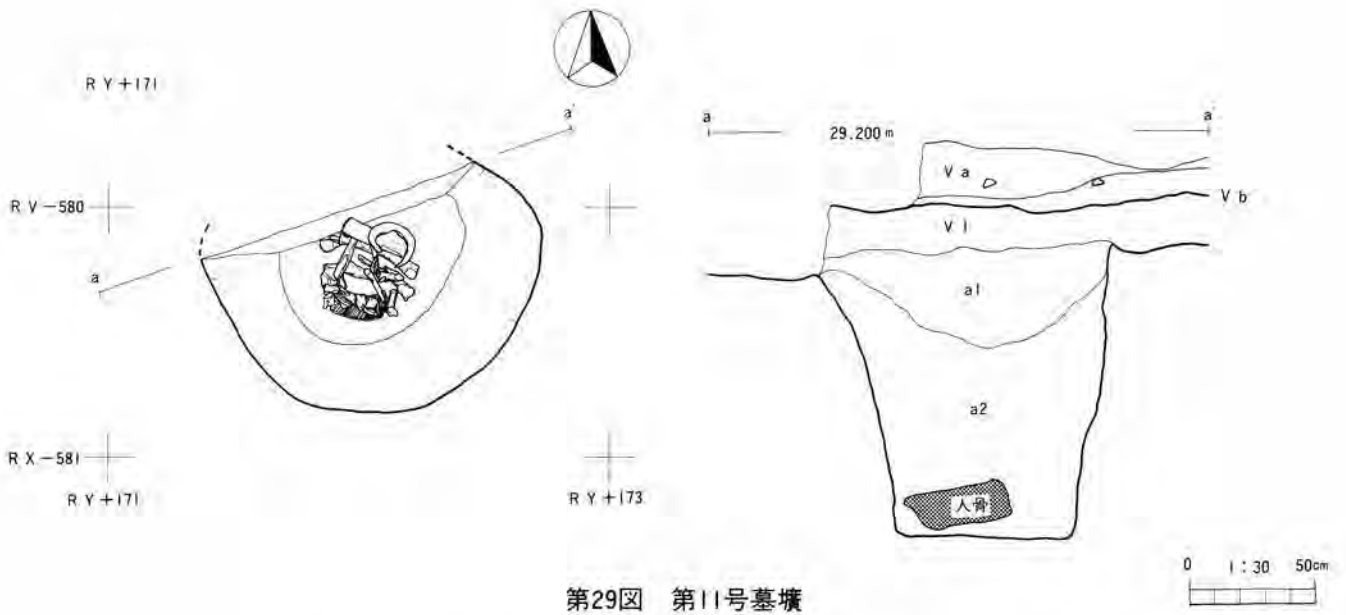
共伴遺物は152が銅銭の出土状況。153~157、159、160は寛永通寶で、159、160は背文に「文」
 がある。158は銭銘不明。161は、煙管の雁首で〔全長6.2cm×首部最大径1.1cm×火皿径1.7cm〕、
 162は吸口〔全長6.9cm×最大径1.0cm〕である。163は菜切包丁である〔残長25.1cm、刃渡り
 17.5cm〕。



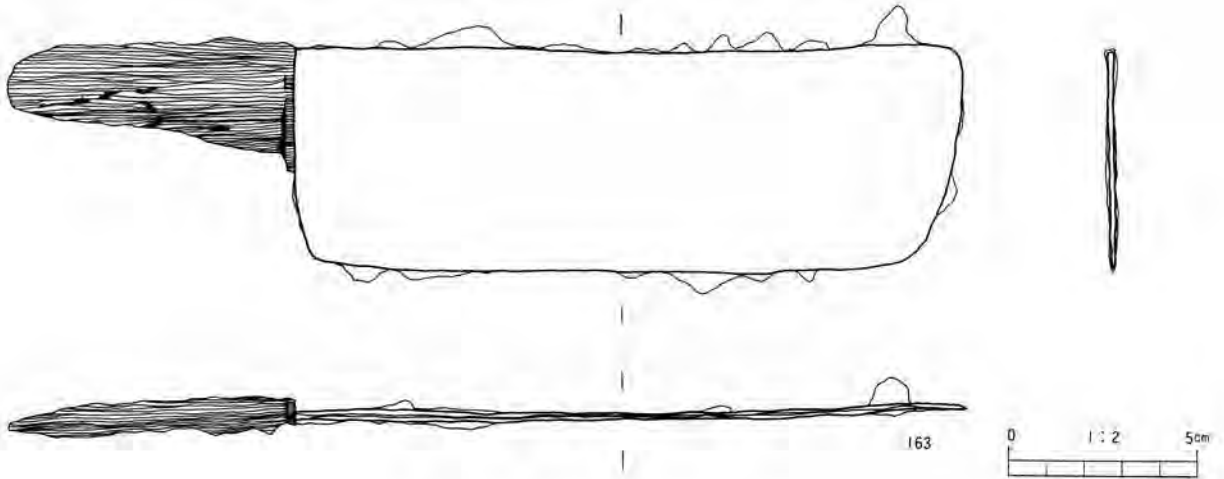
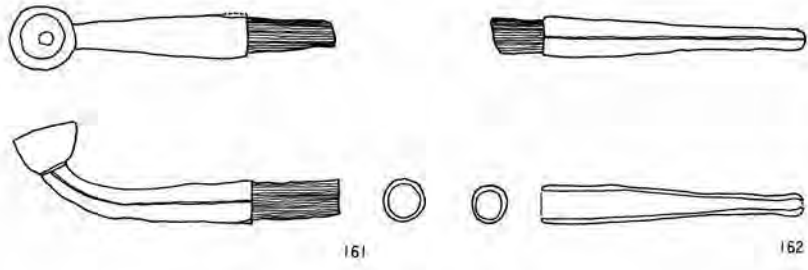
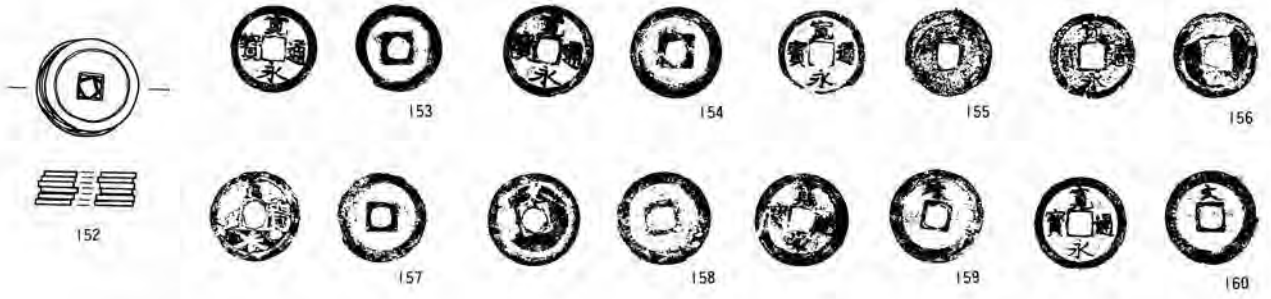
第27図 第10号墓墳



第28図 第10号墓墳出土遺物



第29图 第11号墓坑



第30图 第11号墓坑出土遗物

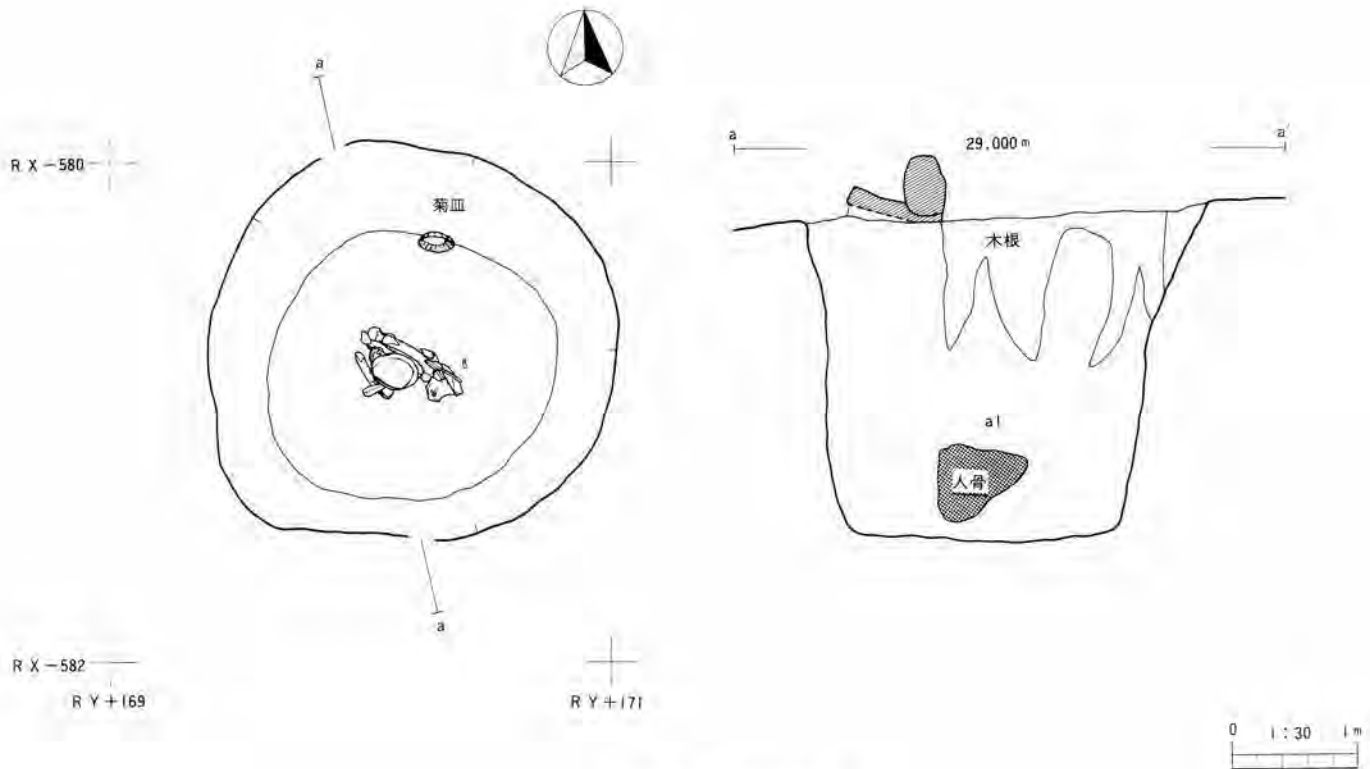
第12号墓塚（第31図）

Ⅱ I、J区の中央部に位置する。第11号墓塚と同様にⅥ層下の地山面から掘り込まれている。平面形は、正円形を呈す。径160cm、深さ検出面から130cmを測る。全墓塚中もっとも規模が大きい。埋土の基本土は黄褐色土。

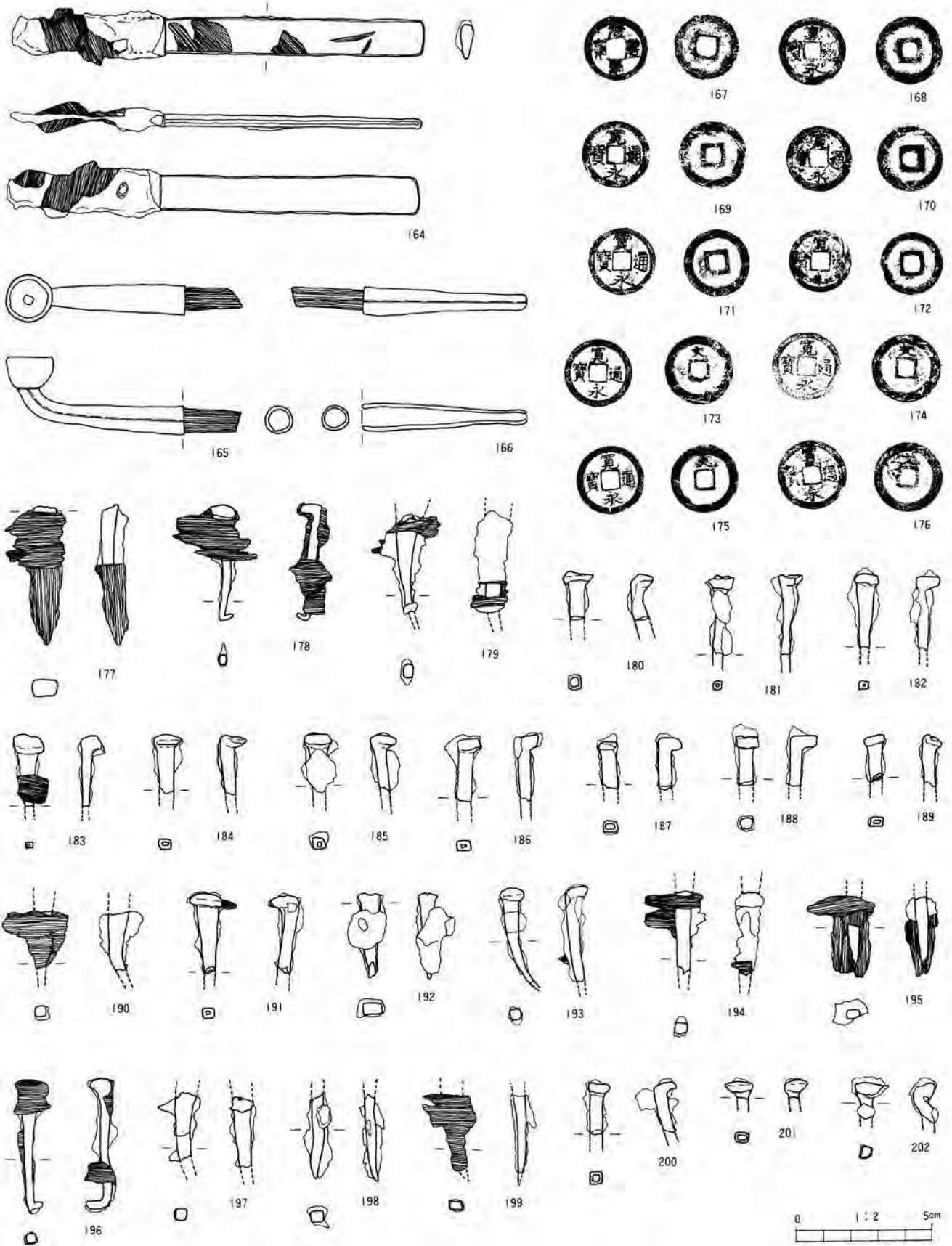
葬法 土葬人骨は、かなりもろくなっているが、ほぼ一体分そろっている。両膝を立てて、その間に頭蓋骨がのる。成人、性別不明。

共伴遺物 共伴遺物は164が小柄である〔残長15cm、刃渡り9.4cm〕。165は煙管の雁首で〔全長6.5cm×首部最大径1.0cm×火皿径1.7cm〕、166は吸口である〔全長6.0cm×最大径1.0cm〕。167は元豊通寶である。168～176は寛永通寶で173～176は背文に「文」が入る。177～216は角釘である〔完形品で5.0cm～5.5cm〕。

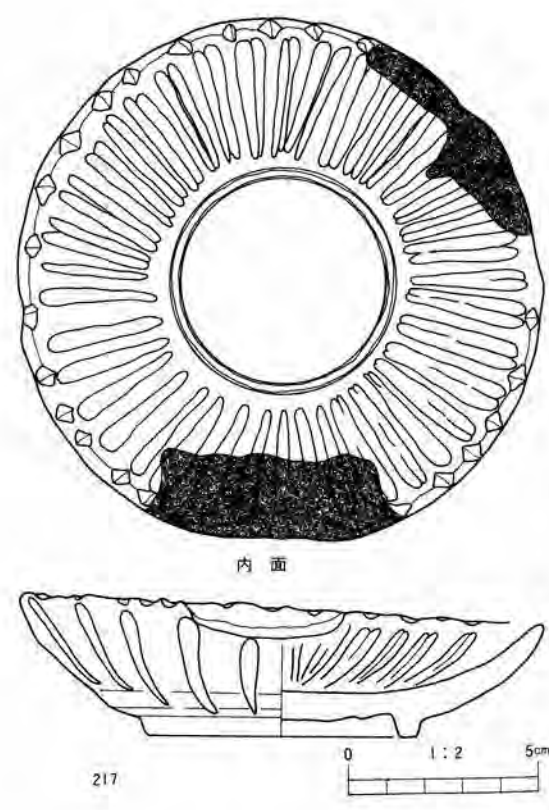
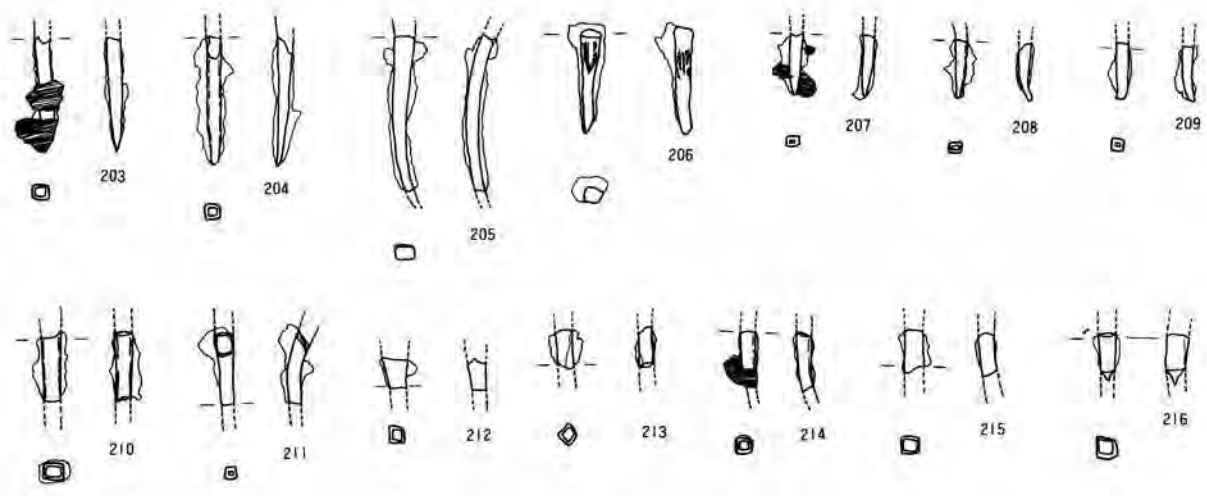
217は陶器の菊皿である。やや厚手の皿で、緩く湾曲しながら立ち上がる。両面を丸ノミで削り、口縁部にへらで切り込みが入る。口縁部と内面底部に煤が付着する。内外面ともに灰釉を施す。胎土は、にぶい黄澄を呈する。美濃産で17世紀後半に伴う〔口径14cm×底径7.2×高さ3.5cm〕。



第31図 第12号墓塚



第32图 第12号墓出土文物(1)



第33图 第12号墓出土文物(2)

第13号墓塚

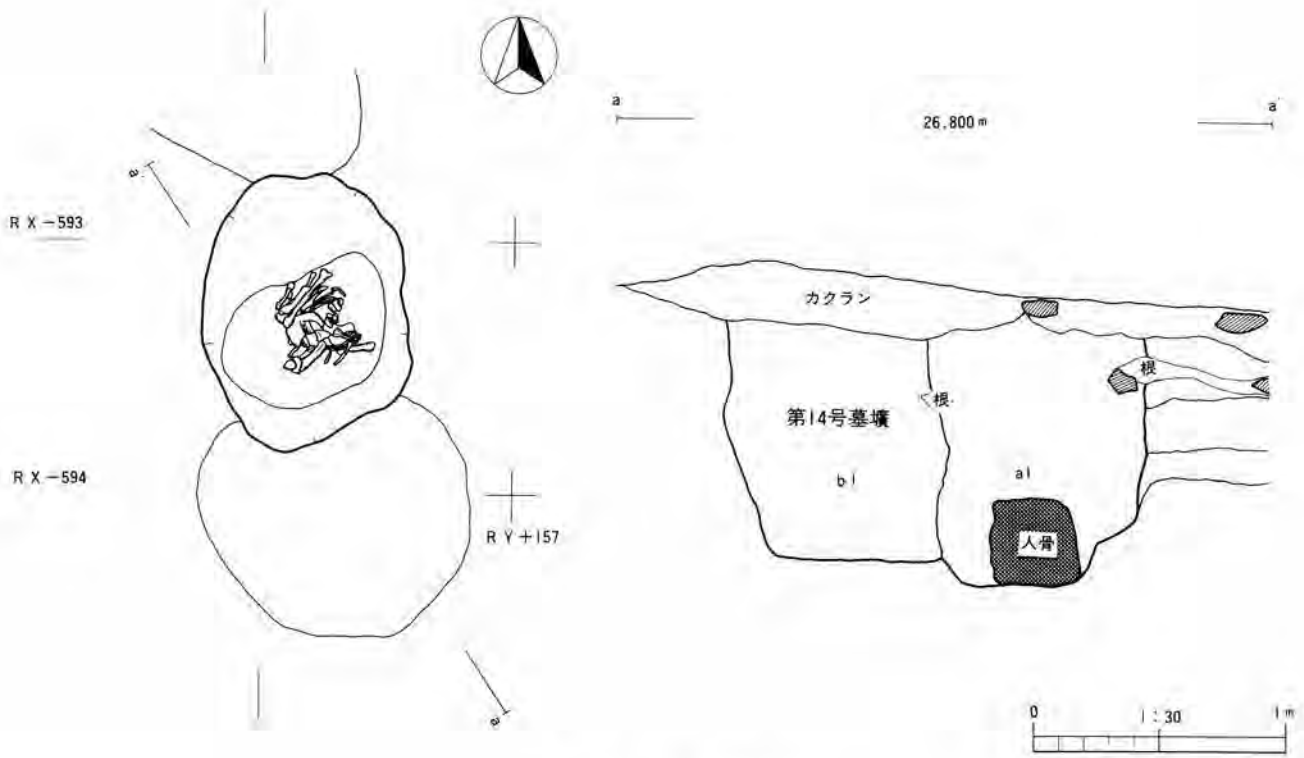
ⅡD区中央のやや南寄りに位置する。第3号、第4号、第14号墓塚を切る。平面形は、楕円形を呈し、長軸100cm、短軸80cm、深さは検出面から100cmを測る。埋土の基本土は褐色土。

土葬人骨は、一体分そろい、両膝を立て前屈し、膝の間に頭蓋骨が落ちている。

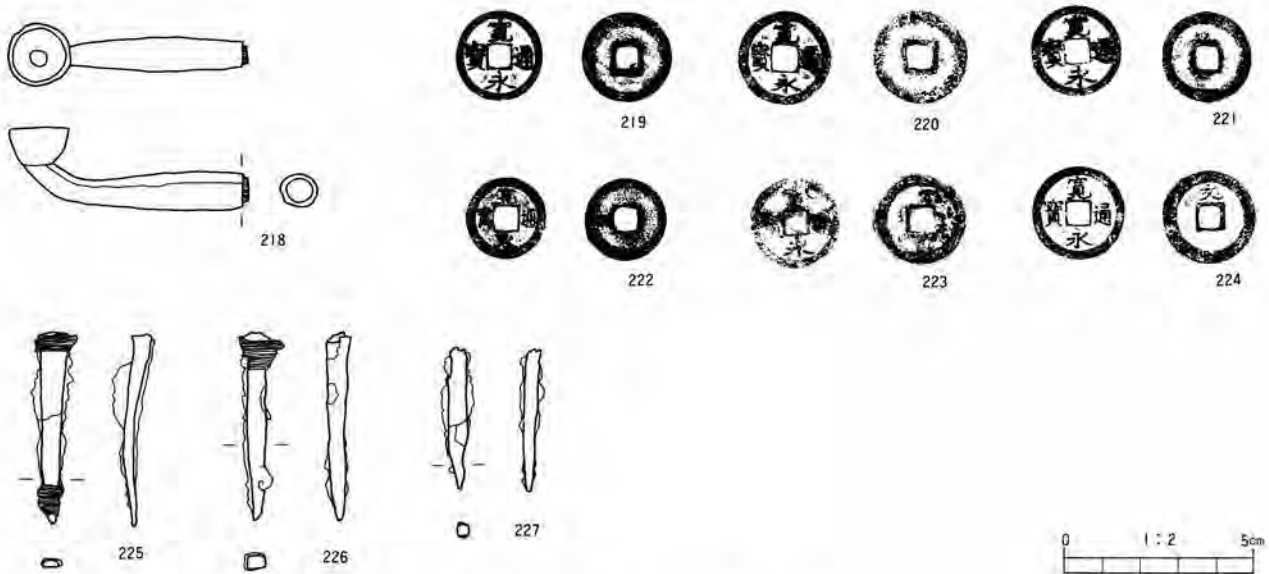
共伴遺物は218が煙管の雁首である〔全長6.2cm×首部最大径1.0cm×火皿径1.6cm〕。219～224は寛永通寶で224は背文に「文」。225～227は角釘である〔完形品で5.1cm〕。

葬法

共伴遺物



第34図 第13号墓塚



第35図 第13号墓塚出土遺物

第14号墓墳 (第36図)

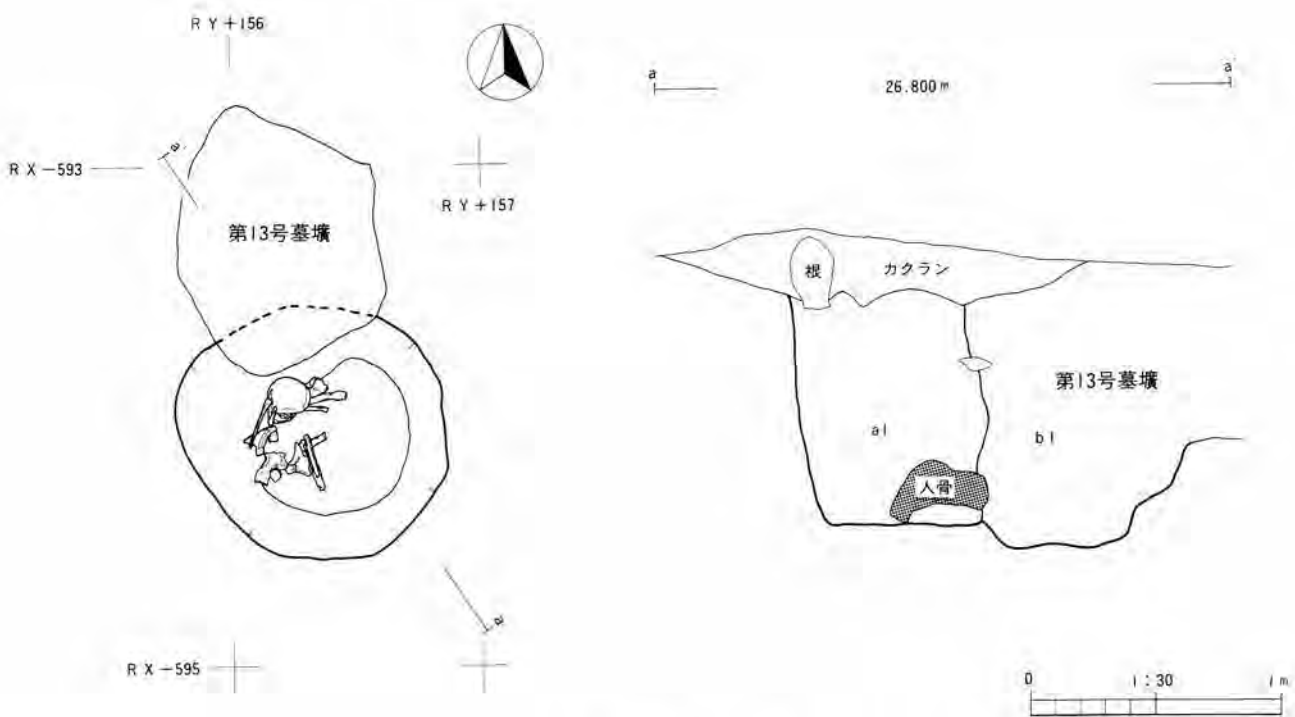
II D区の南端部に位置する。第13号墓墳に切られている。平面形は、ほぼ正円形を呈し、径100cm、検出面からの深さは90cmを測る。埋土の基本土は褐色土。

葬法

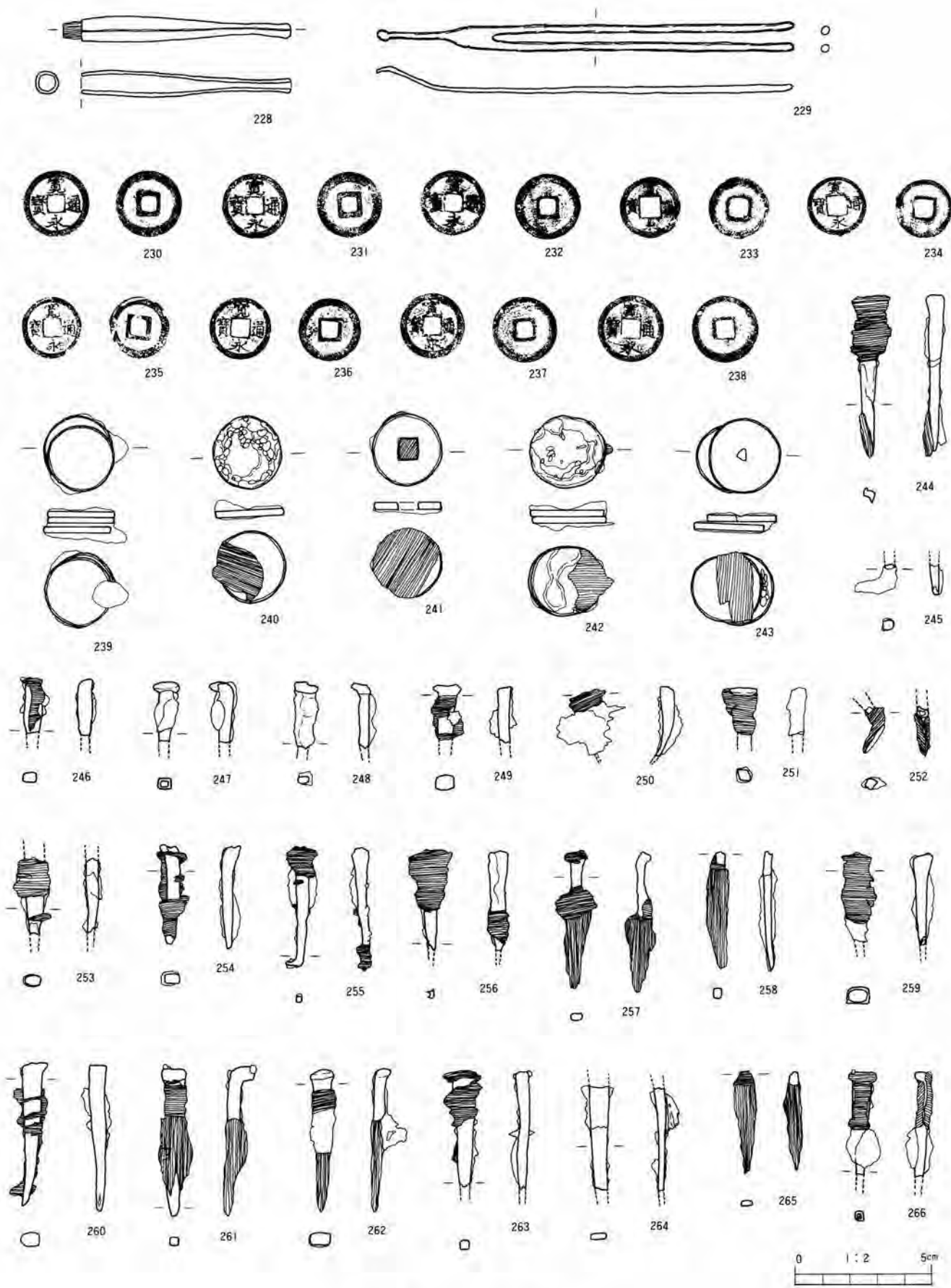
土葬人骨は、頭蓋骨、大腿骨、脛骨、腓骨などが出土している。成人。

共伴遺物

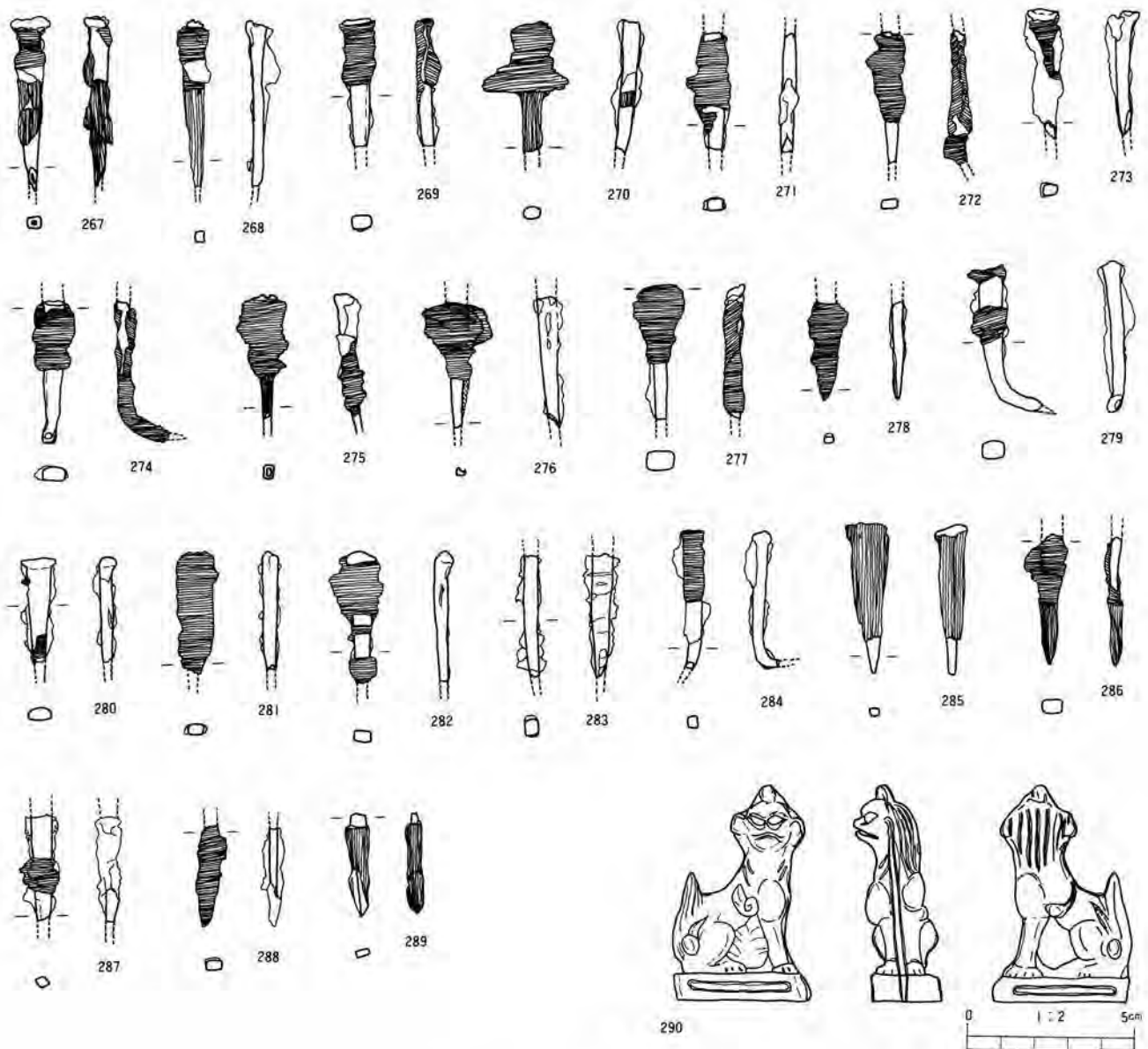
共伴遺物は228が煙管の吸口で〔全長7.6cm×最大径0.9cm〕、229は簪である〔全長15.3cm〕。230～238は寛永通寶である。239～243は鉄銭であるが、いずれも布、木質が付着し銭銘は不明である。244～289は角釘である〔完形品で、5.3cm～5.8cm〕。290は土製品の狛犬で型起こし成形である。胎土は、鈍い黄橙色を呈する〔高さ6.5cm×台幅4.0cm×厚さ2.0cm〕。



第36図 第14号墓墳



第37图 第14号墓出土文物(1)



第38图 第14号墓出土遗物(2)

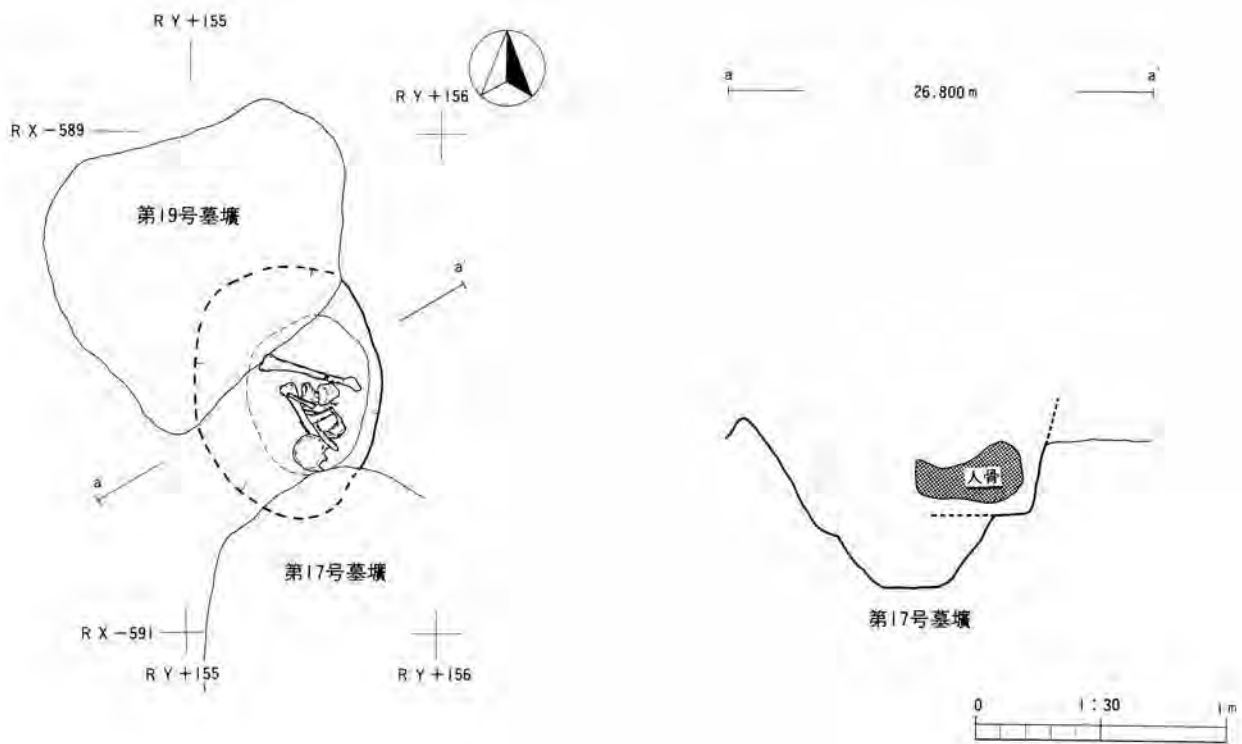
第16号墓壙（第39図）

II C区の中央部、南寄りに位置する。第17号墓壙と重複し、やや東側から掘り込まれている。第2号、第9号墓壙に切られている。平面形は不明である。深さは検出面から30cmを測る。

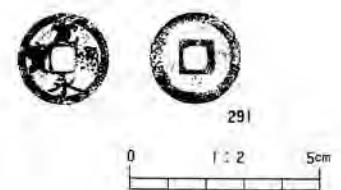
土葬人骨は、頭蓋骨、顎骨、大腿骨、腓骨などが出土している。性別不明。

共伴遺物は291が寛永通寶である。

葬法
共伴遺物



第39図 第16号墓壙



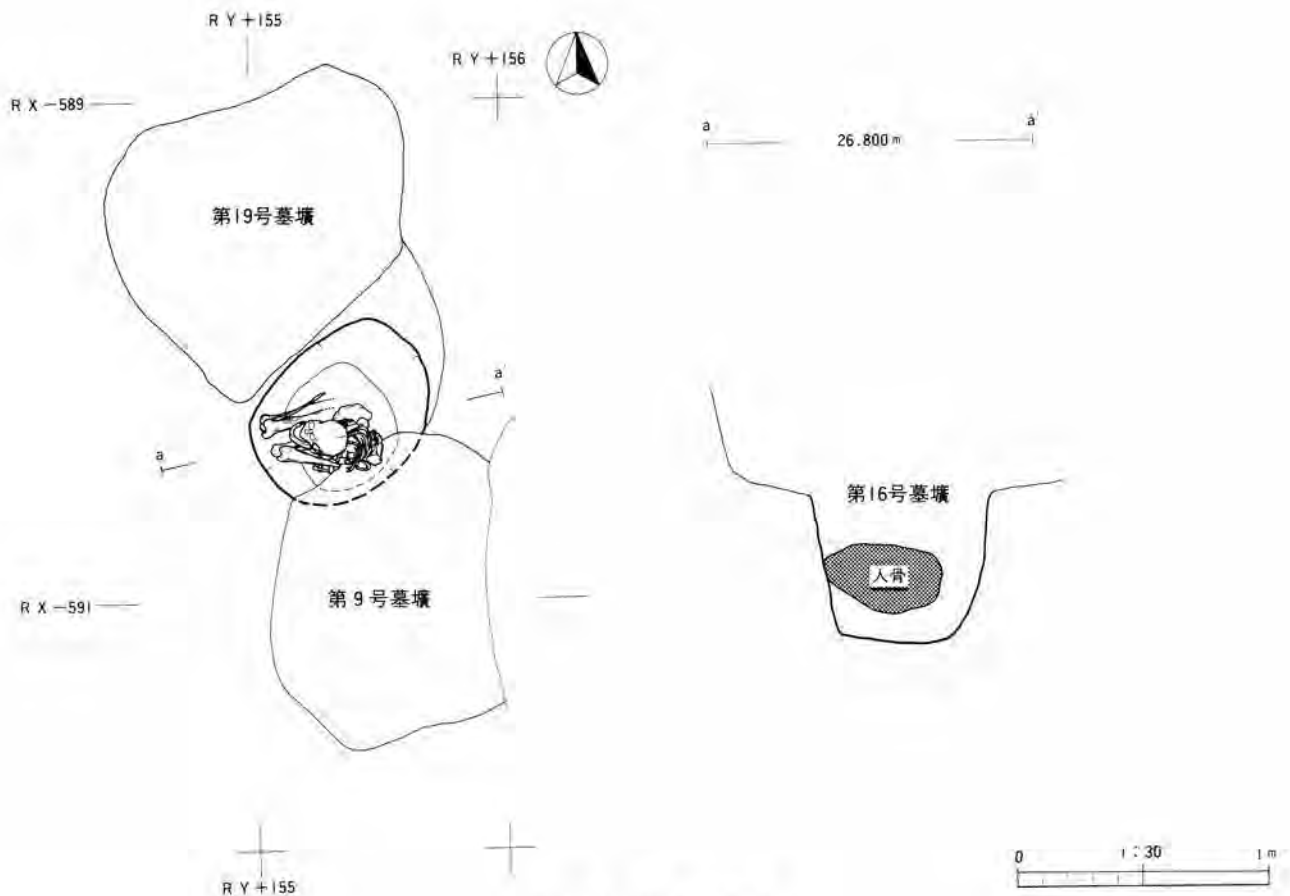
第40図 第16号墓壙出土遺物

第17号墓墳（第41図）

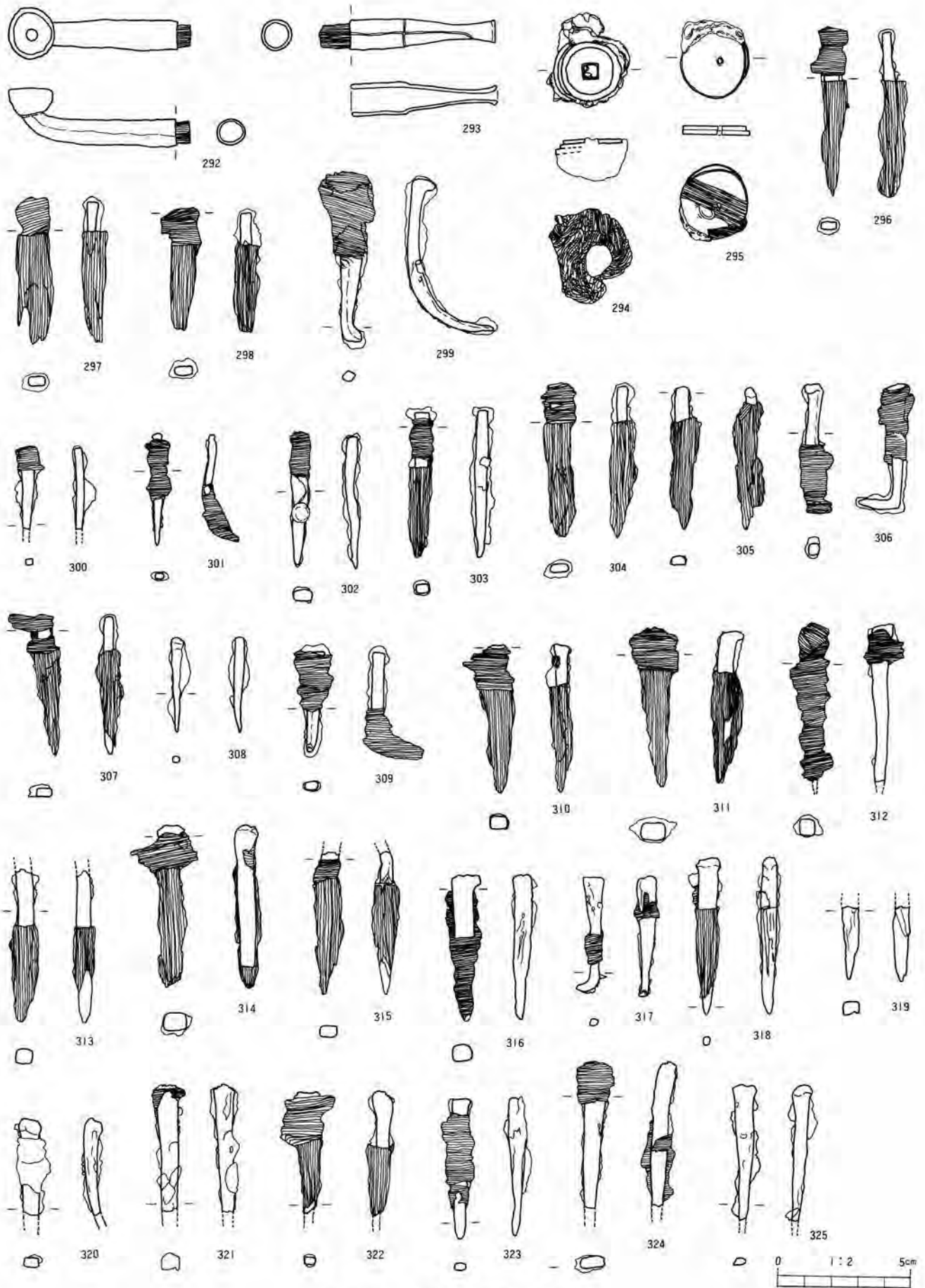
II C区中央部の南寄りに位置する。第16号墓墳と重複するが、やや西寄りから掘り込まれ、第9号墓墳に切られている。平面形は、楕円形を呈し、75cm×60cm、深さは検出面から60cmを測る。

葬法 土葬人骨は、一体分そろっている。両膝は立てられ、頭蓋骨、肋骨、腰堆、寛骨の順序に重なる。成人、男性。

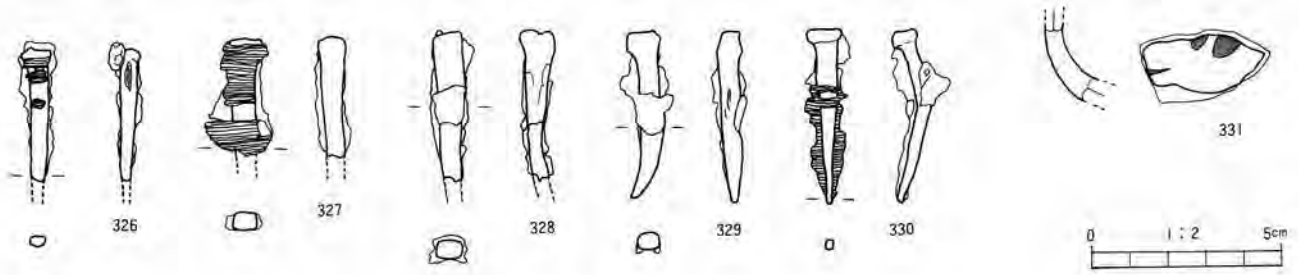
共伴遺物 共伴遺物は292が煙管の雁首で〔全長6.4cm×首部最大径1.1cm～1.2cm×火皿径2.0cm〕、293は吸口である〔全長5.4cm×最大径1.2cm〕。294、295は銅銭であるが、靱殻等が厚く付着し、銭銘は不明である。296～330は角釘である〔完形品で5.5cm～6.4cm〕。331は、埋土から出土した陶器皿の破片である。志野産で、17世紀代に伴う。



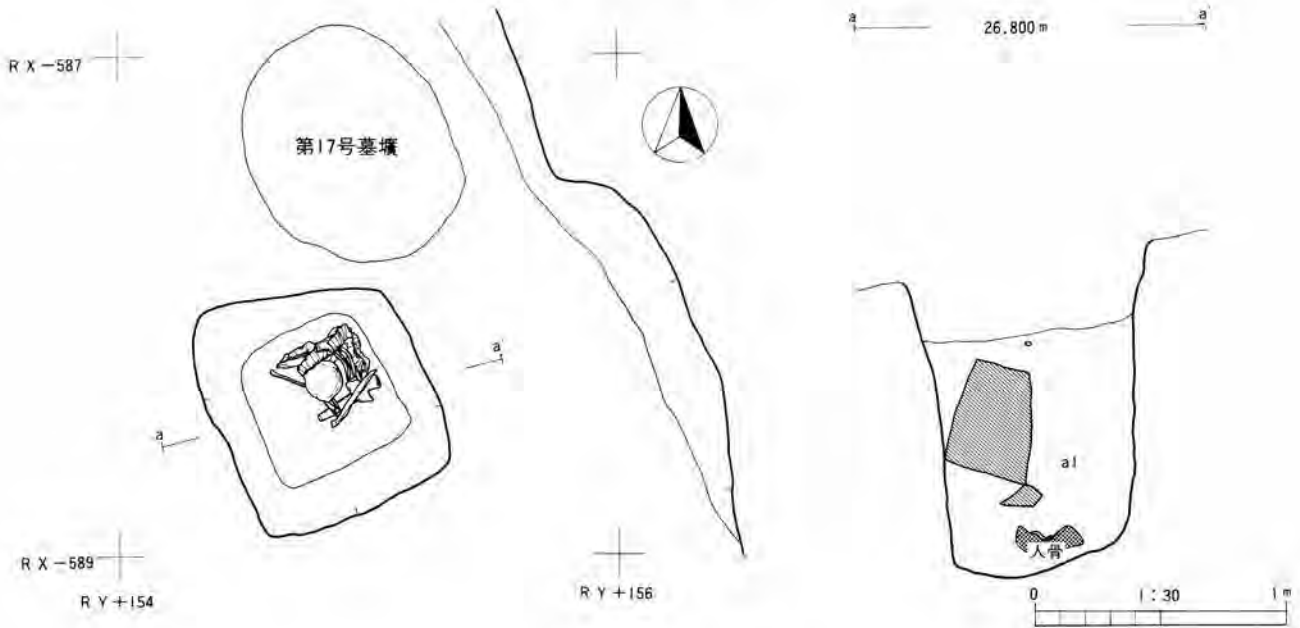
第41図 第17号墓墳



第42图 第17号墓出土遗物(1)



第43図 第17号墓壙出土遺物(2)



第44図 第18号墓壙

第18号墓壙 (第44図)

II C 区の中央部に位置する。平面形が隅丸方形に掘られている唯一の墓壙である。85cm×90cm、検出面からの深さは120cmを測る。後代に墓石の台石が埋められている。埋土の基本土は黄褐色土。

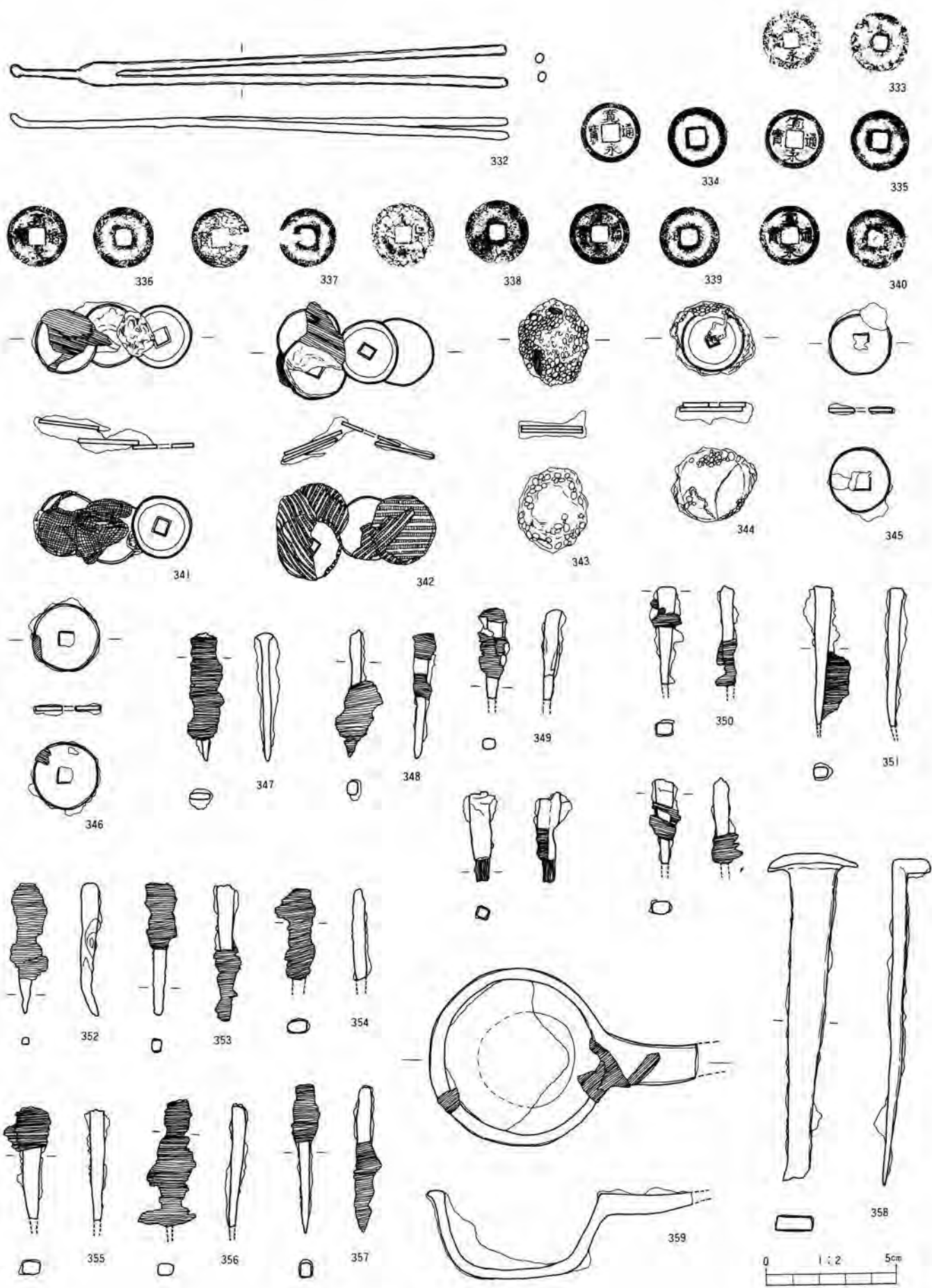
葬法 土葬人骨は、一体分そろっている。両膝を折り曲げ、その間に頭蓋骨、肋骨、腰骨、寛骨の順序に重なる。成人、女性。

共伴遺物 共伴遺物は332が簪である〔全長19.0cm〕。333～340は寛永通寶である。000～000は銅銭であるが、粃殻、布等が付着し銭銘不明である。345、346は鉄銭。347～357は角釘である〔完形品で5.1cm～5.8cm〕。358は船釘で〔12.5cm〕、359は丸い計量カップ状の鉄製品。358、359は、出土状況からみて後代にカクランを受けた際に埋められた可能性が大きい。

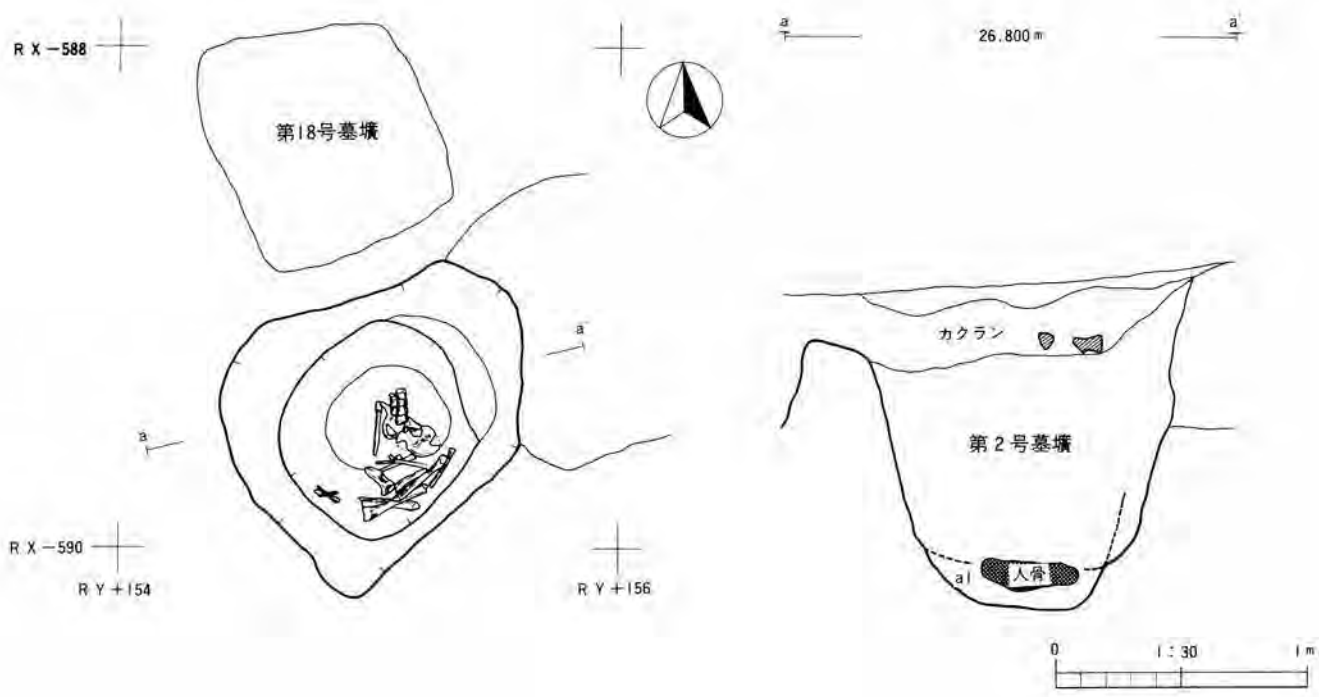
第19号墓壙 (第46図)

II C 区中央部に位置する。第2号墓壙に切られている。平面形は、不明であるが、推計で100cmほどの円形と思われる。深さは検出面から100cmを測る。

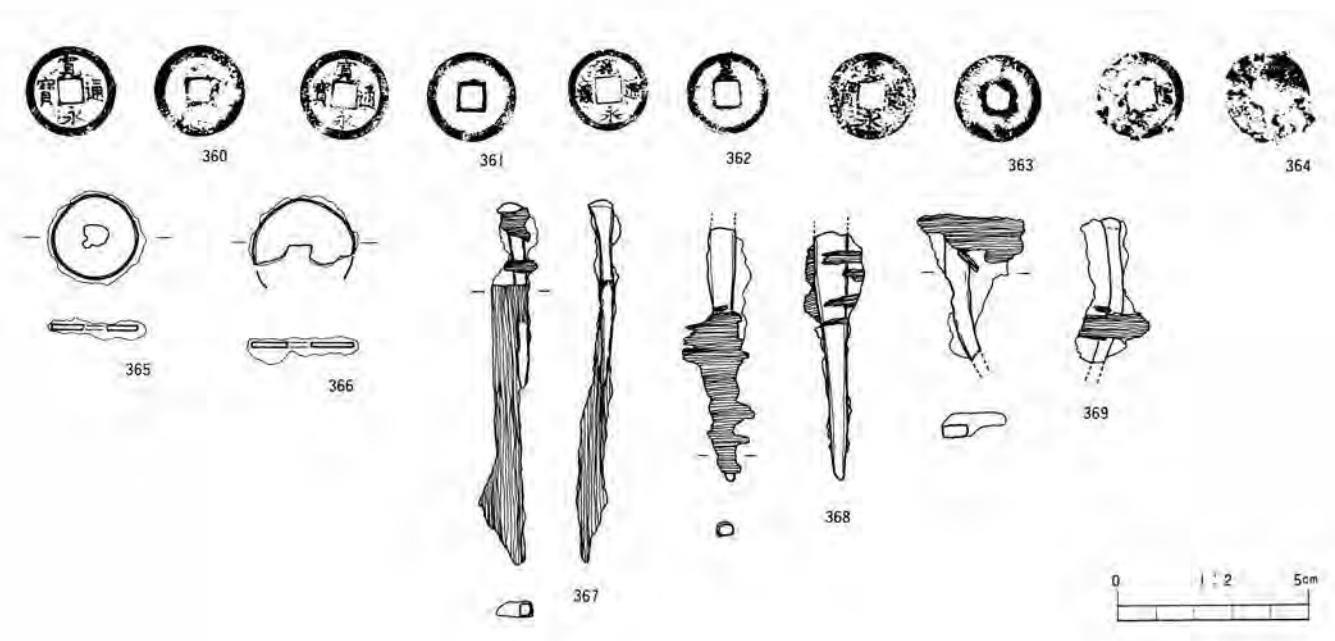
葬法 土葬人骨は、腰堆、寛骨、大腿骨などが出土したが、頭蓋骨は、検出されなかった。性別不明。
共伴遺物 共伴遺物は360～363が寛永通寶で、364は銭銘不明である。365～366は鉄銭。368～369は角釘である〔完形品で4.9cm〕。



第45图 第18号墓出土文物



第46図 第19号墓墳



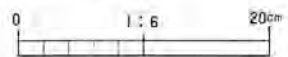
第47図 第19号墓墳出土遺物



俗名鑄工
中沢茂兵衛

安永八年
鐵山良鑄信士
八月十六日

370

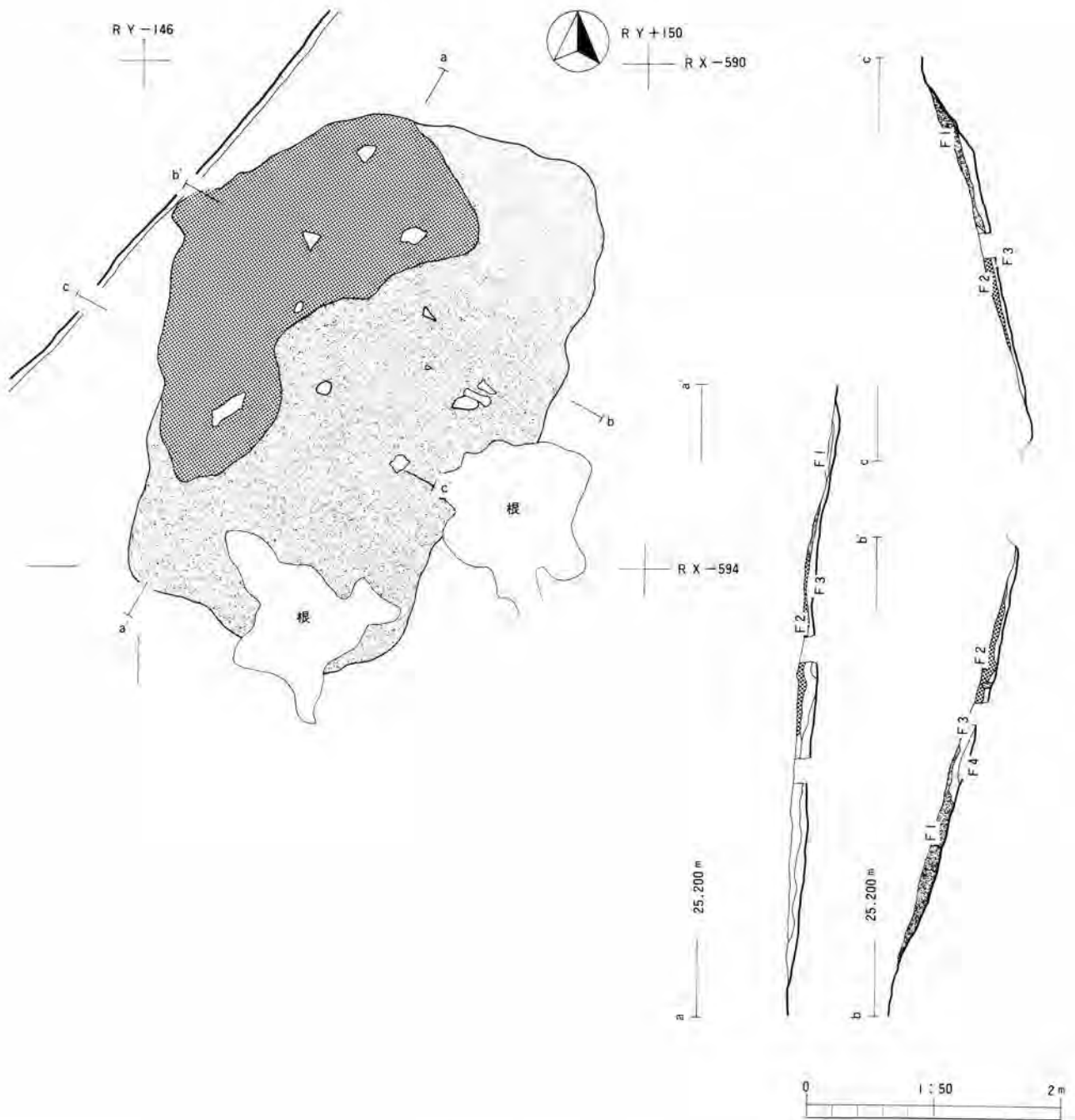


第48図 墓碑拓影

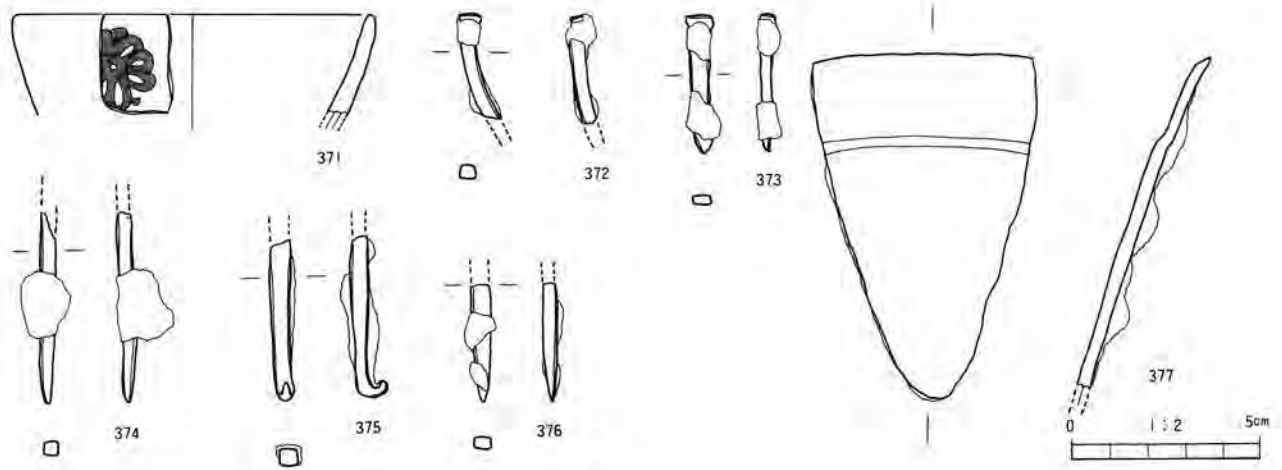
b) II A区焼土遺構

II A区のはほぼ中央部に位置し、尾根の北斜面である。検出面は、I b層上面で、平面形は楕円形を呈し、480cm×330cmを測る。炭と焼土の面に分かれる。

土層は3層からなる。F1層が炭の層、F2層、F3層が炭混じりの暗褐色の焼土層である。いずれの層も柔らかく締まりがない。



第49図 II A区焼土遺構



第50図 II A区焼土遺構出土遺物

共伴遺物は371が染付磁器の碗。F1層から出土。肥前産のくらわんか手で18世紀代に伴う **共伴遺物**
 [口径8.7cm×残高2.5cm]。372～376は角釘である。377は、鉄製品。鉄鍋。真っすぐに立ち上がり、口縁部の稜線を境に外反する〔残長9.0cm〕。その他、器形不明の鉄塊、焼土層からは鉄滓
 (表4を参照)が出土している。

焼土遺構は、出土地点、土層などからみて廃棄されたものと思われるが、時期は不明である。

c) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、I区東側の平坦地で2棟確認されている。いずれも削平された地山面を掘り込み、尾根を背にして建てられている。

第1号掘立柱建物跡

規模 西側の建物跡である。規模は東西に長く、桁行525cm×梁間305cmを測る。棟方向は、北側柱列を軸とするとE-18°30'-Eを示す。柱穴の平面形は、ほぼ正円を呈す。柱痕跡は、あまり締まりのないにぶい黄褐色土、褐色土を基本土とするものが多く、鉄滓、粘土塊などを含む。

柱間寸法 柱間寸法は、西側柱列で308cm、北側柱列で西から180cm+183cm+155cm、東側柱列で308cm、南側柱列で西から180cm+184cm+153cmを測る。

第2号掘立柱建物跡

規模 東側の建物跡である。規模は、第1号と同様に東西に長く、桁行600cm×梁間480cmを測る。棟方向は、東側柱列を軸とするとE-21°30'-Eを示し、第1号とほぼ同方向である。柱穴の平面形、円形であるが、南の側柱列で径がやや小さくなっている。また北の側柱列

		(cm)						
柱穴番号		1	5	6	8	121	10	11
長 辺		-	40	49	36	-	45	46
短 辺		35	33	46	36	-	40	45
深 さ		35	41	50	38	-	53	34

第1表 第1号掘立柱建物跡柱穴計測表

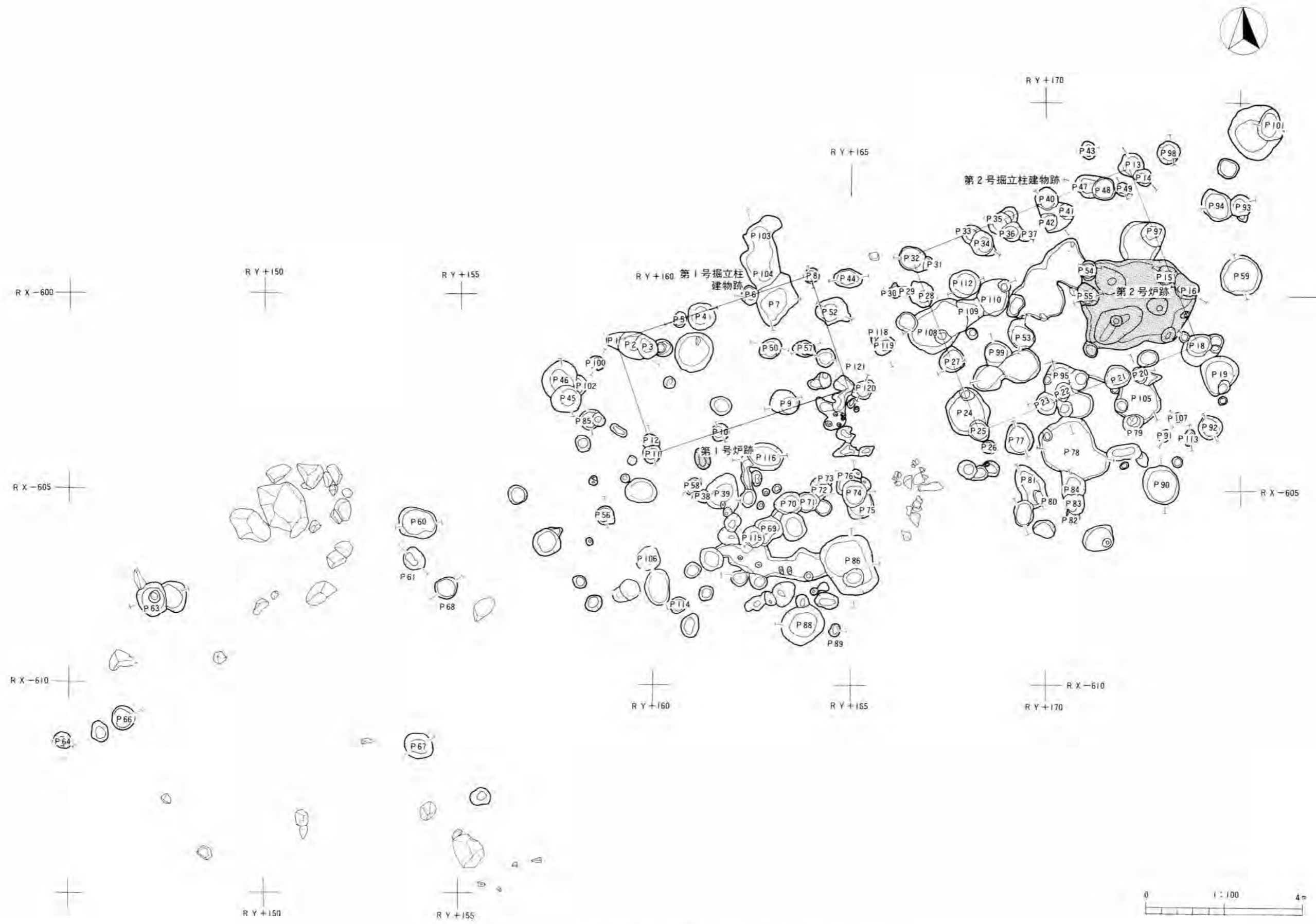
で建替跡が認められた。柱痕跡は、第1号建物跡とおなじく黄褐色土、褐色土を基本土とし、炭化物、粘土塊などを含むものが多く、船釘なども出土している。

柱間寸法 柱間寸法は、北側柱列で西から160cm+220cm+220cm、東側柱列で北から180cm+120cm+180cm、南側柱列で西から180cm+200cm+220cm、西側柱列で北から100cm+180cm+200cmである。

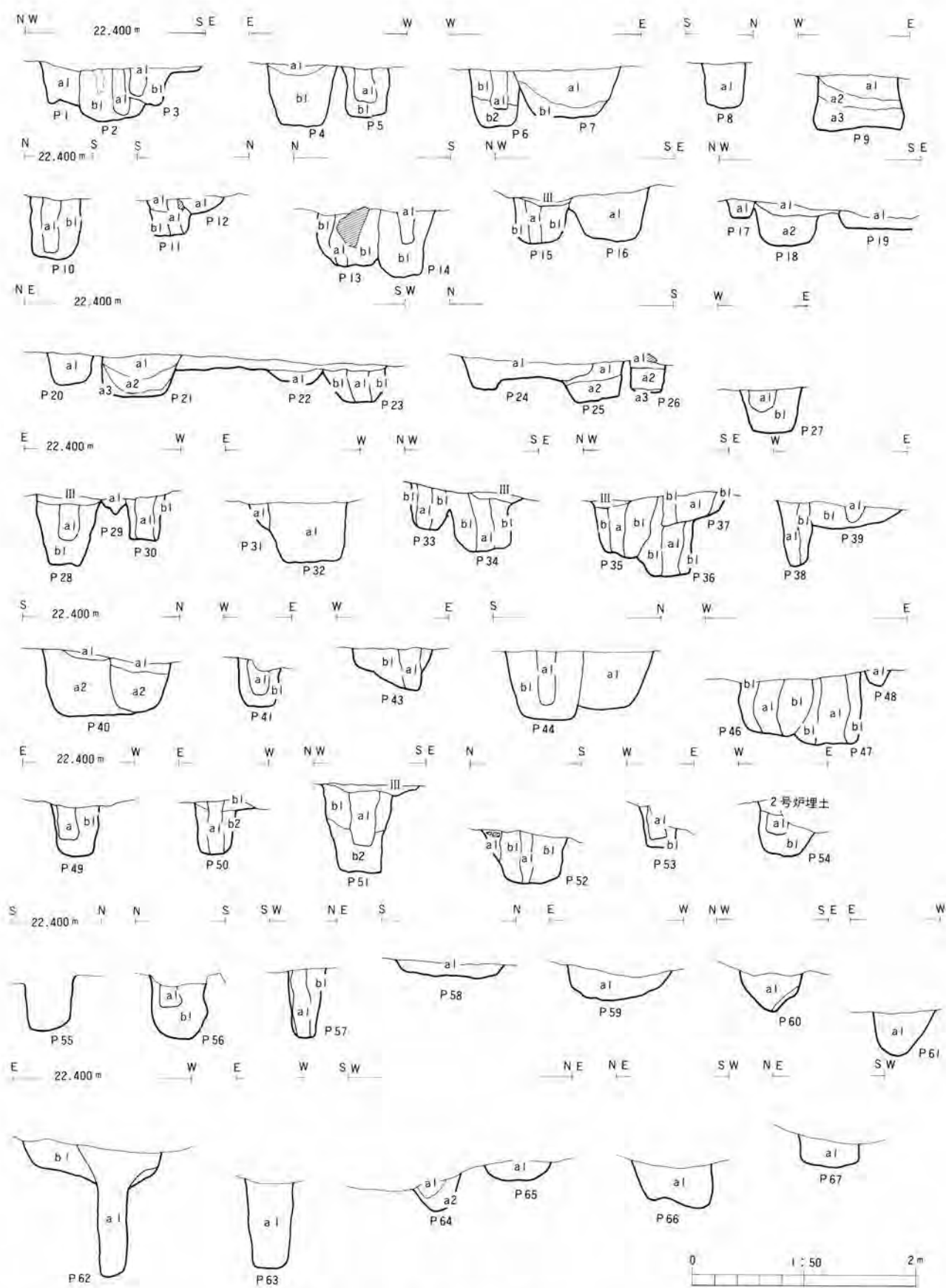
遺物 柱穴、土壌からの出土遺物は、P37の銅製の煙管をのぞきすべて鉄製品である(第54図)。378は、船釘である〔13.3cm〕。380~385は、角釘である〔3.2cm~7.7cm〕。386は、棒状の鉄製品で〔径0.5cm×残長8.8cm〕、387は、やや厚い円形の鉄塊である〔径4.0cm×厚さ0.9cm〕。388は、わずかに湾曲する板状の鉄片〔5.5cm×5.0cm×0.3cm〕で、389は、煙管の吸口〔全長5.7cm×最大径1.0cm〕。390は、鋌に似た形状の鉄製品で〔最大径2.5cm×長さ2.8cm〕、391は、細く薄い板状の鉄製品〔残長6.0cm×幅1.5cm×厚さ0.2cm〕である。その他、鉄滓、土製品の破片などが出土している。

		(cm)													
柱穴番号		13	97	15	18	21	23	25	27	28	32	33	35	41	47
長 辺		60	65	55	70	68	58	58	65	75	65	47	58	58	-
短 辺		60	60	45	55	60	56	52	60	63	59	-	-	58	55
深 さ		50	41	38	38	37	29	35	39	60	54	38	49	43	50

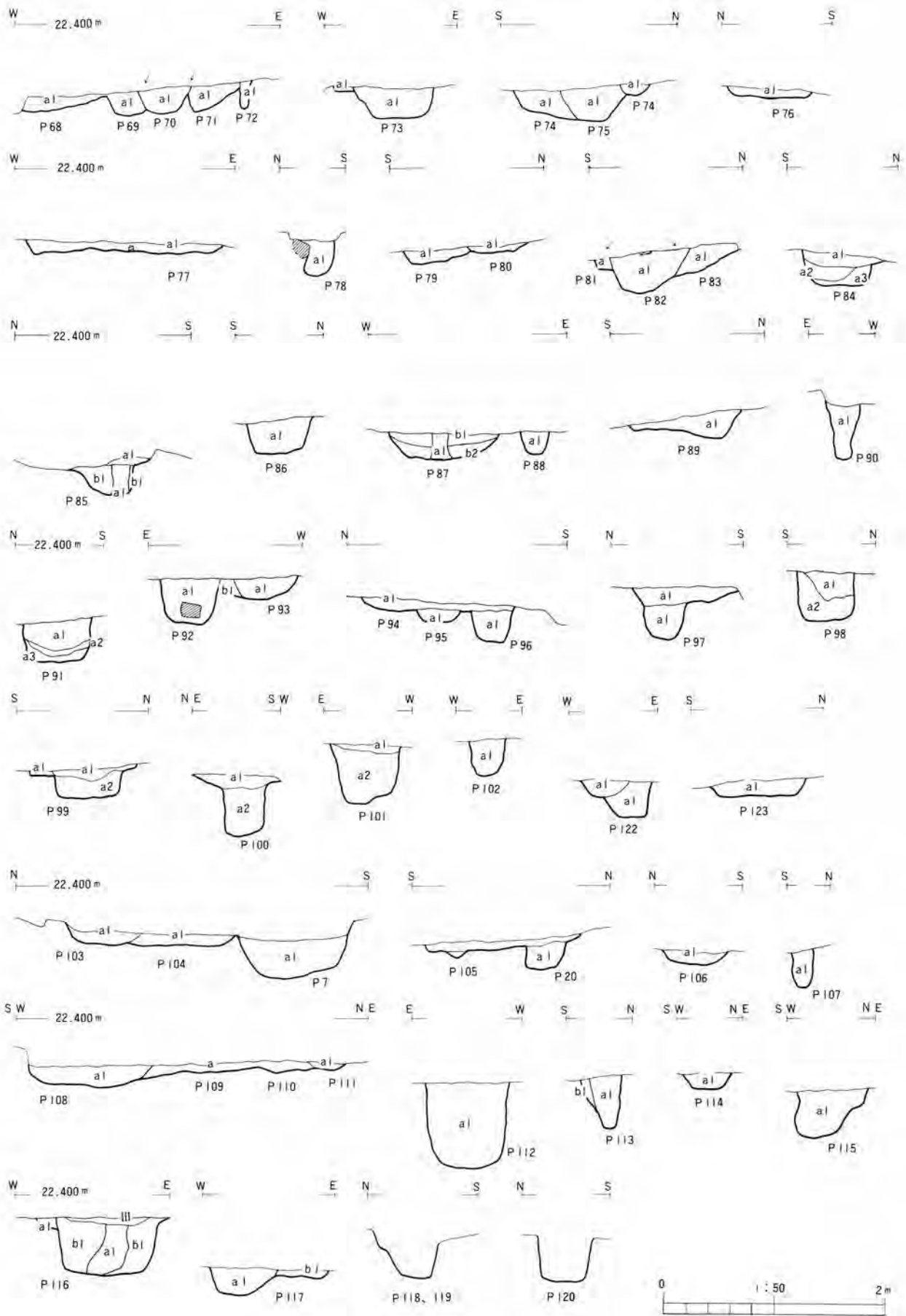
第2表 第2号掘立柱建物跡柱穴計測表



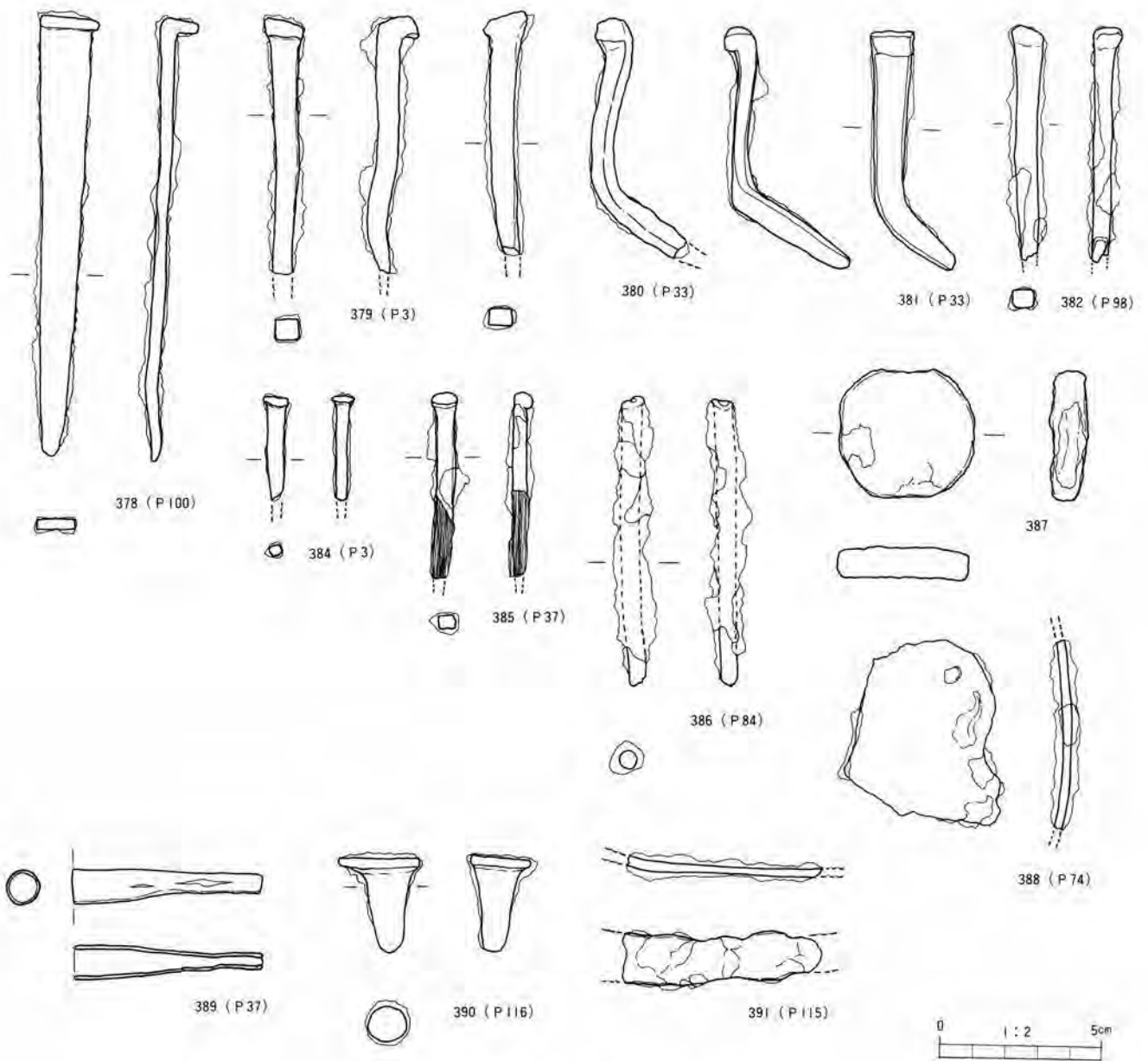
第51图 第1号、第2号掘立柱建物跡



第52图 柱穴、土壤断面图(I)



第53图 柱穴、土壤断面图(2)



第54図 柱穴、土壙出土遺物

d) 炉跡

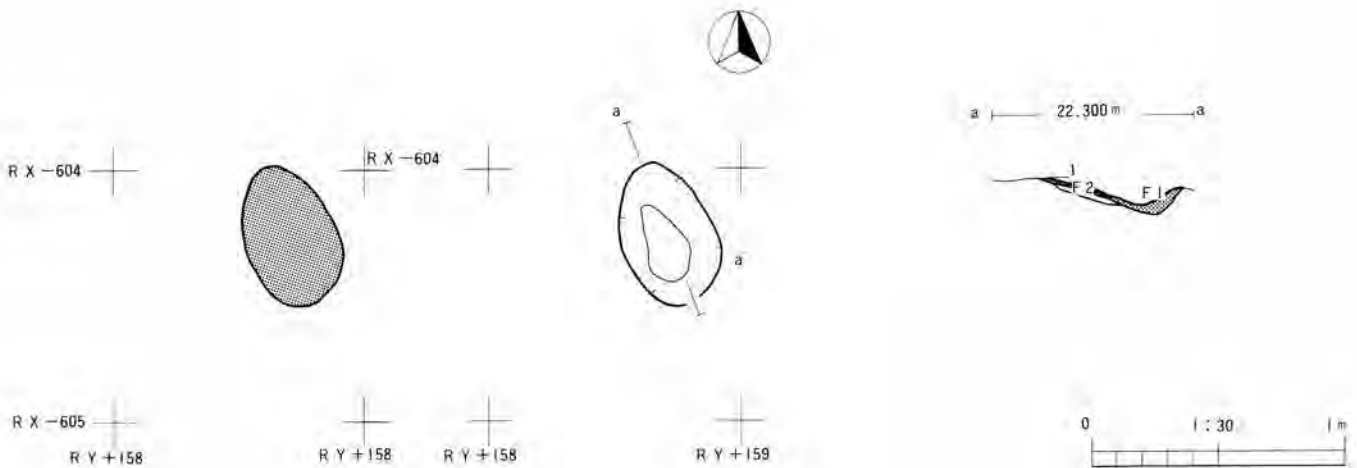
1. 第1号炉跡

規模 I F区の中央部の北に位置する。III層上面で検出した。平面形は、楕円形を呈し、58cm×37cmを測る。深さは、検出面から最深部で11cmを測る。

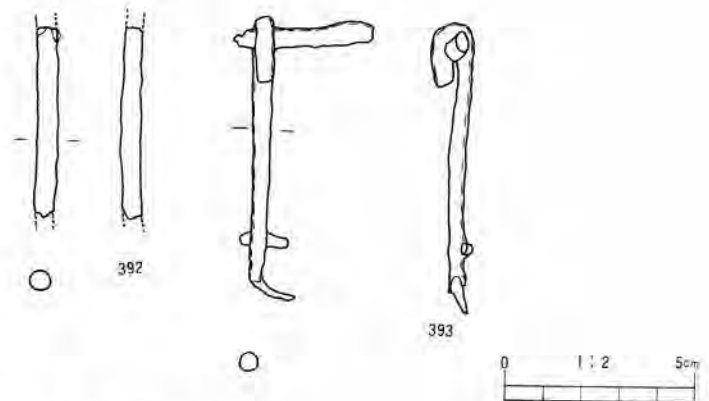
土層は、2層に分かれる。F1層は、暗赤褐色の焼土を含む柔らかい黒色土層である。F2層は、褐色土を基本土とする締まりのない浸透層である。

遺物 遺物は、392が丸釘。393は、鉄製品。溶接された棒状の金具である。いずれもF2層から出土している。

第1号炉跡の南で、柱痕跡に多量の焼土を含んだ柱穴（P38, 58）を検出しているが、炉跡との関係の有無は確認できなかった。



第55図 第1号炉跡



第56図 第1号炉跡出土遺物

2. 第2号炉跡

I H区の北に位置する。地山面で検出し、平面形は、焼土がまだらに広がる不整形円形（300cm×250cm）を呈し、鉄板、土製品の破片、礫が点在していた。焼土面まで掘り下げた段階で、浅い掘り込みは大きく3つの部分に分かれた。北西部の一部を土製の枠で囲まれた焼土域、東部の炭の広がり、南西部の灰の広がりである。

規模

ほぼ円形をなす焼土域は、輪郭の一部を内湾、内傾する長方形の土製品の枠で囲まれており、焼土域の中には、大量の土製品の破片が堆積していた。焼土域を囲む土製品は、炉石のようにとくに掘り込んで掘えた形跡はみられなかった。また、掘り込み面の南側の縁から斜面にかけて大小の礫が検出している。

埋土層は、4層からなり、いずれも固く締まった層である。F1層は、真砂土混じりの褐色土。F2層は、焼土を含む黄褐色土。F3層は、褐色土。F4層は、炭の塊を含む粘性のある明褐色土である。F5層は、炭をわずかに含む赤褐色の焼土層である。F6層は、炭と灰の混じるにふい赤褐色の薄い層である。F7層は、多量の灰を含む柔らかい黒褐色土。F8層は、炭層である。

遺物は、焼土域からは、大量の土製品、灰の層からは、鉄製品が出土している。

遺物

394は、土製品。内傾、内湾する直方体の土製品。上面と外面にへらにより交差する刻目を施す。また上面に8個の穴がほぼ平行に並ぶ〔残長35.0cm×残高16.0cm×幅11.0cm〕。穴の径は1.8cm～2.0cm、深さは0.5cmである。全面へら削り調整。胎土は、鈍い黄褐色土で、スサは含まない〔残長36.0cm×残高16.0cm×幅12.0cm〕。395は、土製品。内傾、内湾する土製品。外面にへらによる交差する刻目を施す。全面をへら削り調整し、角を面取りしている。内面の一部が焼成を受け、青黒く変色する。胎土は、鈍い黄褐色土で、スサを含まない〔残長41.8cm×高さ10.0cm×幅9.3cm〕。

396は、土製品。内湾し、上面が傾斜をなし先細りとなる。上面にへらによる交差する刻目を施し、外面には2条の縄目痕が残り、底面には、全面に産目の痕が残る。全面へら削り調整。胎土は、鈍い黄褐色土で、スサは含まない〔残径34.0cm×最大高20.0cm×残幅31.0cm〕。

397は、土製品。やや内湾する直方体の土製品。外面にへらによる交差する刻目を施し、角の一部を抉る。全面へら削り調整し、角を面取りしている。胎土は、鈍い黄褐色土で、スサは含まない〔残長25.0cm×残高23.0cm×幅12.0cm〕。

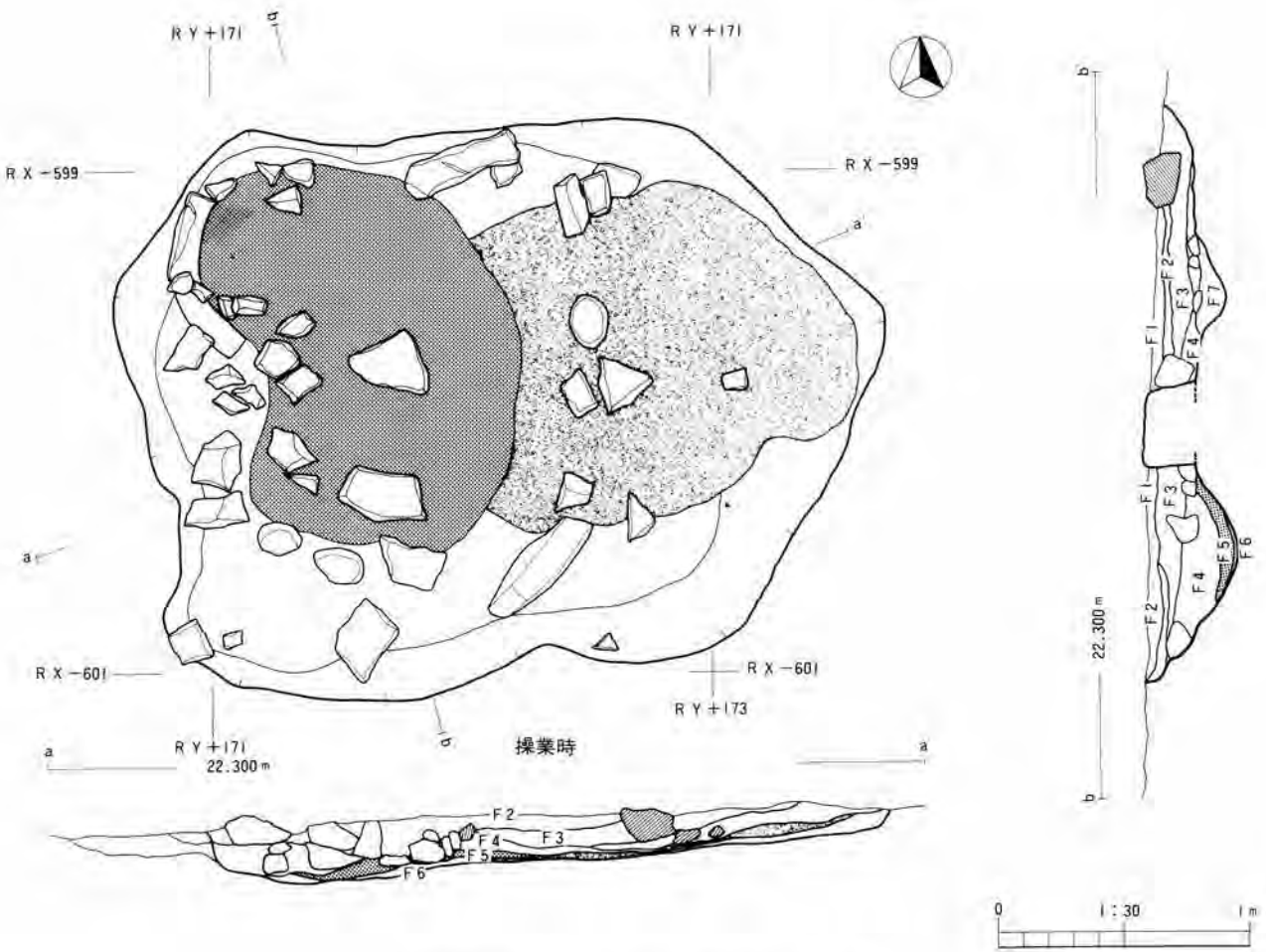
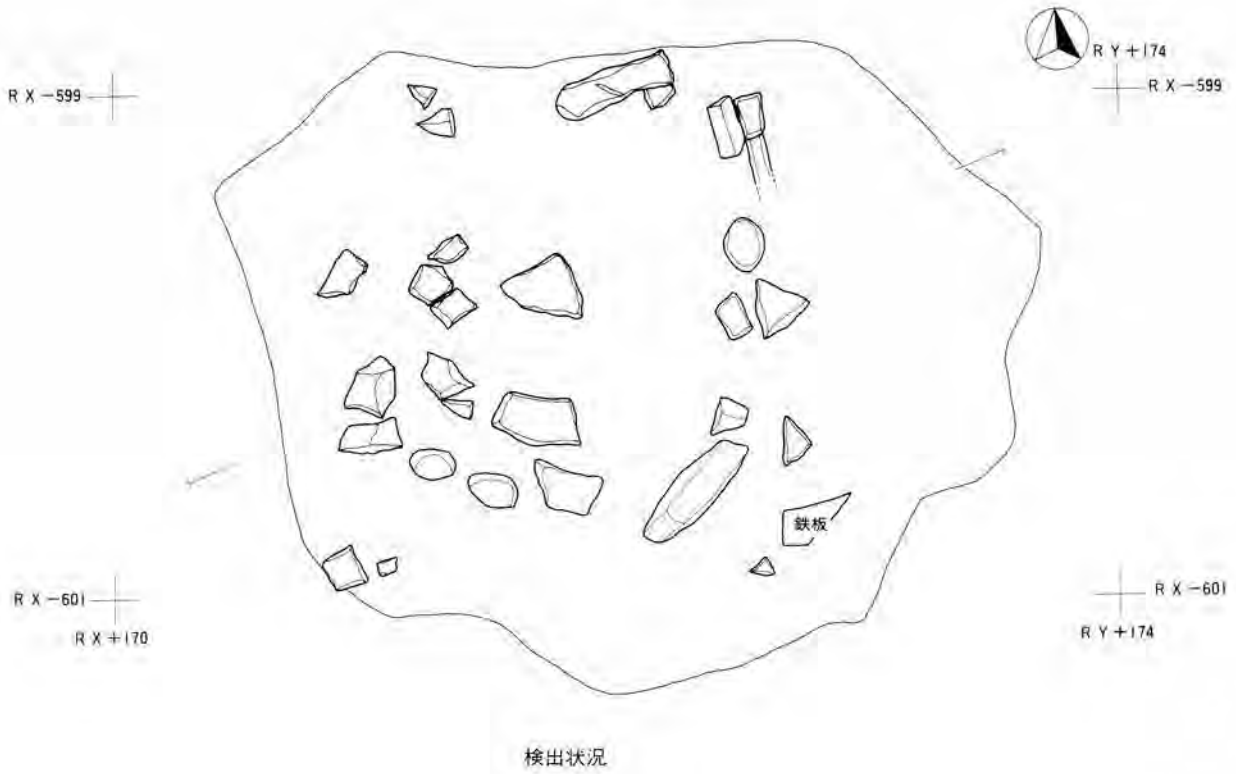
鉄製品はすべてF7層から出土している。

5は、細く薄い板状の鉄製品で、先端が直角に折れ、尖っている〔12.0cm×0.3cm〕。

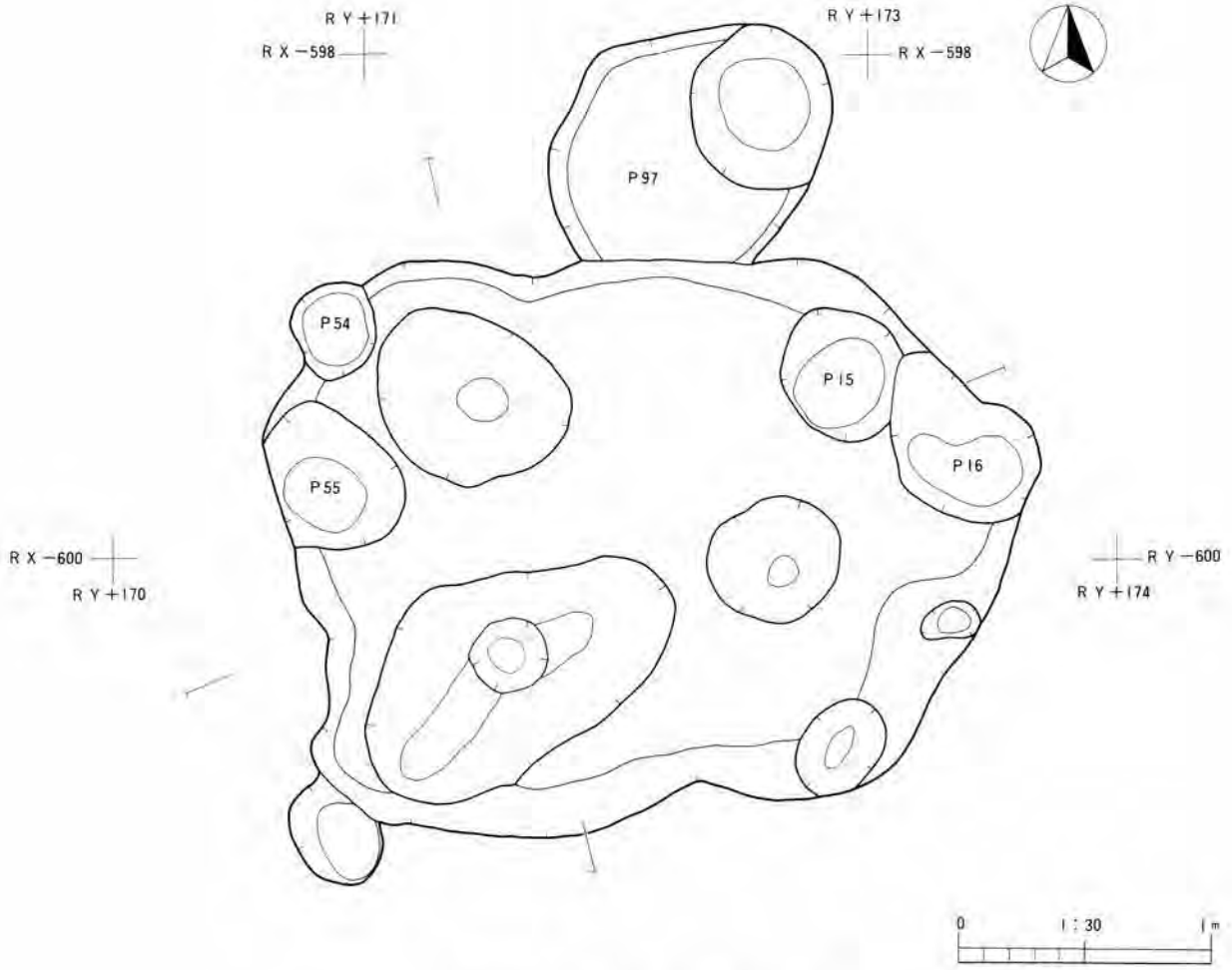
398は、細く薄い板状の鉄製品で、先端が直角に折れ、尖っている〔12.0cm×0.3cm〕。

399～405は釘である。長さはまちまちで、首をねじ切られたものがある（403）〔10.8cm～4.3cm〕。406は、片端しに方形の穴が穿たれた棒状の鉄製品〔径2.1cm×21.3cm〕。

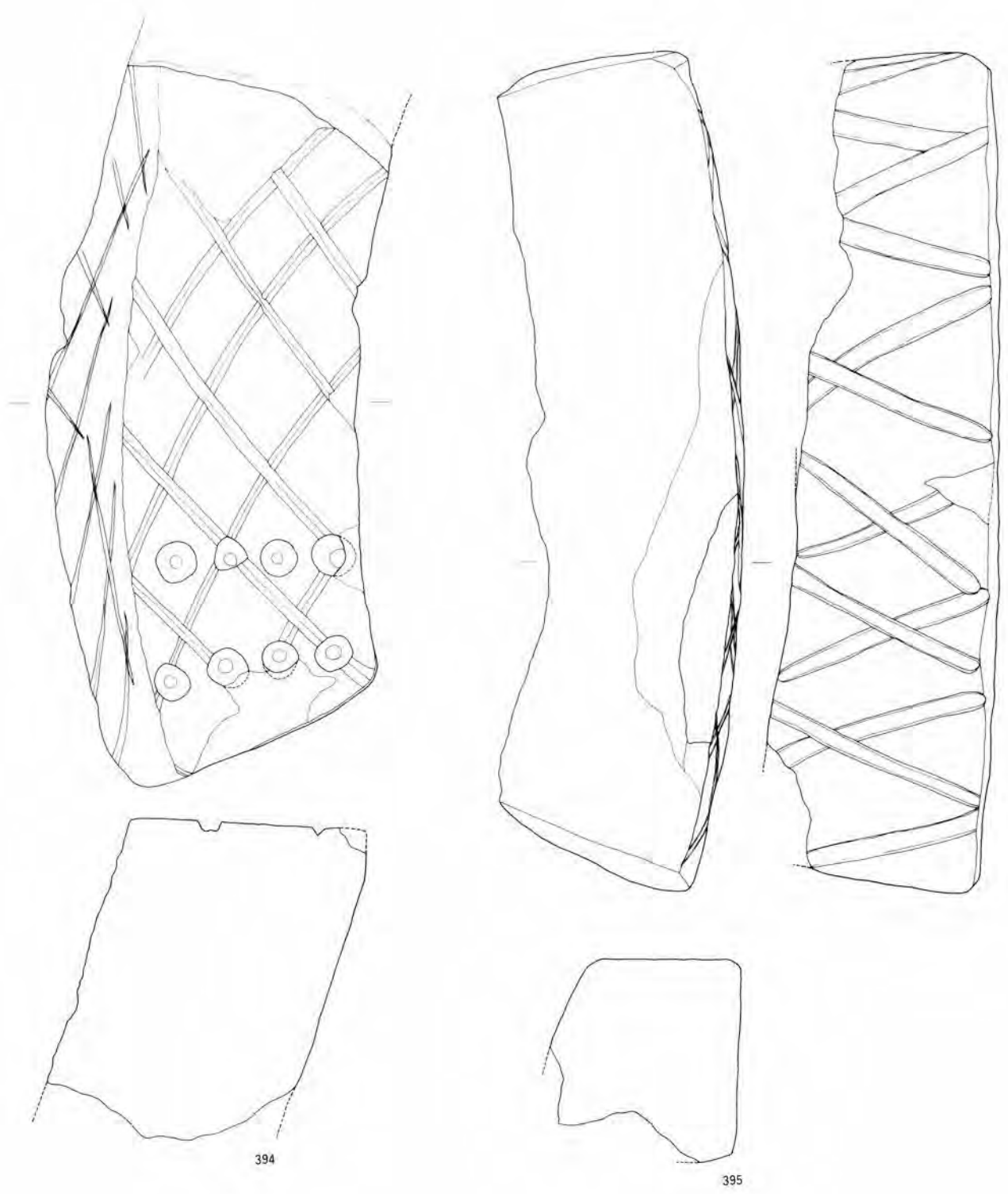
写真図版2は、焼土域の土製品の復元を試みたものである。径約100cmの円形をなす。



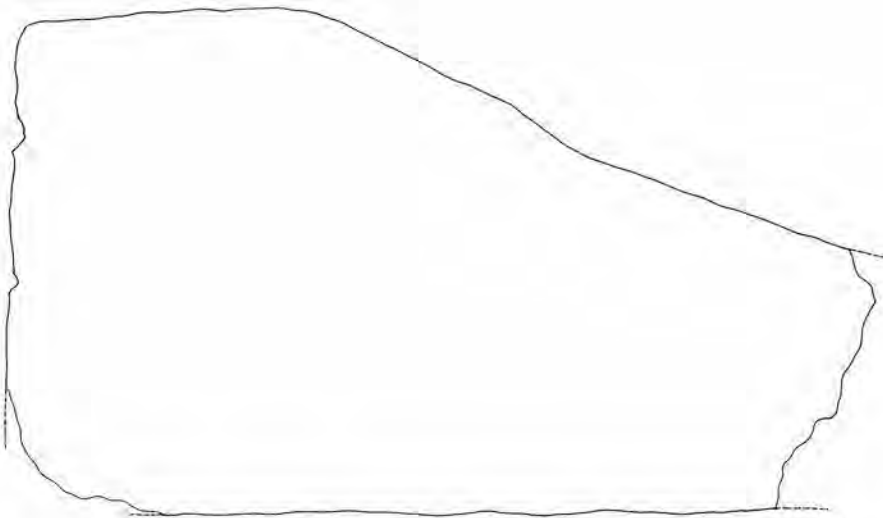
第57図 第2号炉跡 検出状況、作業時



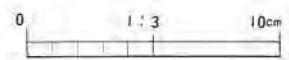
第58图 第2号炉迹 完掘状况



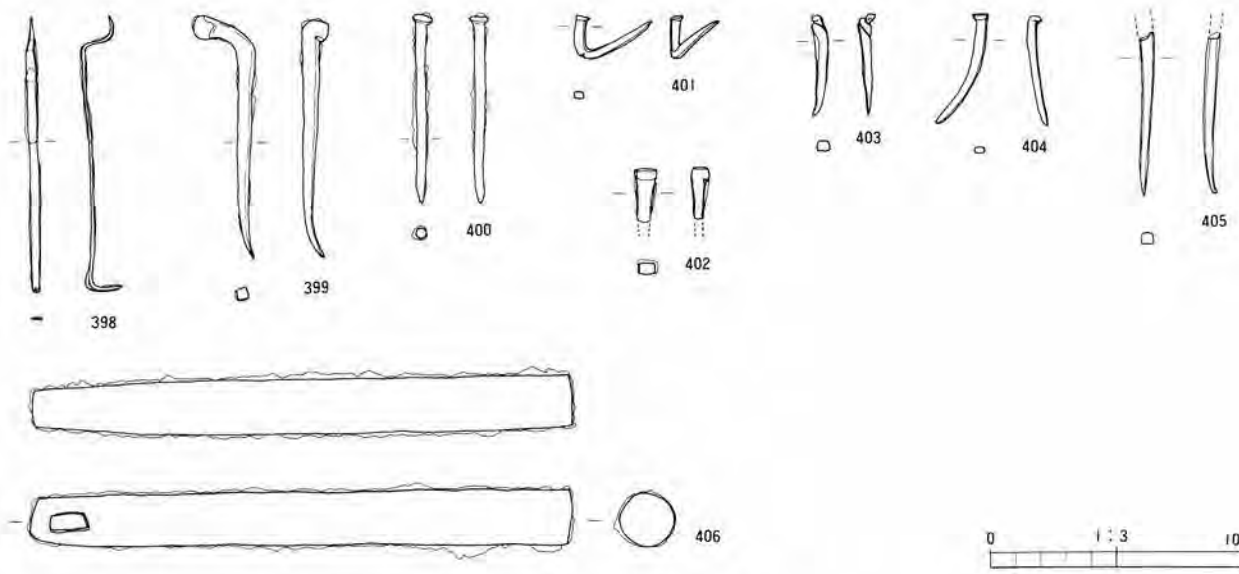
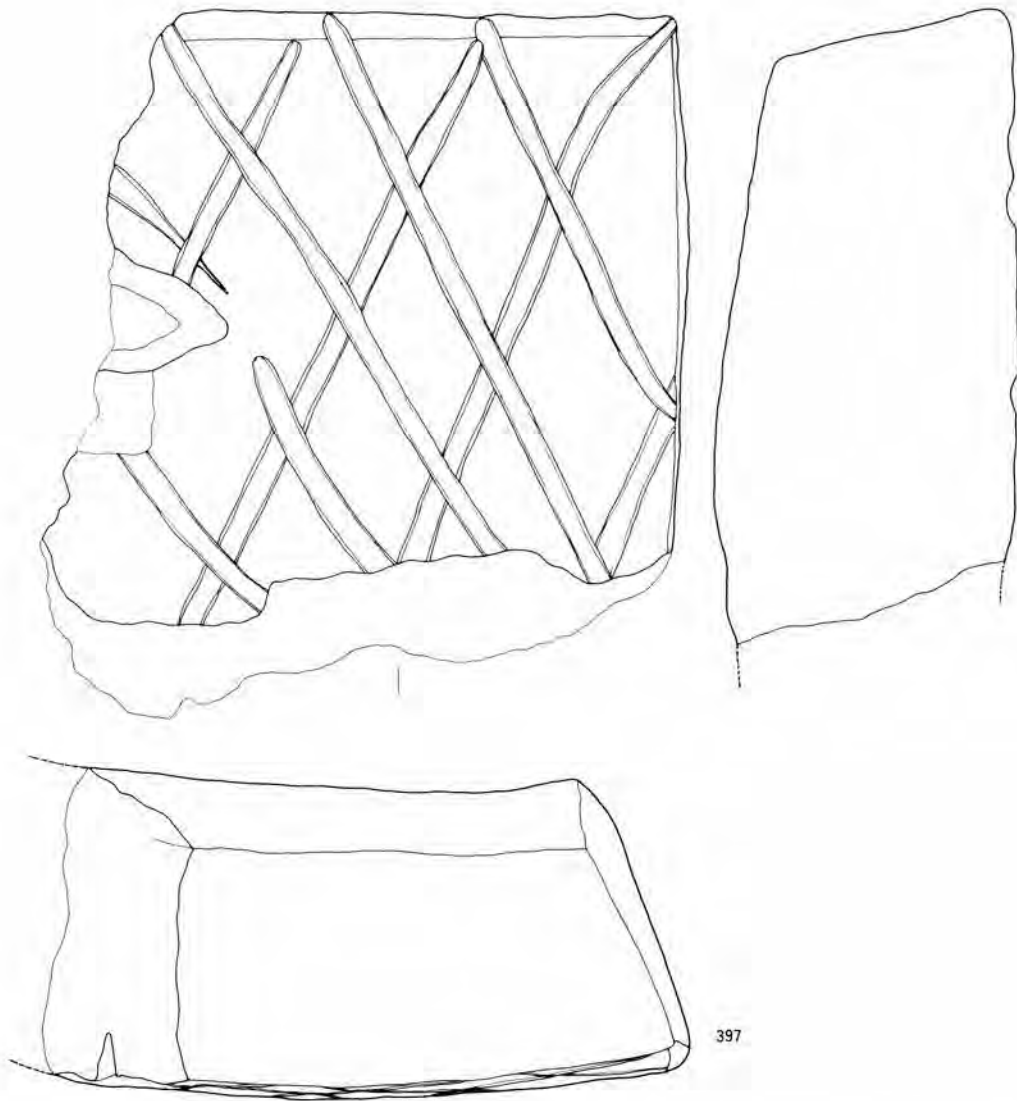
第59図 第2号炉跡出土遺物(1)



396



第60图 第2号炉迹出土遺物(2)



第61图 第2号炉迹出土遺物(3)

3. 第3号炉跡（第63図）

調査区の南東部、I H, J区の境に位置する。検出面は、V層上面であるが、II層を剥いだ段階で、炉跡の南斜面上から大量の石が出土した。IV層の石を取り除いた時点で、炉の平面形が確認された。炉は、盛土であるV層で築かれた平坦地の端を掘り込んで構築されていることが確認できた。

炉は、竪穴と石組から構成されている。円筒形に掘り込んだ後に、南の斜面側の面を除いた壁に石組を施す。石組と床に粘土を貼り付けて平滑にしたものを焼き締めて仕上げている。底面に石組はない。東側の石組の外側にも焼土が観察され、作り直した可能性が考えられる。斜面で検出した大量の石と炉との関係は不明である。また、炉の周辺では柱穴などの遺構は検出されなかった。

炉の規模は、内径80cm、深さは、検出面から80cmである。

土層は、炉廃棄後の盛土層（II a, II b）、旧表土である大量の石を含む埋土層（IV a, IV b）、**規模**
炉の構築層（K 1～K 4）、炉構築以前の盛土層（V a～V c）に分かれる。

II a層は、褐色土を基本土とする固めの層。II b層は、にぶい黄褐色土を基本土とし、にぶい黄橙土を含む締まりのない層である。**土層**

IV層は、暗褐色土を基本土とし、石の他に粘土塊、炭などを含む柔らかく締まりのない層である。

炉内の埋土は2層に分かれる。いずれも暗褐色土層を基本土とし、A 1層の上には多数の礫を含み、A 2層は、炭、粘土塊を含んでいる。

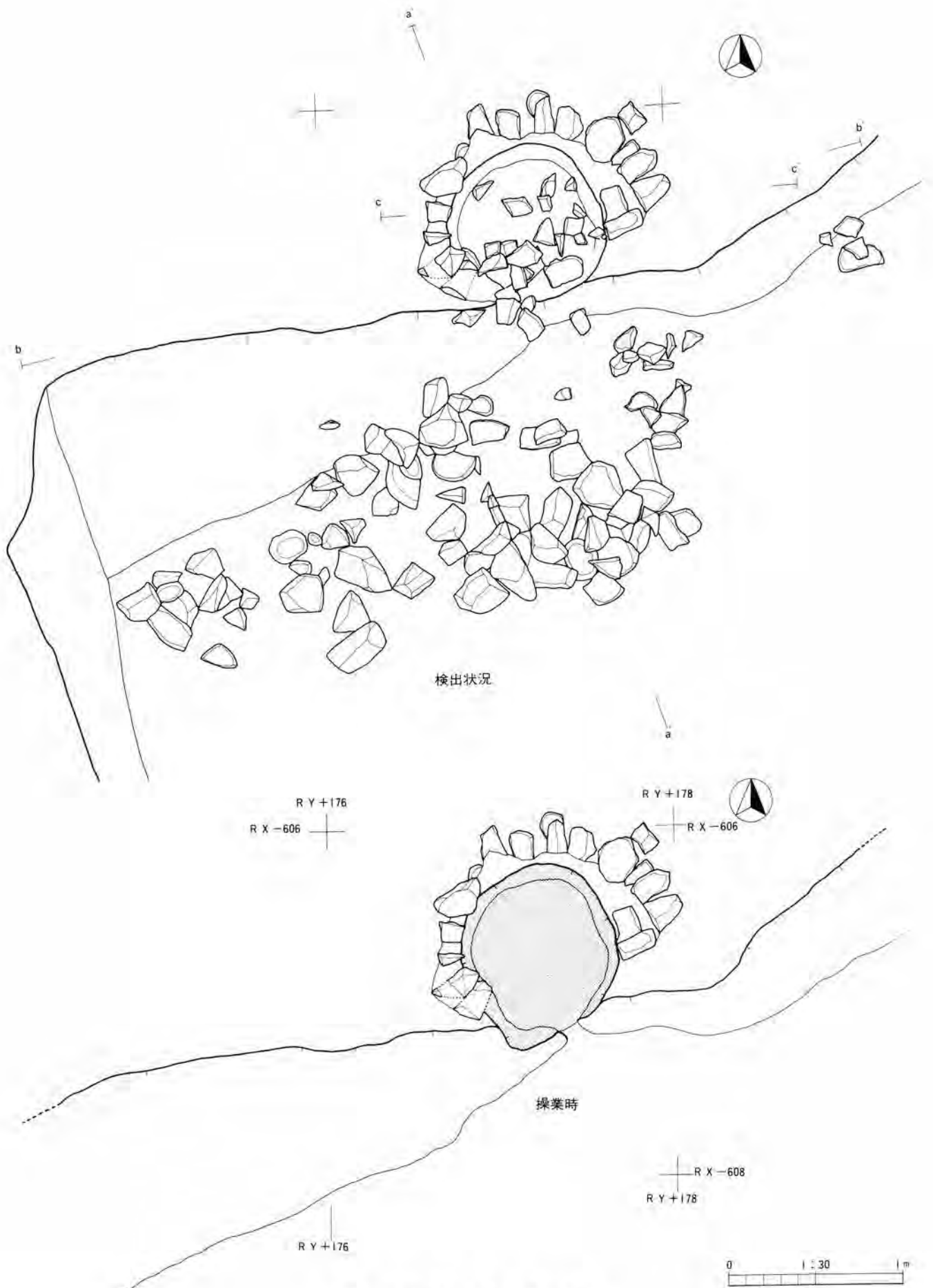
K 1層は、赤褐色土を基本土とする固く締まりのある層で、炭粒を含む。

K 2層は、褐色土を基本土とする固く締まりのある層で、粘土粒を多く含む。

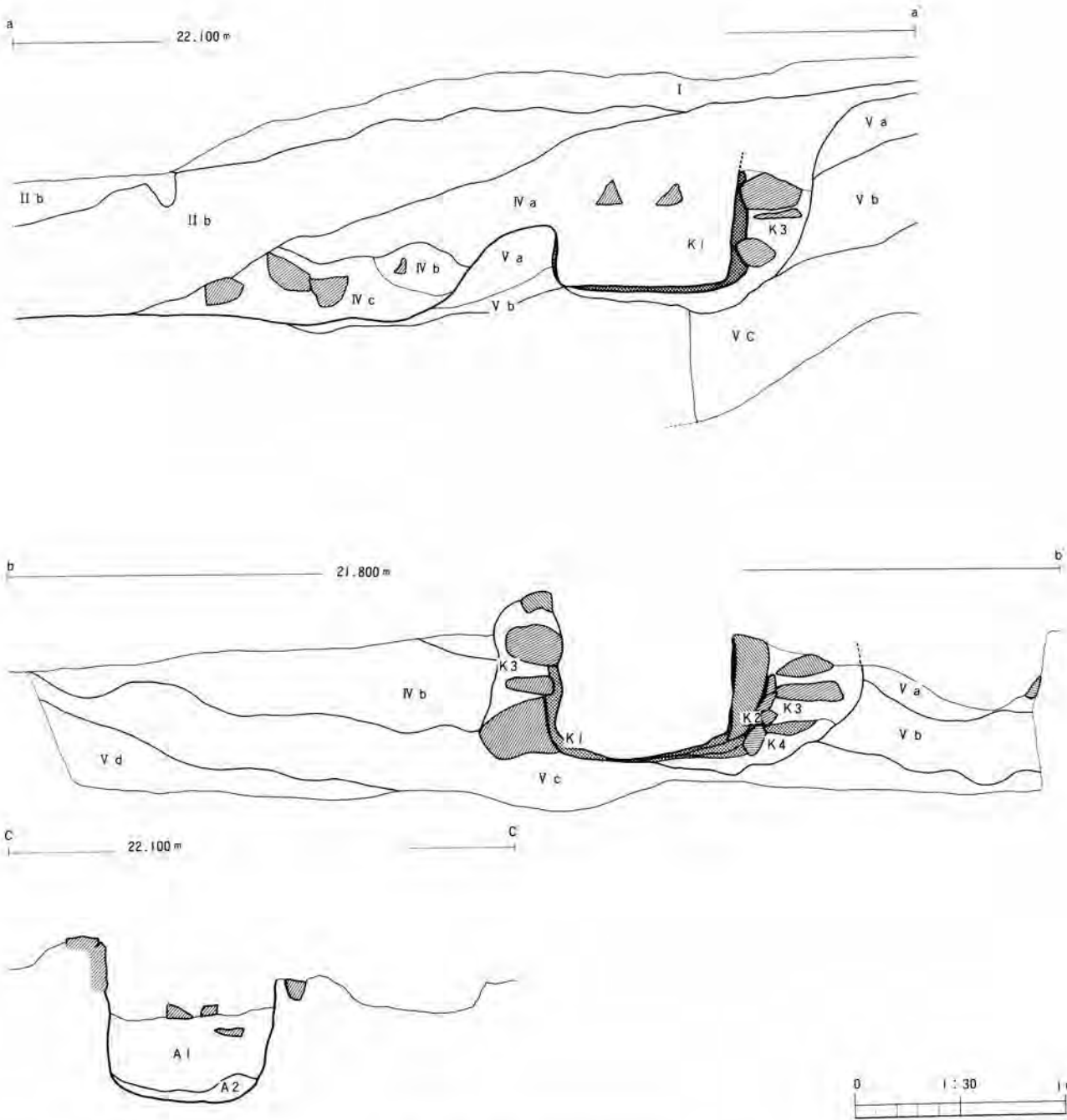
K 3層は、灰褐色土を基本土とし、固く締まっている。

K 4層は、暗褐色土を基本土とする固く締まりのある層で、少量の炭が混じる。

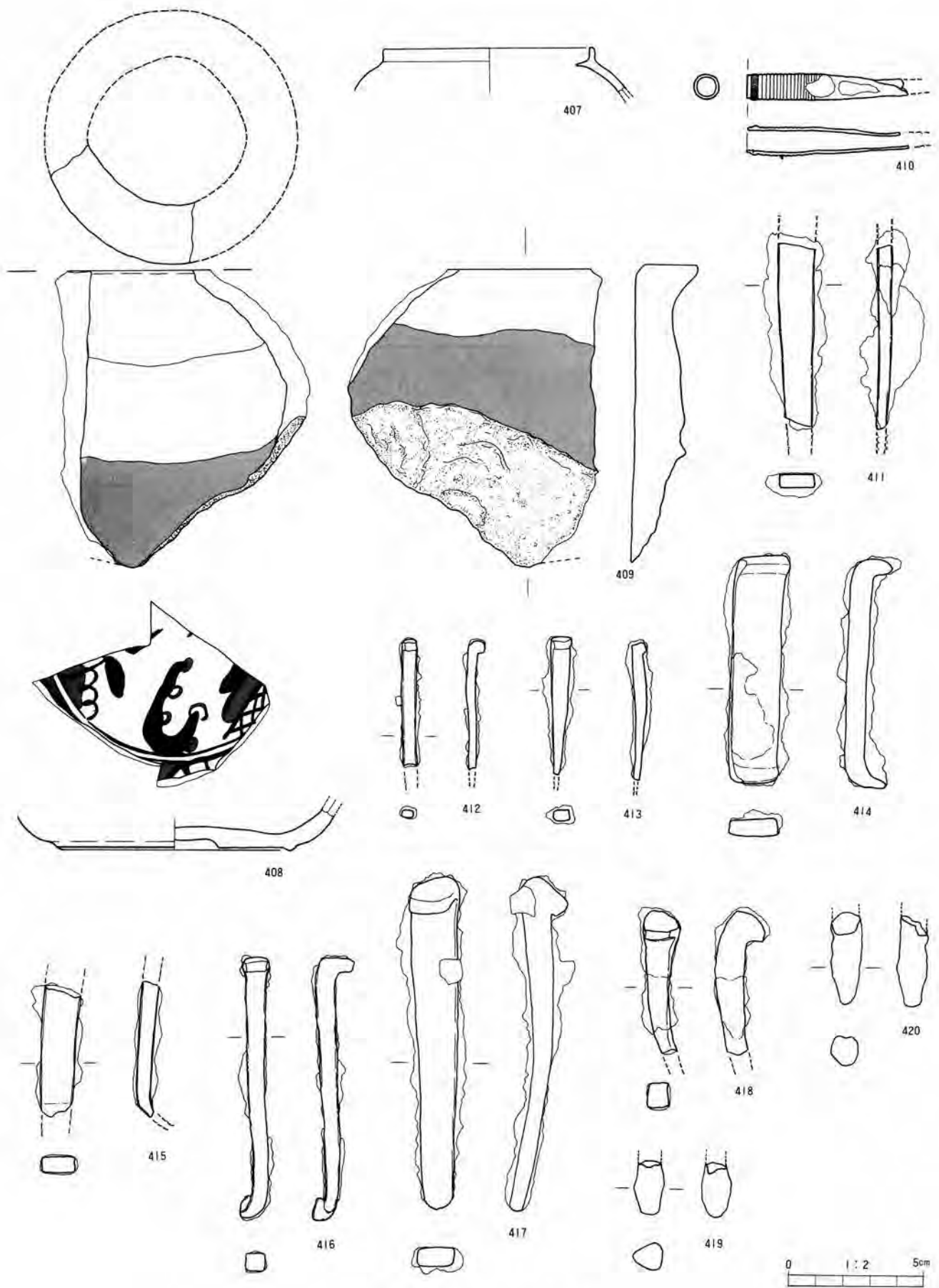
斜面の南側は、整地されている。整地面では、炭混じりの焼土が東西方向に縞をなしているのが観察された。



第62図 第3号炉跡 検出状況



第63图 第3号炉迹断面图



第64图 第3号炉迹出土遗物

遺物は、V層上面と炉中から出土したものである。

407は、陶器で急須の口縁部。ヘラ削りで調整し、無釉のまま焼き締めている。未完成品。胎土は、黄色を呈し、産地年代不明である〔7.9cm×-×1.5cm〕。

408は、染付磁器の皿。内面底部がやや張り出し、高台脇から緩やかに立ち上がる。蛇ノ目凹形高台。文様は山水文の一種か。産地不明で、18世紀末～19世紀に伴う〔-×底径8.5cm×残高1.4cm〕。

409は、羽口。やや厚手で、内径は推計で5.3cm。胎土は、先端部の内、外面が灰色に変色し、端末部は淡黄色土である〔全長11.0cm〕。

410は、銅製品で煙管の吸口。炉内埋土から出土したもの〔残長5.8cm×最大径1.0cm〕。411～413、416～420は角釘で416～420は船釘である〔416は、10.8cm。000は、12.2cm〕。419、420は先端部である。414、415は鋸状の鉄製品である〔414は全長8.4cm×幅1.8cm×厚さ0.7cm〕。

遺物

e) I B区焼土遺構(第65図)

I B区の南の平坦部に位置する。検出面は、V層上面、平面形は、400cm×220cmの楕円形を呈す。焼土層は、2層に分かれる。下層の焼土は西に広がっているが、範囲は確認できなかった。土層は、すべて柔らかく、締まりのない層である。A 1層が黄褐色の盛土層、B 1層が多量の炭を含む暗赤褐色の焼土層、C 1層が灰赤に近いふい赤褐色層、D 1層が炭や土製品の破片を含む暗赤褐色の焼土層。

規模

土層

検出地点、検出層などからみて上下の焼土とも、II A区の焼土と同様に廃棄されたもので、2層の焼土の時間差はあまりないものと思われる。2号炉、3号炉との関連は不明であるが、V層上面から検出されており、時期的に炉跡に伴う可能性は大きい。

遺物は、D 1層から出土したものである。(第67図)

遺物

421は陶器で耳付の壺。外面に透明釉を施され、胎土は浅黄色を呈す。産地年代不明〔口径11.9cm×-×残高1.7cm〕。

f) I F区炭の広がり(第66図)

I F区の東部に位置する。検出面は、III層上面。240cm×160cmの南北に長い楕円形を呈する。遺構の南と北の端に礫が集まっている。礫が、埋設あるいは組まれたような痕跡は観察されなかった。

規模

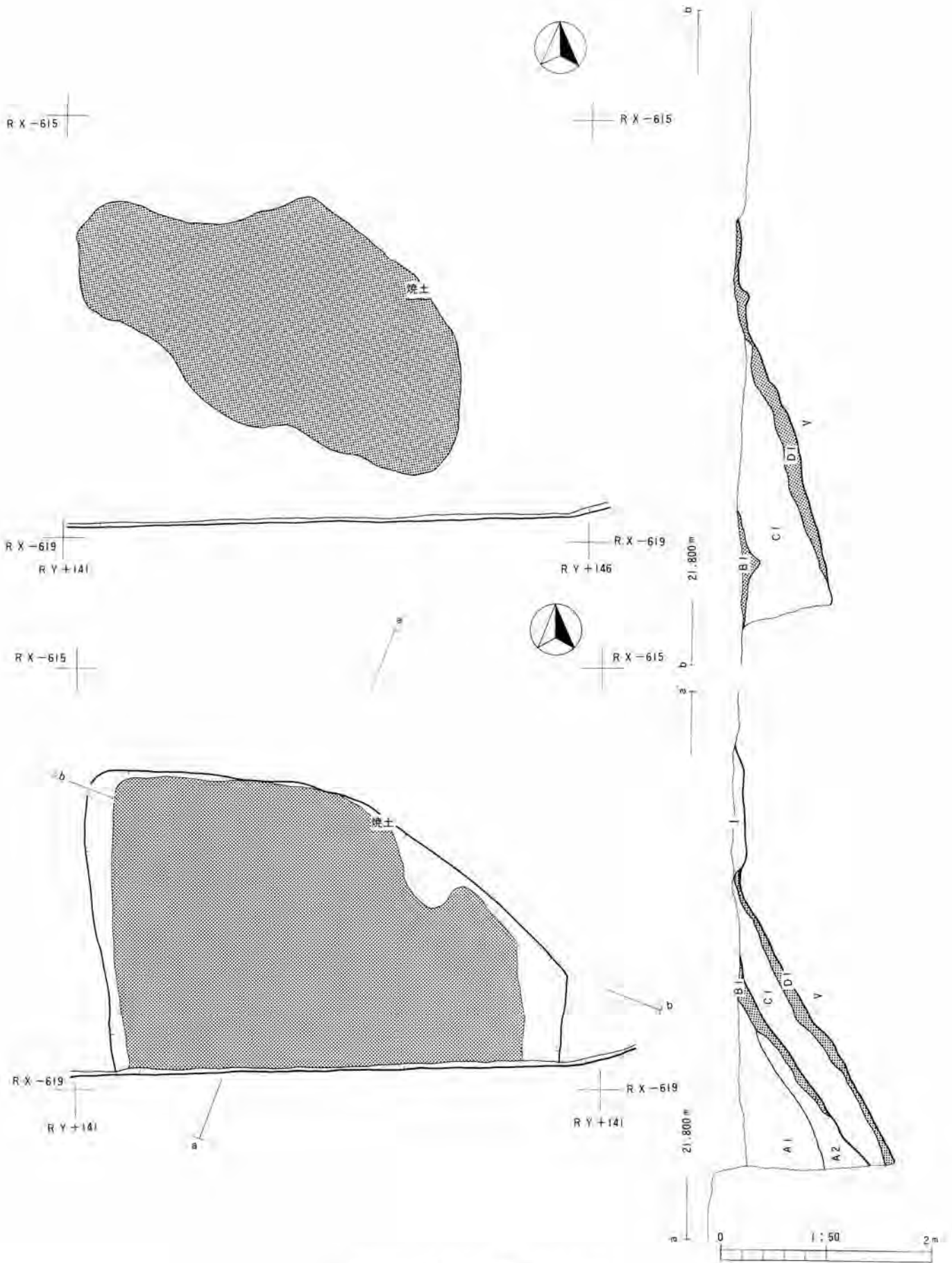
土層は、A 1層が真砂土層、B 1層が、焼土混じりの炭層である。

土層

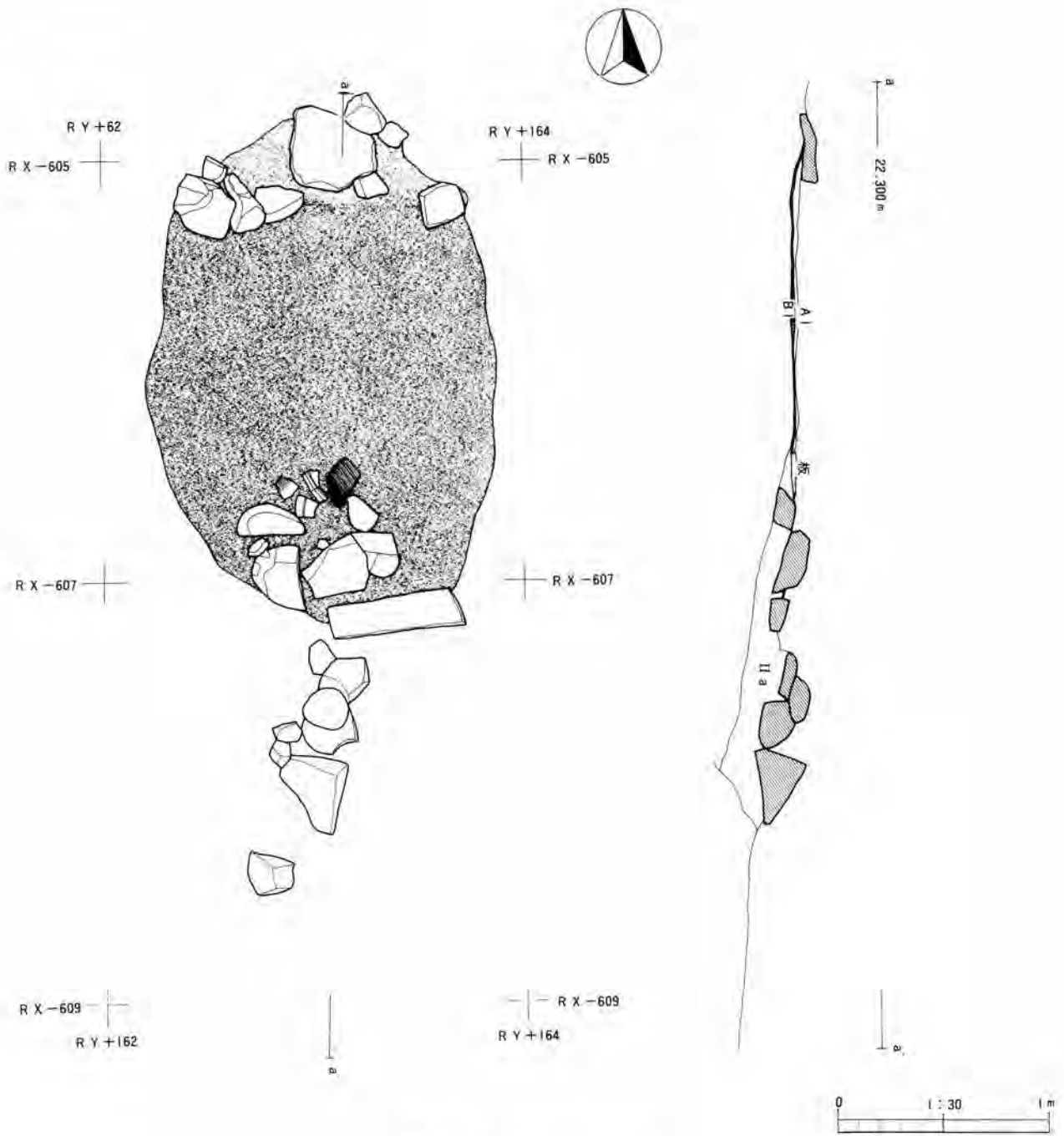
遺物は、炭層から火鉢、甕、ゴムの管等が出土している。(第67図)

遺物

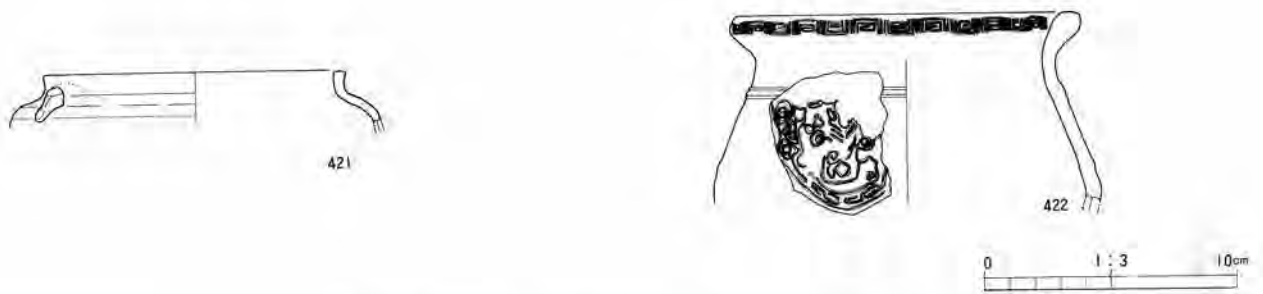
422は、瓦質土器の火鉢。頸部がくびれ、口縁部を玉縁状に成形する。口縁部に雷文を巡らす。外面は黒色であるが、火を受け一部変色している。産地年代不明〔口径13.8cm×-×8.0cm〕。



第65図 I B 区の廃棄された焼土



第66図 I F 区炭の広がり



第67図 I B 区焼土、I F 区炭の広がり出土遺物

g) 遺構外出土遺物

遺物は、陶磁器、鑄造関連の遺物、鉄製品に大きく分けることができる。調査区のほぼ全域から出土しているが、量的には、II I、II J 区のVI b 層から遺物の大半が出土したことが大きな特徴である。

紙幅の都合から代表的なもののみを図示した。各区ごとに層順にしたがい記述する。鉄銭(表3)、鉄滓(表4)、自然遺物(表5、6、7)については表にまとめた。陶磁器の法量は、口径、底径、器高の順に末尾に記し、括弧で括る(単位cm)。

I A 区 I 層(第69図、第70図)

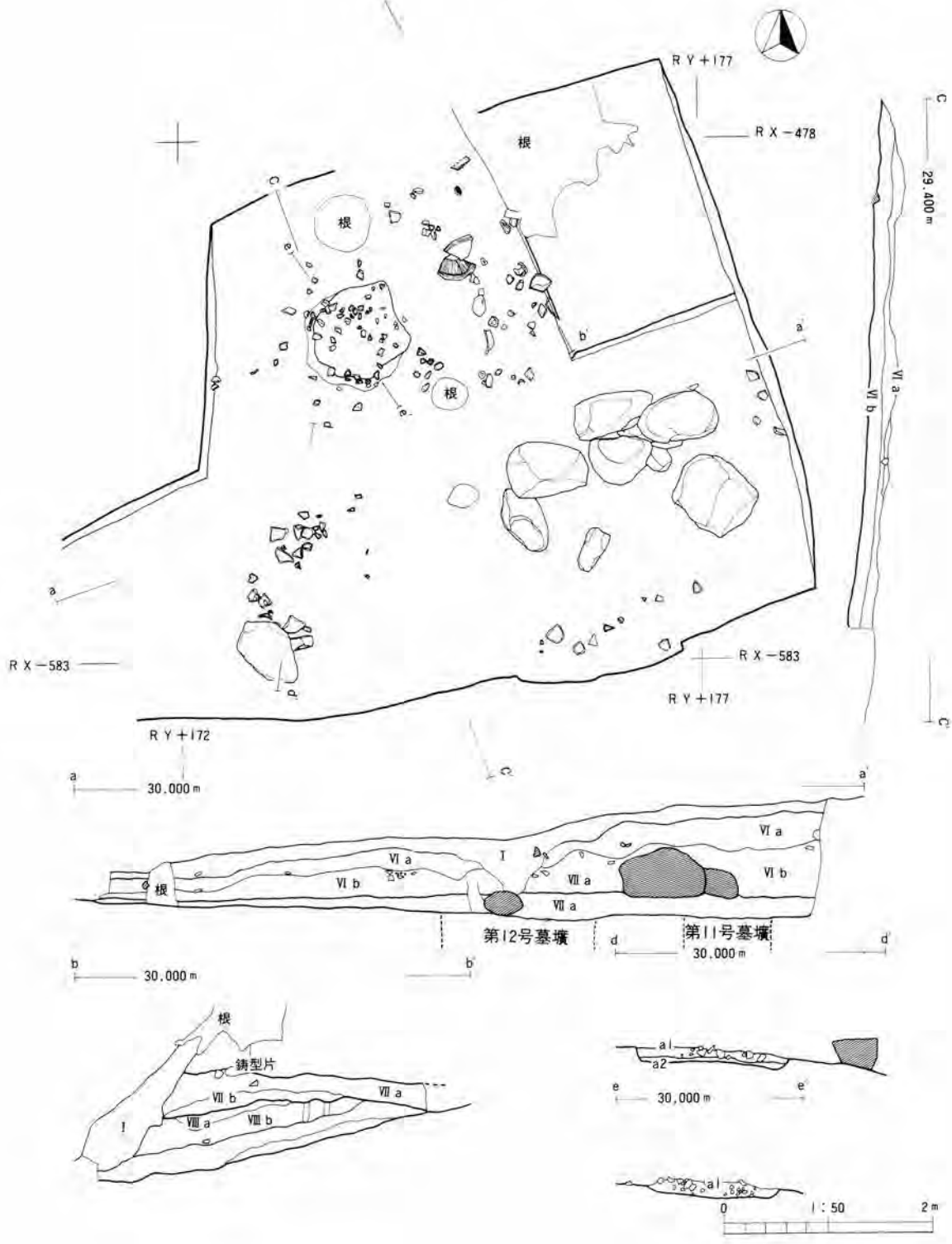
- 皿** 423は磁器質陶器の皿である。内面に透明釉が施され、外面は無釉である。外面底部に煤が付着している。灯明皿か。年代産地は不明〔 $\times 5.0 \times$ 残高0.6〕。
- 碗** 424は陶器の碗である。高台は浅く、高台脇からやや湾曲しながら立ち上がる。内面底部にガラス質の融解物が付着する。産地年代は不明〔 $\times 5.0 \times 2.0$ 〕。
- 擂鉢** 425は擂鉢である。擂鉢は合計22点出土しており、A、B二つのタイプに大別できる。Aタイプは、薄手で底部から開くように真っすぐに立ち上がり、口縁部をやや肥厚させ玉縁状に成形し、鉄釉を施す。Bタイプは、厚手で底部からやや湾曲しながら立ち上がり、口縁部をかなり肥厚させ二条の沈線を施し、無釉である。3はAタイプで、胎土は淡黄色を呈す。産地年代は不明。
- 煙管** 426は銅製品で煙管の雁首である。火皿が小さく、脂返しの湾曲も小さい〔全長4.0 \times 首部径1.0 \times 火皿径1.0〕。
- 菜切包丁** 427は菜切り包丁で、木質が付着する〔刃渡り約14.0〕。
他に鉄銭11点、角釘6点、丸釘4点が出土している。

I B 区 I 層(第69図、第70図)

- 青磁** 428は青磁の花生で肩と頸部である。肩に稜線が入る。肥前産で18世紀代に伴う〔残高6.4 \times 頸部径4.2〕。
- 徳利** 429は陶器の徳利である。口縁部に縁帯をもち、胎土は肌色を呈し、白い粒が混じる。鉄釉を施される。産地年代不明〔残高2.1 \times 口縁部径4.3〕。
- 釘** 430は角釘。(7.7cm)。釘は他に6点出土している。
431は鉄製品で、鋸と思われる〔幅1.6 \times 長さ10.0 \times 厚さ0.4〕。
他に器形不明の鉄製品6点出土する。

I C 区 I 層(第69図、第70図)

- 鉢** 432は陶器の鉢。緩く湾曲しながら立ち上がる。腰部は無釉で、内面は刷毛目釉が施される。胎土は鈍い黄色を呈する。唐津系で、18世紀以降に伴う〔20 \times — \times 3.4〕。
- 擂鉢** 433は擂鉢。Aタイプでやや小ぶり。胎土は淡黄色を呈し、鉄釉を施される。産地年代不明。
- 羽口** 434は羽口で、薄手の大口径タイプである〔口径は推計で7.0 \times 全長13.0〕。
羽口については、炉に挿入される部分を先端部、送風口を端末部と呼ぶことにする。羽口は、厚手で小口径タイプ、薄手の大口径タイプに大別できる。胎土は、外面は端末部が鈍い黄色、



第68图 II J区VI b層遺物出土状况

先端部には溶滓が付着し、溶滓の周りが灰色に変色する。内面は、端末部から先端部にかけて赤褐色に変色し、先端部には黒い粒が無数に付着している。断面で見ると中心部は鈍い黄褐色である。この胎土の変化は、本遺跡で出土したすべて羽口について観察されたことであり、以下とくに記さない。

寛永通寶 435、436は寛永通寶である。437は船釘〔残長15.0〕。438は鉄製品で、頭部を鉤状に曲げる〔残長2.8×幅1.8〕。
他に鉄銭2点、器形不明の鉄製品13点、小鉄塊2点が出土している。

I C区 III層 (第69図、第70図)

碗 439は染付磁器の碗。高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部でほぼ垂直となる。外面草花文。高台は施釉される。産地は不明で、18世紀後半～19世紀に伴う〔8.1×3.4×4.1〕。

440は陶器の碗。やや直線に近い立ち上がり。全体に薄い褐色釉を施し、濃い褐色釉で筆がきの線をいれる。産地年代は不明〔11.0×－×残高5.0〕。

皿 441は陶器の皿。やや内湾しながら立ち上がる。青緑灰釉。胎土は淡黄色で、黒い微粒子が混じる。唐津系で、17世紀以降に伴う〔12.9×－×2.3〕。

德利 442は陶器の德利。口縁部を玉縁状に成形する。胎土は灰色を呈し、黒の粒子が混じる。産地年代は不明〔3.7×－×残高2.0〕。443は角釘である〔12.5〕。

その他、鉄銭2点、器形不明の鉄製品17点、小鉄塊3点、釘4点が出土している。

I D区 I層 遺物なし

I D区 III層 (第69図、第70図)

碗 444は磁器の碗。畳付を面取りしている。釉は灰色で細かい貫入がある。高台内に朱の銘があるが判読できない。高台は施釉される。産地年代は不明〔－×3.2×1.8〕。

永樂通寶 445は永樂通寶である。

鍔釘 446は鍔〔11.2×3.0〕で、447は角釘である〔9.0〕。

その他、鉄銭2点、器形不明の鉄製品6点が出土している。

I F区 I層

器形不明の鉄製品2点

I F区 III層 (第71図)

鍔釘 448は鍔〔5.0〕。449は釘〔7.6〕。

I H区 I層 遺物は検出されなかった。

I H区 III層 (第71図)

寛永通寶 450は寛永通寶である。

I J区 I層 (第69図)

皿 451は染付磁器の皿。内面胴部に牡丹文、見込は草文か。外面は唐草文である。蛇ノ目凹形高台

で、高台は無釉である（凹部を除く）。産地は不明、18世紀～19世紀に伴う〔－×8.7×1.9〕。
その他、丸釘14点、器形不明の鉄製品21点が出土している。

I J区 III層（第69図）

452は陶器の碗。高台脇から内湾しながら立ち上がる。高台がやや外傾する。内、外面は灰釉を施され、高台は無釉。高台内に墨書が認められるが判読できない。産地年代は不明〔－×5.5×4.2〕。

碗

453は播鉢。かなり厚手で、櫛目も粗い。櫛目に摩滅が見られない。胎土は鈍い橙で、白い細礫

播鉢

がかなり混じる。産地年代は不明〔底径約24.0〕。
その他、器形不明の鉄製品10点が出土している。

I区 出土地点不明遺物（第71図）

454は煙管の吸口。脂返しの湾曲がない〔全長6.0×首部径1.0×火皿径1.1〕。

煙管

455～457は寛永通寶。458は永樂通寶。

寛永通寶、永樂通寶

459は石製品。砥石。4面が使用され、その1面に穴が穿たれている〔4.4×3.7〕。

砥石

II A区 I層（第69図、第71図、第72図）

460は陶器の大平鉢である。やや内湾しながら立ち上がり、口縁部を玉縁状に成形し、外反させる。貼付高台。内面に鉄絵で葦絵文様を描く。高台は施釉される。胎土は淡黄色を呈し、白い粒子が混じる。瀬戸美濃産で、17世紀中葉以降に伴う〔38.0×18.8×8.6〕。

大平鉢

461、462は播鉢である。

播鉢

461はAタイプ。底部から反り気味に立ち上がり、口縁部を玉縁に成形する。櫛目は27条が一単位。全体に鉄釉。胎土は淡黄色で白い粒子が混じる。産地年代は不明〔32×12.6×12〕。

462はAタイプ。櫛目の上でやや外反する。全体に鉄釉。産地年代は不明。

463は瓦質土器の皿。かなり厚手で、底が浅い。外面底部の器形は不明である〔内径17.5〕。

皿

464は土製品で、鉄瓶の口の鑄型。先端部に三角形の小突起がある。先端部を除き暗灰色に変色している。胎土は橙色できめが細かく、黒の粒子が混じる〔口径1.3×残長8.0〕。

土製品

465は埴塙である。溶滓の付着は薄く、ほとんど使用されなかったと思われる。不良品か〔外径は推計で3.9×残長4.0〕。

埴塙

466、467は寛永通寶で、468は文久永寶である。

寛永通寶、文久永寶

469は角釘である〔7.6〕。

釘

その他、釘4点、鉄塊2点、器形不明の鉄製品4点が出土している。

II A区 I b層（第69図、第72図）

470は陶器の碗。高台は高く、外傾する。腰部に丸みをもたせて立ち上がる。灰釉で高台施釉。胎土は淡黄色を呈す、瀬戸美濃産で、18世紀代に伴う〔底径5.3、残高5.5〕。(第69図)

碗

471は染付磁器の碗（湯呑み）。高台脇から直に立ち上がる。内面見込に五弁花紋（コンニャク判か）外面の胴部と底部に井桁文を施す。高台は施釉される。肥前系で、18世紀～19世紀に伴

う〔7.4×3.8×2.6〕。

472は播鉢で、Aタイプである。底部から反り気味にまっすぐ立ち上がる。内面下部と内面底部の外周の櫛目が摩滅する。全体に鉄釉を施す。胎土は淡黄色を呈す。産地、年代は不明〔一×15.7×10.0〕。

その他、釘1点、鉄塊1点が出土する。

II B区 I層 (第72図)

- 播鉢** 473は播鉢である。蛇の目凹型高台である。高台を外傾させ、畳付の端を面とりしている。外面に鉄釉を施す。胎土は赤味を帯びた黄土色で焼締まりがよい。産地年代は不明〔一×16.7×5.0〕。
- 土製品** 474は土製品で円盤形の一部である。片面の中央で刻線が直交している。全体に平滑に仕上げ、刻線の反対面には刷毛目の跡が残る。用途不明。胎土は鈍い赤褐色を呈し、白い粒子が混じる〔径は推計で8.6×厚さ1.6〕。

II B区 I b層 (第72図)

- 碗** 475は染付磁器の碗。厚手で、高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部で垂直になる。肥前産のくらわんか手。18世紀中葉に伴う〔9.8×一×4.0〕。
- 476は磁器質陶器の碗。高台脇からやや湾曲しながら開くように立ち上がる。畳付の端を面とりしている。灰釉で高台は無釉である。胎土は磁器質の明灰色を呈し、密である。産地年代は不明〔一×5.1×2.6〕。
- 皿** 477は染付磁器の皿。内面見込に松の木文。ハリの痕あり。肥前産で、18世紀代に伴う。
- 478は染付磁器の火入れ。口縁部を玉縁状に成形。外面は草花文か。内面は無釉である。産地年代は不明〔10.9×一×3.0〕。

II C区 I層 (第72図)

- 播鉢** 479は播鉢の底部である。やや厚手のAタイプである。胎土は黄褐色を呈す。産地年代は不明〔残高4.2〕。
- その他、器形不明の鉄製品1点。

II C区 I b層 (第71図、第72図)

- 鉢** 480は陶器の鉢。高台脇からわずかに内湾しながら立ち上がる。畳付を面とりする。鉄釉で高台を施釉する。重積みの痕を残す。胎土はやや赤味を帯び、白い粒子が混じる。産地年代は不明。
- 雁首銭** 481、482は雁首銭である。483は角釘〔残長6.8〕で、484は鉄製品の輪金具である〔6.3×5.0×1.0〕。
- その他、釘11点が出土する。

II D区 I層 遺物は検出されなかった。

II D区 I b層 (第71図、第72図、第73図)

- 大平鉢** 485は陶器の大平鉢。鉄絵で草絵文様を描く460と同種であるが、こちらは小ふりで胎土が緻密である。胎土は灰色を帯びた黄色を呈す。瀬戸美濃産で、17世紀中葉以降に伴う〔底径約16〕。

486は陶器の片口。底部から湾曲して立ち上がり、口縁部が肥厚する。畳付を丸く成形する。全
面に灰釉施釉で、高台も施釉される。胎土は淡黄色土を呈し、やや疎である。産地年代は不明
であるが、在地系の窯である可能性が大きい〔24×10.2×11.0〕。

片口

487は簪〔残長10.8〕。488、489、490は角釘である〔5.0、4.0〕。

簪

その他、銅銭1点、鉄銭1点出土しているが銭銘不明。

ⅡE区 I層 遺物は検出されなかった。

ⅡE区 I b層（第74図）

491は咸平元寶である。

咸平元寶

ⅡF区 I層 遺物は検出されなかった。

ⅡF区 I b層（第74図）

492は寛永通寶である。

寛永通寶

その他、鉄銭2点出土する。

ⅡG区 I層（第73図）

493は染付磁器の碗。高台脇から内湾しながら立ち上がる。内面見込みに手描きで五弁花文を描
く。高台にも施釉される。肥前系で、18世紀後半～19世紀に伴う〔-×4.0×1.9〕。

碗

494は陶器の鉢。高台脇から内湾しながら立ち上がる。灰釉施釉で高台は施釉されない。胎土は
くすんだ黄褐色土で、白い粒子が混じる。産地年代は不明〔-×9.3×4.5〕。

鉢

495は陶器の小鉢。胴部から口縁部にかけて真っすぐに立ち上がり、胴部に二条の沈線を施す。
釉は沈線を境に灰釉と鉄釉に塗り分けられる。瀬戸美濃で、江戸後期か（口径9.3、残高4.0）。
その他、鉄銭3点、小鉄片1点出土する。

小鉢

ⅡG区 I b層（第73図）

496は陶器の大形碗。内面に青緑灰釉を施釉する。高台はへう削りで無釉。胎土は淡黄色を呈す。
唐津系か〔-×6.1×1.8〕。

碗

497は陶器の浅鉢。高台脇から緩やかに湾曲して立ち上がる。内外面に灰釉を施す。内面底部に
鉄絵で霞み文(?)を施し、高台無釉。胎土は灰色を呈し、黒の微粒子が混じる。産地年代は
不明〔-×5.1×2.3〕。

浅鉢

498は搦鉢。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部に沈線を施す。底面に回転糸切り痕があ
る。内外面に鉄釉を施釉する。楯目は14条が1単位となる。胎土は淡黄色土で、疎。産地年代
は不明〔18.6×6.7×7.7〕。

搦鉢

その他、鉄銭3点、器形不明の鉄製品1点、小鉄片3点出土する。

ⅡH区 I層（第73図、第74図）

499は染付磁器の碗。高台脇から内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する端反り形。外面に梅
花文が施され、高台施釉される。瀬戸美濃系で、18世紀後半～19世紀に伴う〔7.7×3.4×4.0〕。

碗

- そば猪口** 500は染付磁器のそば猪口。底部から口縁部に直線的に立ち上がる。外面に山水文を施す。肥前系で、18世紀後半～19世紀前半に伴う〔7.4×5.7×5.5〕。
- 燈火具** 501は素焼き土器の燈火具。口唇部に溝を巡らし、口縁部に切り込みを入れる。煤の付着などの使用痕は見られない。外面に鉄釉を施す。胎土は赤褐色を呈す。産地年代は不明〔口径7.1、残高2.5〕。
- 502は、やや湾曲する板状の鉄製品。503は船釘〔11.5〕。504は土製品で鋳型。器形は不明である。その他、鉄銭2点、小鉄片4点が出土する。

IIH区 Ib層（第73図）

- 碗** 505は染付磁器の碗。底部が肥厚し、高台脇から湾曲しながら立ち上がる。外面に二重網目文を施す。肥前産のくらわんか手で、18世紀前半～中葉に伴う〔10.1×4.0×5.0〕。
- 皿** 506は轆轤成形による皿。回転糸切り。内、外面ともに鉄釉を施釉する。胎土はやや赤味を帯びる〔9.0×4.5×1.3〕。
- 湯呑み** 507は染付磁器の湯呑み。やや厚手で、高台脇から真っすぐに立ち上がる。外面口縁部に雷文を施す。高台は施釉される。産地不明、18世紀後半～19世紀に伴う〔7.6×4.0×6.3〕。
- 508は染付磁器の湯呑み。高台脇から内湾しながら立ち上がり、胴上半部が更に内湾する。外面に竹林と雪の輪を施す。産地不明、18世紀後半～19世紀〔7.4×－×4.1〕。
- 鉢** 509は陶器の鉢。内湾しながら立ち上がり、口縁部を玉縁状に成形している。胎土は赤味を帯びている。産地年代は不明〔19.4×－×6.5〕。
- 510は陶器の鉢。底部から真っすぐ立ち上がり、上げ底になっている。重ね積み跡あり。内外面ともに灰釉を施釉し、高台は無釉。胎土は淡黄色を呈す。産地年代は不明〔－×17×6.0〕。
- 徳利** 511は染付磁器の徳利。肩が張り出し、底部にかけてしぼまる。肩、胴部にたこ唐草文と条線文を施す。産地不明〔肩の径6.3〕。
- その他、鉄銭17点、釘3点、器形不明の小鉄片10点が出土している。

II I区 I層（第73図～第75図）

- 碗** 512は染付磁器の碗。底部が肥厚する。外面に二重網目文を施す。肥前産のくらわんか手で、18世紀前半～中葉に伴う〔－×4.5×2.3〕。
- 擂鉢** 513～516は擂鉢である。
- 513はBタイプである。無釉で口縁部を肥厚させ2条の沈線を施す。胎土は赤褐色土〔43.5×－×6.5〕。
- 514はBタイプである〔口径は推計で40.2〕。
- 515はBタイプである〔口径は推計で42.2〕。
- 516は底部からわずかに内湾しながら立ち上がる。外面底部と内面底部の外周が摩滅している。外面に鉄釉を施釉する。胎土は赤褐色で白い粒がかなり混じる。産地年代は不明〔－×16.4×6.0〕。
- 鉄製品** 517、518は鉄製品である。
- 517は輪金具で、ほぼ正円形をなす〔3.4×3.7×1.1〕。

518は鉄鉢である。わずかに内湾しながら立ち上がる〔21.7×—×6.9〕。(第75図)

その他、鉄銭1点、器形不明の鉄製品1点が出土する。

II Ⅰ区 VI a、VI b層 (第74図～第78図)

519は染付磁器の碗。底部が肥厚し、内湾しながら立ち上がる。文様不明。肥前産のくらわんか
手で、18世紀に伴う〔—×3.6×2.6〕。 碗

520は青磁染付磁器の碗。外面が青磁となる。高台脇から垂直に立ち上がる。内面見込みに五弁
花文を施し、裏銘は渦福文を施す。肥前産で、18世紀後半に伴う〔—×4.4×1.9〕。

521は染付磁器の碗。高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部で垂直となる。外面に草文と
雪文を施す。産地不明、18世紀後半～19世紀に伴う〔9.4×4.2〕。

522は染付磁器の碗。高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。外面に草花文に
類似する施文がみられる。内面見込みの文様も不明である。瀬戸美濃系の反り碗と思われ、18
世紀に伴う〔11.2×4.6×5.8〕。

523は陶器の小碗。高台脇からやや開き気味に直に立ち上がる。透明釉で、高台は無釉。胎土は
灰色を呈し、黒色の粒が混じる。産地年代は不明〔6.2×3.1×3.5〕。

524は染付陶器の皿。高台脇からやや内湾しながら立ち上がる。内面に草文を施し、見込みは蛇
の目釉ハギ取りとなる。御深井釉と思われる。瀬戸美濃産で、18世紀代か〔13.0×6.0×3.7〕。 皿

525は陶器の皿。轆轤成形後、糸切り。浅黄橙色の釉で細かい貫入あり。外面口縁部に煤が付着
する。産地年代は不明〔8.5×3.5×1.5〕。

526は染付磁器の皿。蛇ノ目凹形高台。内面見込みに松竹梅を施し、それを植物文が囲む。高台
は無釉(凹部を除く)。産地不明、18世紀末～19世紀に伴う〔底径9.1、残高1.4〕。

527は染付磁器の皿。高台脇から内湾して立ち上がり、口縁部を玉縁に成形する。内、外面に草
文を施す。高台は施釉。産地不明、18世紀～19世紀に伴う〔8.0×4.2×1.9〕。

528は染付磁器の皿。底部がやや肥厚する。蛇ノ目凹形高台。内面胴部に牡丹と草文、見込みに
波文か、外面に唐草文を施す。高台無釉(凹部を除く)。産地不明、18世紀～19世紀に伴う〔—
×7.9×2.5〕。

529は染付磁器の皿。高台脇からまっすぐに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。528と同
施文。産地不明、18世紀～19世紀に伴う〔13.9×8.4×3.3〕。

530は陶器の皿。高台から内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。轆轤成形。内面のみに
鉄釉を施釉する。外面に煤が付着している。胎土は薄い灰色を呈する。産地年代は不明〔8.2×
—×1.5〕。

531は土器の皿。轆轤成形である。漆状の被膜が外面に残る。胎土は赤褐色土を呈す〔6.8×2.9
×1.5〕。

532は染付磁器の皿。腰部の稜線を境に内反し直線的に立ち上がる。高台に施釉される。産地年
代は不明〔10.5×4.1×3.2〕。

533は染付磁器の八角皿。内面底部は2条の線で縁取りされる。内、外面ともに草文を施す。産
地不明で、18世紀～19世紀に伴う。 八角皿

534は染付磁器の猪口。高台脇から内湾しながら立ち上がり口縁部で薄くなる。外面は霞文か。 猪口

産地不明、18世紀以降に伴う〔7.1×2.5×3.0〕。

- 燈火具** 535は陶器の燈火具。口と把手は貼付けている。回転糸切りをしくじった痕跡を残す。外面に黒釉が施される。胎土はくすんだ黄褐色を呈す。産地不明、19世紀（幕末か）に伴う〔台皿の径10.2、高さ9.5〕。
- 尊式花瓶** 536は磁器の尊式花瓶。脚部に稜線が入る。灰釉が施され、底部は無釉。胎土は灰色を呈し黒い粒子が混じる。産地年代は不明〔底径5.6、残高3.0〕。
- 蓋** 537は磁器の蓋。つまみを欠損している。内外面に透明釉を施す。胎土は灰色を呈する。産地年代は不明〔底径4.5、残高1.8〕。
- 播鉢** 538～542は播鉢である。
538はやや直線的に立ち上がり、口唇部に溝を巡らす。内外面に鉄釉を施す。楯目は14条が1単位。胎土は淡黄色を呈し、石英と黒の粒子が混じる。産地年代は不明〔31.4×－×11.0〕。
539はBタイプで器厚が薄く、小ぶりである。外面に鉄釉が施される。胎土は赤褐色を呈し、白い粒が混じる。産地年代は不明〔口径は推計で36.0〕。
540はBタイプで口縁部に片口がついている。短い刻線を楯目の上に施す。胎土は赤褐色土を呈する。産地年代は不明〔41×17.8×15〕。
541はBタイプで小ぶりである。胎土は赤褐色土を呈し、白い粒が混じる〔口径は推計で37.8〕。
- 火鉢** 542は瓦質土器の火鉢。薄手で、口縁部で垂直に立ち上がる。外面口縁部に雷文を施す。外面に褐色釉、内面に暗緑色の釉を施釉する。胎土は暗灰色を呈す。産地年代は不明〔10.0×－×3.0〕。
- 土製品** 543～551は土製品である。
- 鑄型** 543は鑄型か。薄い正円の型〔径3.7×厚さ1.5〕。円の部分が灰色に焼けている。胎土は目の細かい明褐色土〔6.3×4.8×1.4〕。
544は両端が平で胴部がしぼまる。一方の端が灰色に焼けている。用途不明。胎土は目の細かい明褐色土〔径4.0×高さ4.5〕。
545は鑄型。鉄瓶の口型。型の内面が灰色に焼けている。胎土は目の細かい赤褐色土〔口径1.7×残長4.4〕。
546は鑄型か。半円柱状の型〔径1.5〕。胎土はにぶい橙〔4.4×2.4×残長4.0〕。
547は内傾、内湾する方形土製品。この種の土製品は、大小の違いがあるが、多数出土している。用途は不明。胎土は目の細かい明褐色土を呈する〔4.6×2.9×残長11.0〕。
548は547と同形であるが小型。胎土も同質〔4.2×2.9×残長9.5〕。
- 羽口** 549は羽口。厚手、小口径タイプである〔内径は、推計で3.0×残長8.3〕。
550は羽口。薄手、大口径タイプである〔内径は推計で7.7×全長9.5〕。
- 埴塼** 551は埴塼。溶滓は外部底面に薄く付着しているだけで、内面には見られない〔残長2.5〕。
- 銅製品** 552～554は銅製品である。
- 永樂通寶** 552は永樂通寶である。
- 銅製品** 553は銅製品。髪結い道具か。片端をナイフ状に成形し、もう一方は先端を尖らす〔全長12.8〕。
554は銅製品。片端をナイフ状に成形し、もう一方には耳掻き状のヘラが付く〔全長10〕。
- 鉄製品** 555～569は鉄製品である。
555は輪金具〔5.8×4.4×1.3〕。

556は鎌〔刃渡り約13.0〕。
 557は二つの窪みをもつ板状の鉄製品〔5.2×2.0〕。
 558は突起を有する板状の鉄製品。鍋の底か〔突起の長さ2.5〕。
 559はU字状に曲げられた金具〔全長8.0×幅1.8〕。
 560は鑿くわに似た形状であるが、先端が更に内側に曲がる〔6.0×4.2×1.1〕。
 561は火格子〔8.0×9.5×1.0〕。
 562は湾曲し四つの窪みをもつ〔9.3×1.8×0.3〕。
 563は鑿くわ〔6.7×3.5×0.5〕。
 564は木質が付着する板状の鉄製品〔6.5×3.5〕。
 565～566は角釘〔6.5、6.8、5.5〕。
 567は片側が湾曲する板状の鉄片〔9.4×4.6×0.5〕。
 568、569は角釘〔一、12.0〕。
 その他、鉄銭28点、角釘75点、器形不明の鉄製品55点が出土している。

II J区 I層（第76図～第79図）

570～574は碗である。

碗

570は染付磁器。厚手で、腰部から直線的に立ち上がる。外面に草花文を描く。肥前系で、18世紀後半に伴う〔7.5×3.0×4.7〕。

571は染付磁器。570とほぼ同形。外面に竹林文、内面見込みに五弁花文を描く。高台は施釉される。肥前系で、18世紀後半～19世紀前半に伴う〔8.8×3.7×4.8〕。

572は染付磁器。口縁部でまっすぐに立ち上がる。外面は窓絵に樹林を描き、内面は口縁部に四方禪文を巡らす。焼継痕あり。肥前系で、18世紀後半に伴う〔9.7×－×3.6〕。

573は染付磁器。高台脇から真っすぐに立ち上がる。外面に草花文、内面見込みに渦福文を描く。焼継痕あり。産地は不明で、18世紀後半に伴う〔9.1×6.1×6.6〕。

574は染付磁器。高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部ではほぼ垂直となる。やや厚手で小ぶり。外面は花文である。釉は肌色がかっている。産地不明で、18世紀～19世紀に伴う〔7.1×－×3.9〕。

575は陶器の皿。高台が割合に高く、畳付を丸く調整する。内面見込みは蛇ノ目釉ハギ。胎土は淡黄色を呈す。産地年代は不明〔－×6.2×2.2〕。

皿

576は陶器の鉢。厚手、腰部に稜線あり、そこから直に立ち上がる。内、外面に鉄釉が施釉され、高台は無釉。胎土は淡黄色を呈し、白や黒の粒が混じる。産地年代は不明〔－×9.6×3.8〕。

鉢

577は陶器の鉢。内湾しながら立ち上がり口縁部を玉縁状に成形する。なまこ釉。在地の窯と思われる。年代不明〔20.6×－×7.9〕。

578は擂鉢。底部から真っすぐに立ち上がる。内面腰部、内面底部の外周が摩滅する。外面に鉄釉が施釉される。胎土は淡黄色を呈し、白い粒が混じる。産地年代は不明〔－×13.8×6.5〕。

擂鉢

579は擂鉢でBタイプである。口縁部に口がついている。胎土は赤褐色土を呈し、白い粒が混じる。産地年代は不明〔口径は推計で40.6〕。(第82図)

580～586は土製品である。

- 羽口** 580は羽口。口縁部を横撫で調整する〔内径約6.5×全長9.0〕。(第78図)
581は羽口。端末部。厚手。内面端末部を横撫で調整する〔残長6.1〕。
- 埴埴** 582は埴埴。全体に溶滓が付着している。胎土は褐灰色で白い極小の粒が混じる〔口径6.0×全長5.8〕。
583は埴埴。小口径で長い。溶滓は口縁部からたれて底部に厚くかかる。胎土は、582と同じである〔口径4.8、全長8.5〕。
584は埴埴。口縁部。外面胴部に溶滓が付着しているが、内面にはみられない。胎土は582と同じである〔残高5.2〕。
- 土製品** 585は鋳型乾燥用三足状支脚（サル）。外面全体が灰色に変色している。胎土肌橙色で白い粒が混じる〔残長9.5〕。
586は585と同形のもので、脚部である。胎土も同じである〔残長9.5〕。
587は寛永通寶。
- 鉄製品** 588は鉄製品。S字状に曲がる鉄片〔6.5×5.0〕。
589は角釘〔11.0〕。
590は鉄製品。つまみ状の突起〔0.8×0.7〕がついている〔4.0×3.8〕。
591は鉄製品の輪金具。ほぼ正円形をなす〔径9.0〕。
その他、鉄銭18点。器形不明の鉄製品10点、角釘2点、小鉄塊2点が出土する。

II J区 VI a、VI b層（第80図～第86図）

- 碗** 592～606は碗である。
- 瀬戸美濃** 592は陶器。高台脇から直線的に立ち上がり、口縁部でやや内湾する。外面に鉄絵で松葉文を描く。瀬戸美濃産で、所謂柳茶碗である。19世紀前半に伴う〔12.3×4.7×5.2〕。
- 肥前** 593は染付磁器。やや厚手、内湾しながら立ち上がる。外面に梅花文を描く。高台内に文様あり。肥前産で、所謂くらわんか手である。18世紀前半～中葉に伴う〔9.5×4.4×4.8〕。
594は染付磁器。高台脇からやや直線的に立ち上がる。外面に花文を描く。肥前産で、くらわんか手である。18世紀代に伴う〔10.0×4.1×4.6〕。
595は染付磁器。やや直線的に立ち上がる。文様不明。肥前産で、くらわんか手である。18世紀代に伴う〔10.4×－×4.0〕。
596は染付磁器。外面に草花文を描く。産地年代は不明、18世紀代に伴う。
597は染付磁器。高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部で内反する。文様不明。肥前系で、18世紀後半～19世紀に伴う〔8.5×4.3×5.0〕。
598は染付磁器の碗（湯呑み）。真っすぐに立ち上がる。外面に山水文を描く。肥前系で、18世紀末～19世紀に伴う〔6.0×－×4.7〕。
599は染付磁器の碗（湯呑み）。内湾しながら立ち上がり、口縁部で垂直になる。内面は口縁部に四方禪文を描く。外面草花文と思われる。肥前系で、18世紀後半～19世紀に伴う〔8.0×－×3.5〕。
600は染付磁器。高台脇から直線的に立ち上がる。外面に梅花文を描く。肥前系で、18世紀後半～19世紀に伴う〔11.8×－×5.8〕。

601は染付磁器。高台脇から内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。外面に山水文を描き、内面見込みは雲文と思われる。高台銘は渦福文である。高台は施釉される。瀬戸美濃系で、18世紀末～19世紀に伴う〔9.5×4.3×5.4〕。

602は碗。染付磁器。601と同型で、口縁部で外反する反り碗。外面は一重網目文に銀杏、内面見込みには蓮文を描く。高台銘は渦福文である。瀬戸美濃系で、19世紀以降に伴う〔9.9×4.4×5.1〕。

603は染付磁器。やや厚手で、高台脇から垂直に立ち上がる。外面は草花文に「発」と「早」の文字を描く。焼継ぎ痕あり。産地は不明で、19世紀代に伴う〔7.3×－×6.0〕。

604は磁器質陶器。高台脇から真っすぐに立ち上がる。外面は菊文である。釉のなかに細かい気泡状の粒が見えており、太白茶碗と思われる。瀬戸美濃産で、19世紀前半に伴う〔8.8×－×4.1〕。

605は染付磁器。高台脇から緩く内湾しながら立ち上がる。内面は見込みに手描きで五弁花文を描く。高台施釉。産地は不明で、18世紀後半～19世紀に伴う〔高台径4.0×残高2.0〕。

606は陶器の小碗（ぐい呑み）。高台脇から内湾しながら立ち上がる。釉は肌色がかかった灰色で細かな貫入あり。高台は無釉で、胎土は淡黄色を呈す。在地の窯と思われる。年代不明〔6.0×3.0×3.2〕。

607～619は皿である。

607は染付陶器。高台脇からやや直線的に立ち上がる。内面に草文を描き、蛇ノ目釉ハギが施される。釉は黄瀬戸調で、御深井釉と思われる。高台は施釉される。胎土は淡黄色を呈す。瀬戸美濃産で、18世紀代に伴うものと思われる〔13.2×7.4×3.6〕。

608は染付陶器。606と類似するが、小ぶり、内湾しながら立ち上がる。内、外面に草文を描く。釉、胎土も606と同じである。瀬戸美濃系で、18世紀代に伴うものと思われる〔11.5×－×2.8〕。

609は染付陶器。607と類似する。やや厚手、高台脇で内湾し、口縁部まで直に立ち上がる。釉は緑がかかった発色である。瀬戸美濃産で、18世紀代に伴うものと思われる〔14.0×6.2×3.9〕。

610は染付陶器。607と類似する。器形は609とほぼ同型。内面蛇ノ目釉ハギで、胴部に草文を描き、見込みは五弁花文の一種と思われる。瀬戸美濃産で、18世紀代に伴うものと思われる〔13.6×6.4×3.8〕。

611は染付陶器。609とほぼ同形、同施文である。瀬戸美濃系で、18世紀代に伴う〔12.7×6.8×4.4〕。(第81図)

612は染付磁器の口縁部である。口縁部内面に黒色、藍色、灰色の釉を層状に施釉する。肥前産で、18世紀代に伴う〔12.8×－×2.1〕。

613は染付磁器の口縁部である。内面胴部は雪輪文と思われる。肥前産で、18世紀代に伴う〔14.0×－×2.7〕。

614は染付磁器。内面は草木文のボカシで、外面には鉄錆で源氏香文と円のボカシを施す。肥前産と思われる。18世紀～19世紀に伴う〔14.5×－×3.0〕。

615は染付磁器。609と同形、同施文であるが、やや薄手である。蛇ノ目凹形高台である。肥前系で、18世紀末～19世紀に伴う〔14.0×8.9×3.3〕。

皿 瀬戸美濃

616は染付磁器と思われる。底面が肥厚し、高台脇から内湾しながら立ち上がる。蛇ノ目凹形高台である。内面は波文の一種と思われる。肥前系で、18世紀末～19世紀に伴う〔13.6×7.6×3.3〕。

617は陶器。轆轤成形で、無釉である。胎土、灰色で黒い粒が混じる。産地年代は不明〔残高1.3〕。

618は陶器。617と類似する。轆轤成形である。外面は無釉で煤が付着している。胎土は明灰色を呈す。産地年代は不明〔-×7.5×1.4〕。

619は手づくね土器（かわらけ）。外面底部に紡錘形のごく浅い押圧痕あり。胎土は赤褐色を呈す〔5.6×2.5×1.1〕。

鉢 620は陶器の鉢。高台から内湾しながら立ち上がり、口縁部で内反する。底部をへうで抉り高台を成形する。透明釉が厚くかかる。重積みの痕が残る。胎土は淡黄色を呈し疎である。産地年代は不明〔24.0×12.2×5.6〕。

そば猪口 621は染付磁器のそば猪口。高台から真っすぐ立ち上がる。外面は山水文で、口錆あり。肥前系で、18世紀以降に伴う〔7.8×5.6×5.4〕。

622は染付磁器のそば猪口。高台からまっすぐに立ち上がる。外面は草花文である。産地は不明で、18世紀後半～19世紀に伴う〔8.0×5.1×5.9〕。

段重 623は染付磁器の段重。腰部に段を有し、口縁部に垂直に立ち上がる。外面は飛雲文と思われる。産地は不明、18世紀末～19世紀に伴う〔体部径13.9×高台径8.1×残高2.8〕。

624は染付磁器の段重。腰部に段を有し、口縁部に垂直に立ち上がる。外面は鶯に桜花文を描く。産地は不明、19世紀以降に伴う〔口径14.4×残高4.2〕。

徳利 625は染付磁器の徳利。高台脇から内湾気味に立ち上がる。外面は草花文である。肥前系で、18世紀末～19世紀に伴う〔胴部径6.0×底部径×残高4.5〕。

626は陶器の徳利。口縁部を肥厚させ玉縁状に成形。鉄釉を施釉する。胎土は暗灰色を呈す。産地年代は不明〔口径3.5×残高4.5〕。

627は陶器の徳利。頸部。黒色釉を厚く施釉する。胎土は明灰色を呈す。産地年代は不明〔頸部径2.2×残高3.7〕。

花生、青磁 628は青磁の花生。口縁部に稜線が入る。胎土は灰色を呈す。肥前産で、18世紀代に伴う〔口縁部径8.5×残高2.2〕。

仏飯器 629は磁器の仏飯器。坏底部から内湾しながら立ち上がり口縁部で垂直になる。脚部に稜線が入り、高台は削り出しである。白の不透明釉を脚部の稜線まで施釉する。高台は無釉。産地不明、18世紀～19世紀に伴う〔坏径5.9×脚部径3.6×高さ6.3〕。

630は磁器の仏飯器。629と同区、同層から出土し、器形、施釉の仕方も同じであり、セットで使用されたと思われる〔脚部径3.6×残高4.2〕。

631は陶器の蓋。外面につまみを貼付ける。外面に楕円の押圧文。つまみ上面に鉄釉が施され、他は透明釉である。胎土は淡黄色を呈し黒い粒子が多量に混じる。産地年代は不明〔7.0×2.1〕。

紅皿 632は磁器の紅皿。型押し成形で、内面に白の不透明釉を施す〔4.6×1.4×1.3〕。

633は磁器の紅皿。型押し成形で、内面に白の不透明釉を施す〔4.5×1.2×1.2〕。

燈火具 634は土製品の燈火具。灯明台の脚部。轆轤成形で、底部をへうで抉る。無釉である。胎土はや

や赤味を帯びている〔底径6.6×残高3.6〕。

635は陶器の甕。胴部から口縁部にかけて括れさせ、口縁部を肥厚させる。外面には鉄釉の上に

甕

灰釉をかける。胎土は赤褐色で白い粒が混じる。産地年代は不明〔口径14.9×残高6.2〕。

636は陶器の甕。胴部に2条の沈線を施し、口縁部を肥厚させる。内、外面に鉄釉を施す。

播鉢

胎土は淡黄色で白い粒が多量に混じる。産地年代は不明〔口径16.6×残高9.0〕。

637は薄手で口縁部を肥厚させないAタイプ。胴部の括れなし。鉄釉を施す。胎土は鈍い黄色を呈す。

638はAタイプ。胴部に括れ。鉄釉を施す。胎土は淡黄色を呈す〔口径は推計で32.0〕。

639は高台からわずかに内湾しながら立ち上がる。櫛目がやや粗い。内面底部の外周の櫛目が摩滅している。外面には鉄釉を施す。胎土は赤褐色土を呈す。産地年代は不明〔 ϕ ×16.0×3.7〕。

640は無釉で、口縁部を肥厚させるBタイプ。胎土は赤褐色土を呈す。産地年代は不明〔口径は推計で38.0〕。

641はBタイプ。内面底部に櫛目がなく、摩滅したものと思われる。胴部の櫛目の上に短い刻線を斜めに施す。胎土は赤褐色を呈す〔41.5×18.0×15.1〕。

642はBタイプで、やや小ぶりである。胎土は赤褐色を呈す〔口径は推計で35.0〕。

土製品

643～666は土製品である。

羽口

643は先端部。厚手で、小口径のタイプである〔残長9.0〕。

644は薄手で、大口径のタイプである。末端内面を横撫で調整している〔内径約6.5×全長9.0〕。

645は厚手で、小口径のタイプである。末端部を欠く〔内径4.1×残長6.0〕。

646は先端部。薄手で、大口径のタイプである。胎土は内面が余り焼けていない〔残長6.0〕。

647は先端部。割れ面の一方が平滑調整されている〔残長8.0〕。

648は末端部。薄手で、大口径タイプである。末端部内面は1cmほどの幅で横撫で調整されている〔残長3.0〕。

649は末端に近い部分。薄手で、大口径タイプである。片方の割れ面（→印の部分）が平滑に調整されている〔残長4.5〕。

650は先端部。薄手で、大口径タイプである。片方の割れ面が平滑調整されている〔残長5.0〕。

651は末端部。薄手で、大口径タイプと思われる。2つの割面的一方（→印の部分）が平滑に調整されている〔残長6.8〕。

652～654は埴塙である。

埴塙

652は一番大型の埴塙。溶滓は、外面半分に厚く付着し、内面にはみられない。胎土は褐灰色で白い粒がかなり混じる〔外径8.3×全長10.6〕。

653は溶滓が全面に付着している。外面底部に厚く、内面では薄い、内面底部に塊りが残る。胎土は褐灰色を呈す〔外径5.2×全長6.0〕。

654は底部。溶滓の付着は外面に厚く、内面では薄い。胎土は褐灰色を呈す〔残長5.5〕。

655は鋳型。先細りの半円の型。内面が灰色に変色している。胎土は目の細かい赤褐色を呈す〔幅3.1×残長3.8〕。

- 鑄型** 656は鑄型。鉄瓶の口と思われる。背面に三角錐状の突起がつき、3条の刻線が引かれている。型の内面は暗灰色に変色している。胎土は赤褐色で白い粒が混じる〔残高10.4×幅4.0〕。
- 撞座** 657は撞座の鑄型。型面は灰色に変色している。胎土は目の細かい赤褐色土である〔版面径9.3×厚さ2.8〕。
- 658は鑄型。沈線による2つの円の面と刻線の面からなる。器形は不明。胎土は目の細かい赤褐色土で白い粒が混じる〔5.4×6.1×5.5〕。
- 土製品** 659は薄い板状の鑄型か。方形の縁取りや円柱状の突起が付いている。型起こし。突起面は暗灰色に変色している。胎土は赤褐色を呈し白い粒が混じる〔4.0×3.8×1.0〕。
- 660は659と形状、胎土が類似する〔5.5×5.9×1.0〕。
- 661は鑄型。656と類似する。やはり型内部が暗灰色に変色している。胎土は橙を呈し、白い粒が混じる〔残長11.0〕。
- 662は鑄型。内湾し、内面に交差する刻線が入る。胎土は目の細かい赤褐色土である〔8.0×8.2×4.2〕。
- 663は鑄型乾燥台（サル）。表土層出土のものと同種類で、脚の付け根の部分である〔6.5×7.0×4.0〕。
- 664は楕円状の円盤の中央に穿孔したもの。片面に刻線が縦横に入り、もう片面は平滑に仕上げであり、一部黒く変色している。胎土は橙を呈し、白い粒が混じる〔17.1×14.2×2.8〕。
- 665は内湾する厚い板状の土製品。外面に2条の縄目痕が残る。棒として使用されたものか。胎土は赤褐色土である〔17.8×18.0×4.0〕。
- 666は鉢状の土製品で、底面に脚がついている。仕上げは、外面は平滑で、内面は粗い。胎土は赤褐色土である〔-×15.3×7.5〕。
- 石製品** 667は石製品。鑄型。印判と思われるが判読できず〔版面2.4×2.4〕。
- 寛永通寶** 668～671は寛永通寶である。
- 鉄製品** 671～688は鉄製品である。
- 672は壺。胴部に稜線が入る〔7.5×-×5.0〕。
- 673は碗。上げ底で底部からまっすぐに立ち上がる〔13.7×8.5×5.5〕。
- 674は碗。底部から内湾しながらたちあがり、口縁部でわずかに外反する。口縁部に丸い突起がつき、外面に細い隆線文を施す〔11.2×-×5.9〕。
- 675は蓋。ツマミが中心からずれている〔6.6×2.2〕。
- 676は楕円状の輪金具〔3.2×2.5×0.7〕。
- 677は角釘〔4.5〕。
- 678は鍵〔4.5〕。
- 679は板状の鉄製品〔7.1×1.5×0.2〕。
- 680は錠〔12.3×3.2〕。
- 681は角釘〔4.8〕。
- 682はU字状の金具である〔5.3×4.0×0.9〕。
- 683は角釘〔5.4〕。
- 684は棒状鉄製品〔径0.7、15.8〕。

685は角釘〔8.9〕。

686は角釘〔9.5〕。

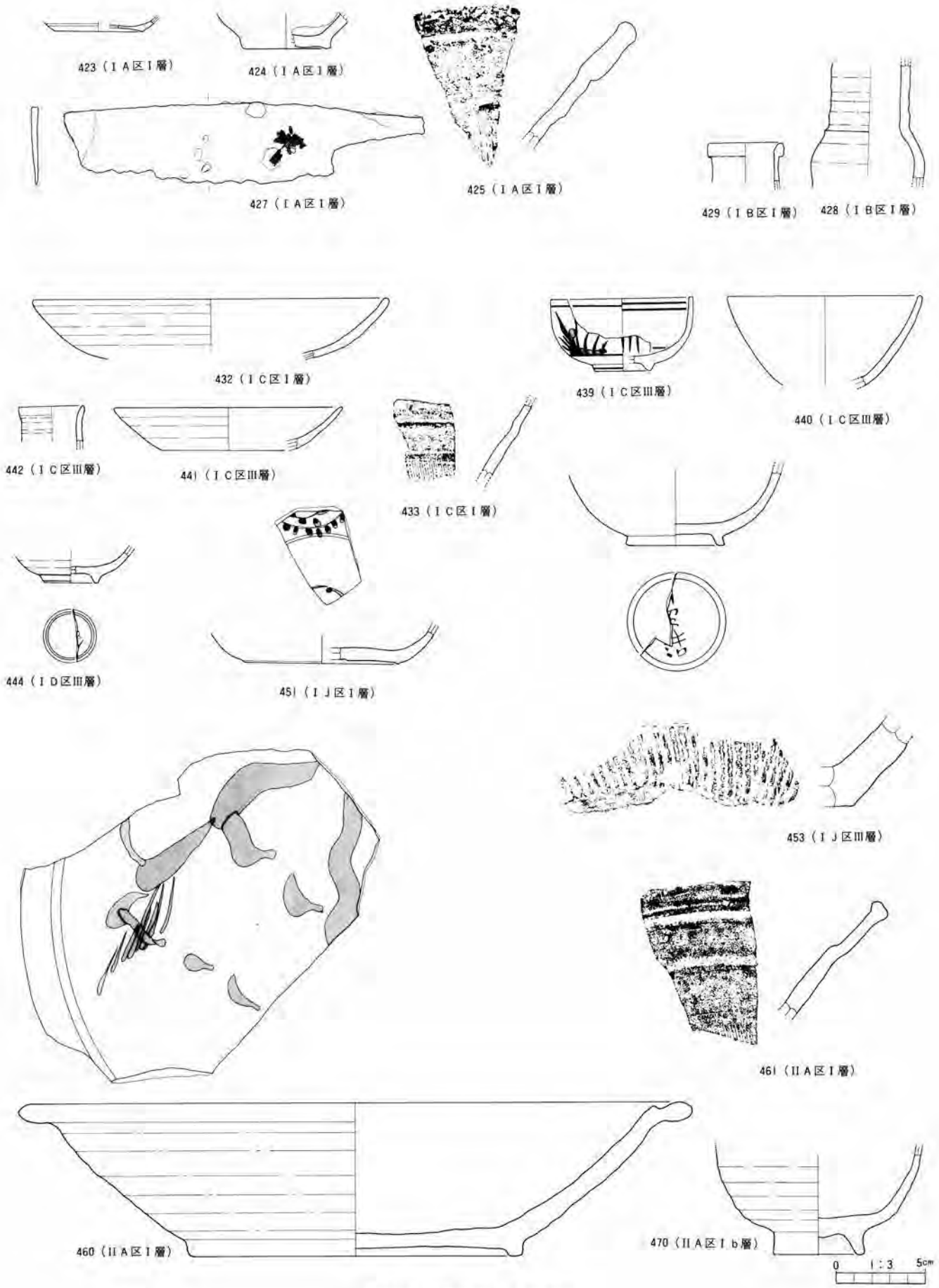
687は鉤状に曲げた棒状鉄製品である〔径0.5、5.3〕。

688は角釘〔6.2〕。

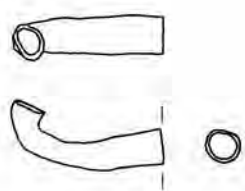
689は角釘で木質が付着する〔5.0〕。

690は鉄滓。外面が湾曲し、径1.5~2.0の3つの穴跡が残る。内面は流動状の塊である。穴は湯口の跡と推測され、溶解炉の底で固化したものと思われる。鉄滓

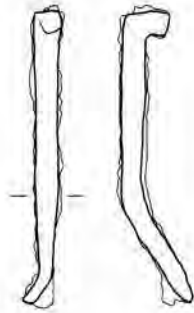
その他、鉄銭35点、角釘39点、器形不明鉄製品が44点出土している。



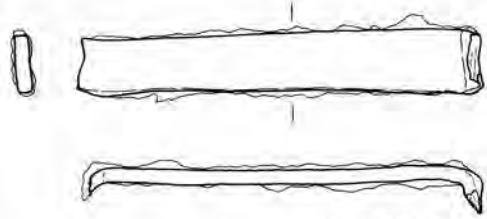
第69図 遺構外出土遺物(I)



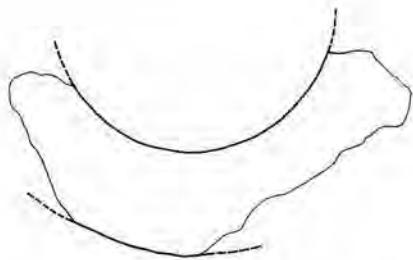
426 (I A区I層)



430 (I B区I層)



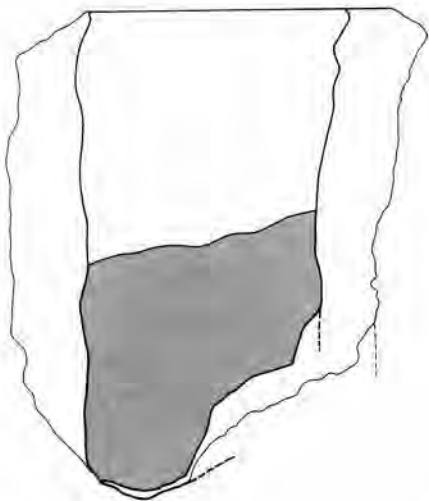
431 (I B区I層)



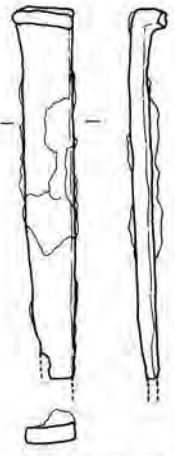
435 (I C区I層)



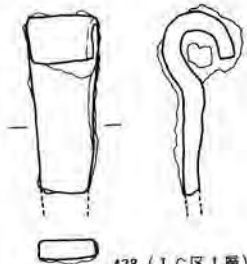
436 (I C区I層)



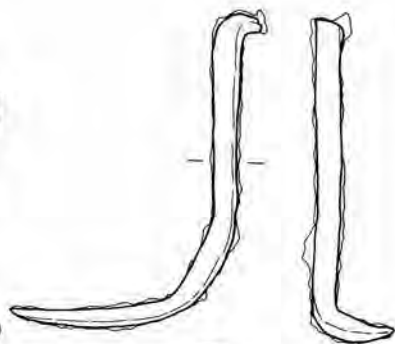
434 (I C区I層)



437 (I C区I層)



438 (I C区I層)



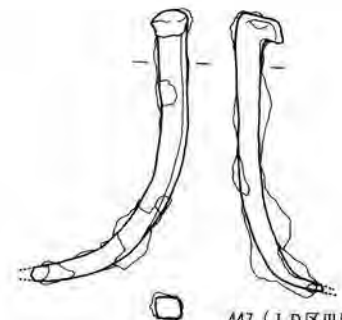
443 (I C区III層)



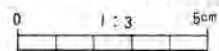
445 (I D区III層)



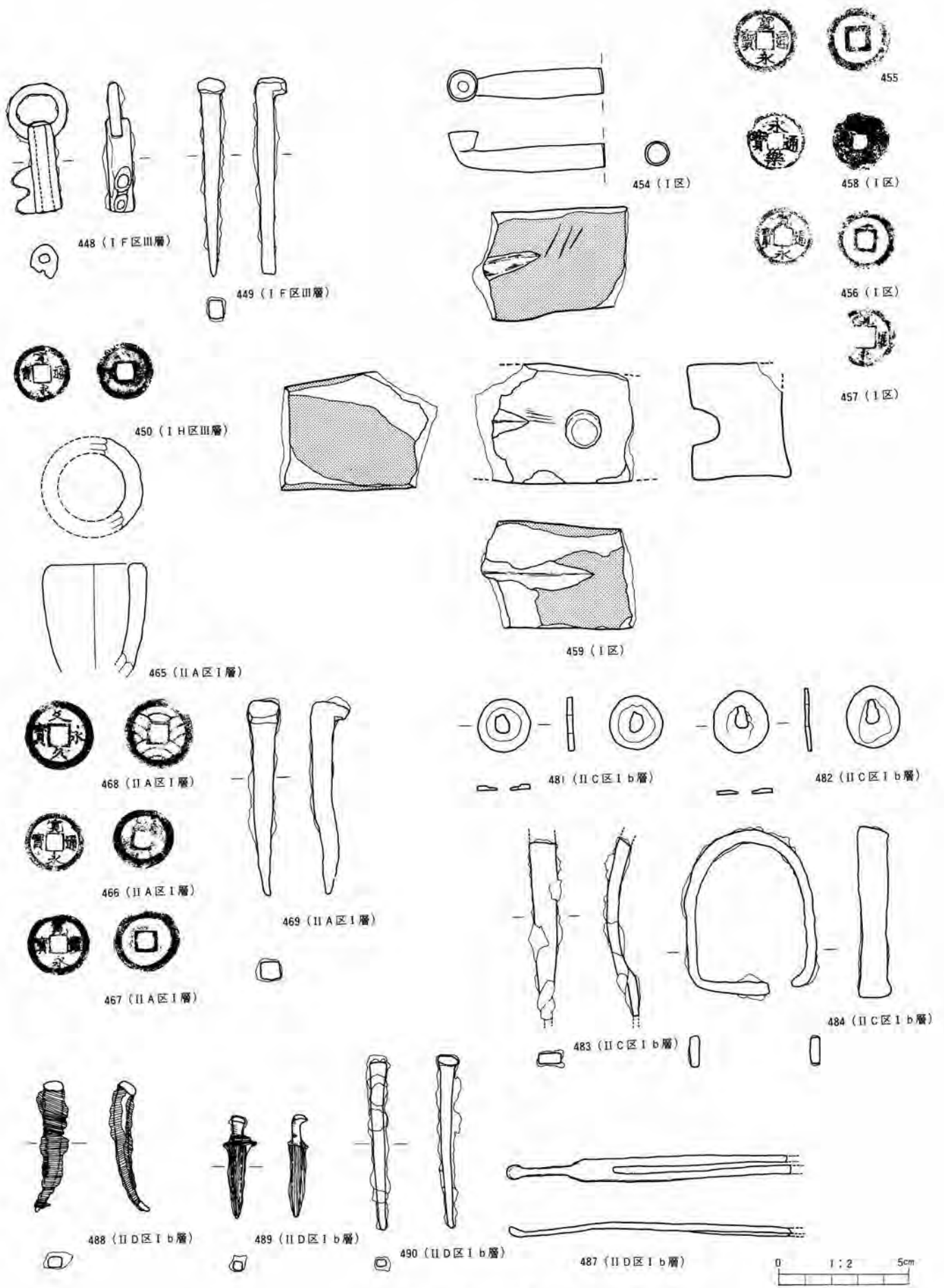
446 (I D区III層)



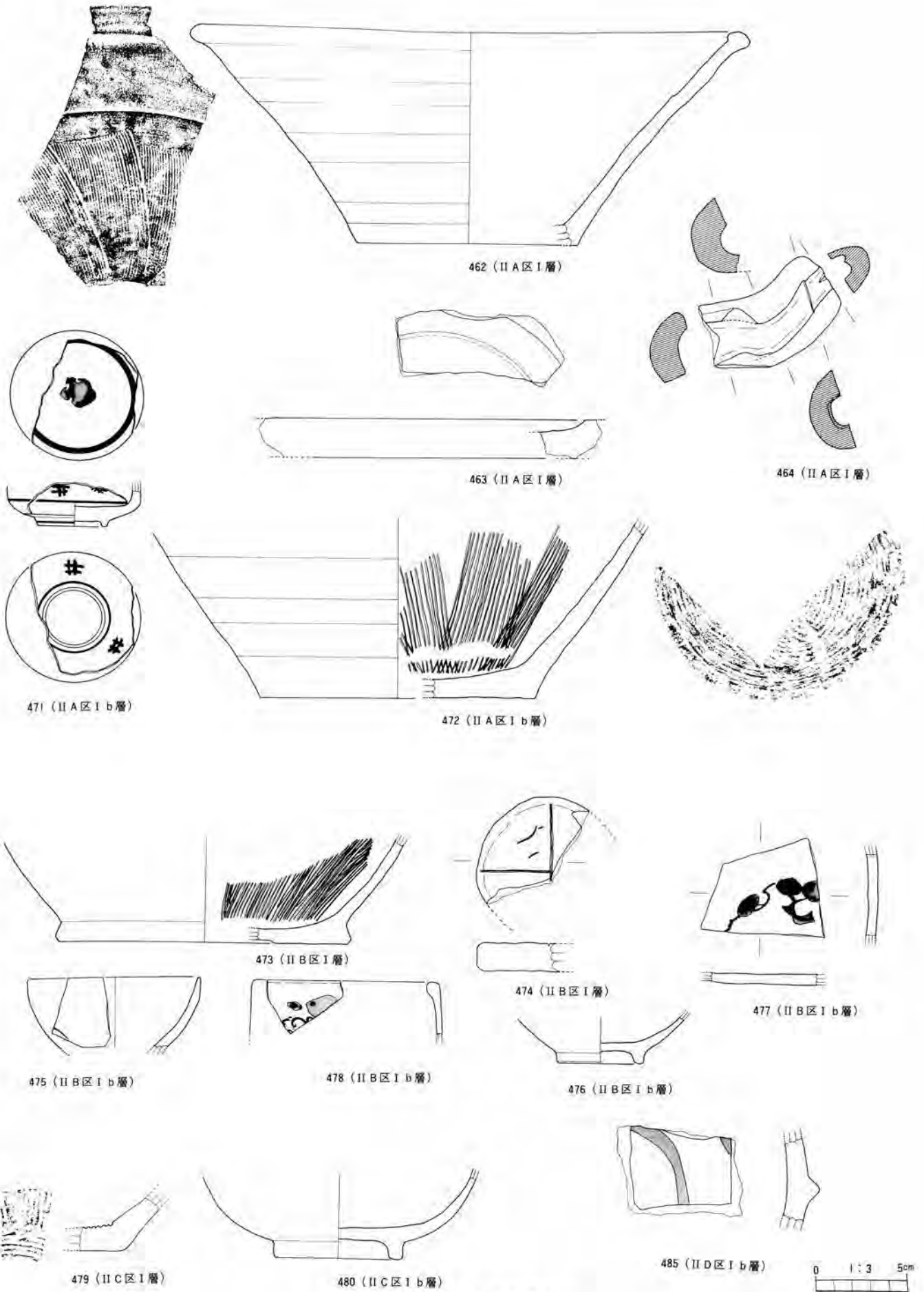
447 (I D区III層)



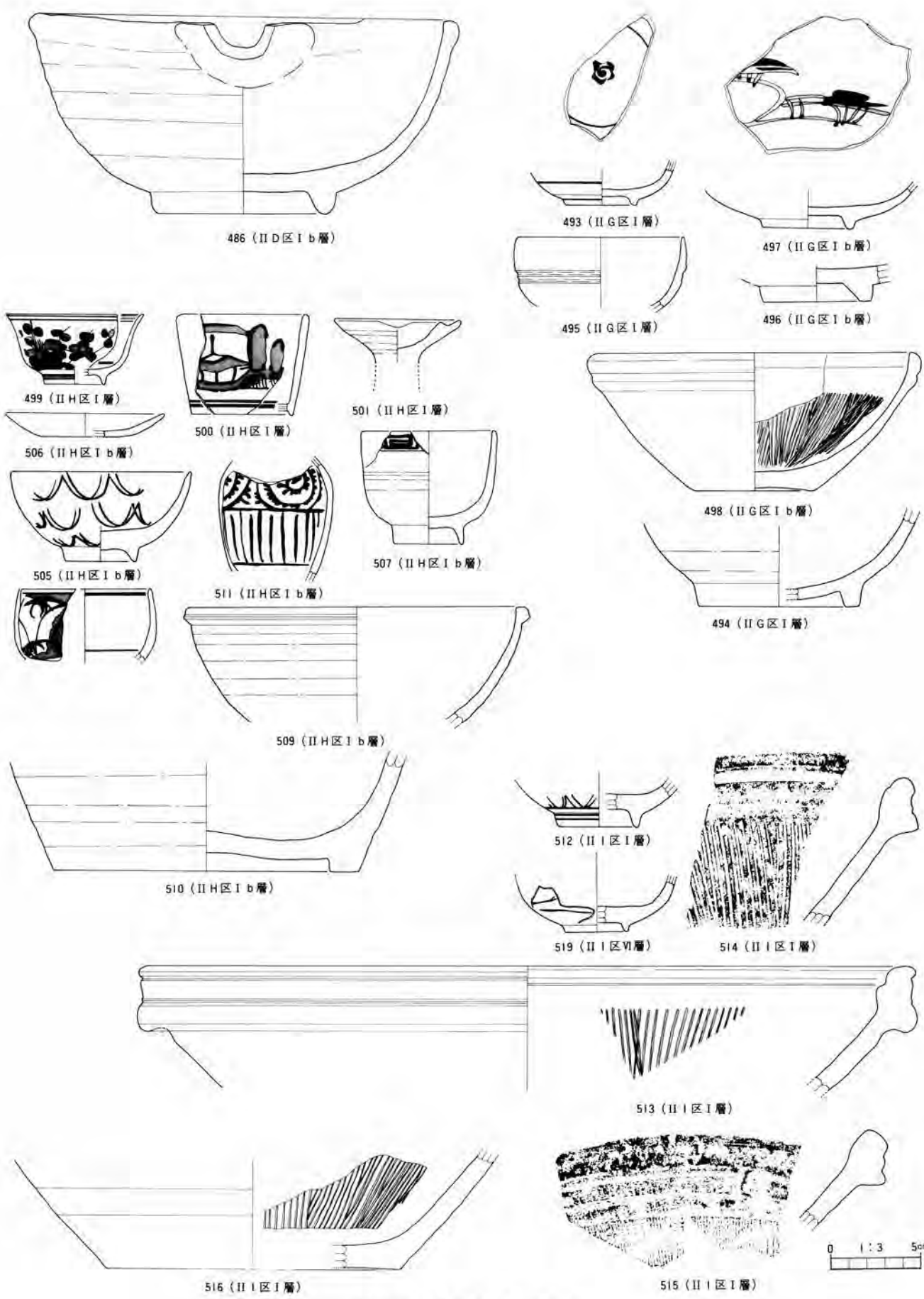
第70図 遺構外出土遺物(2)



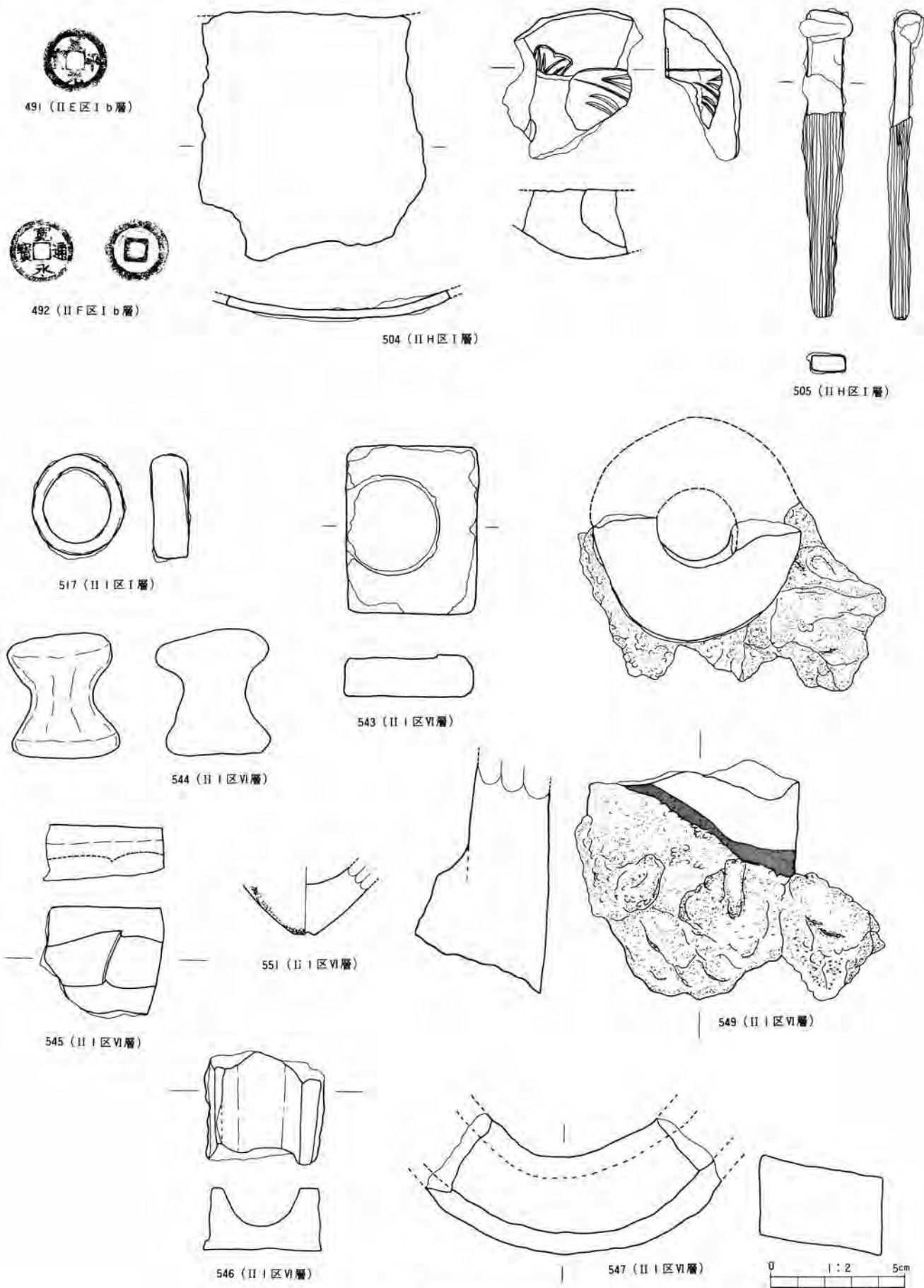
第71图 遺構外出土遺物(3)



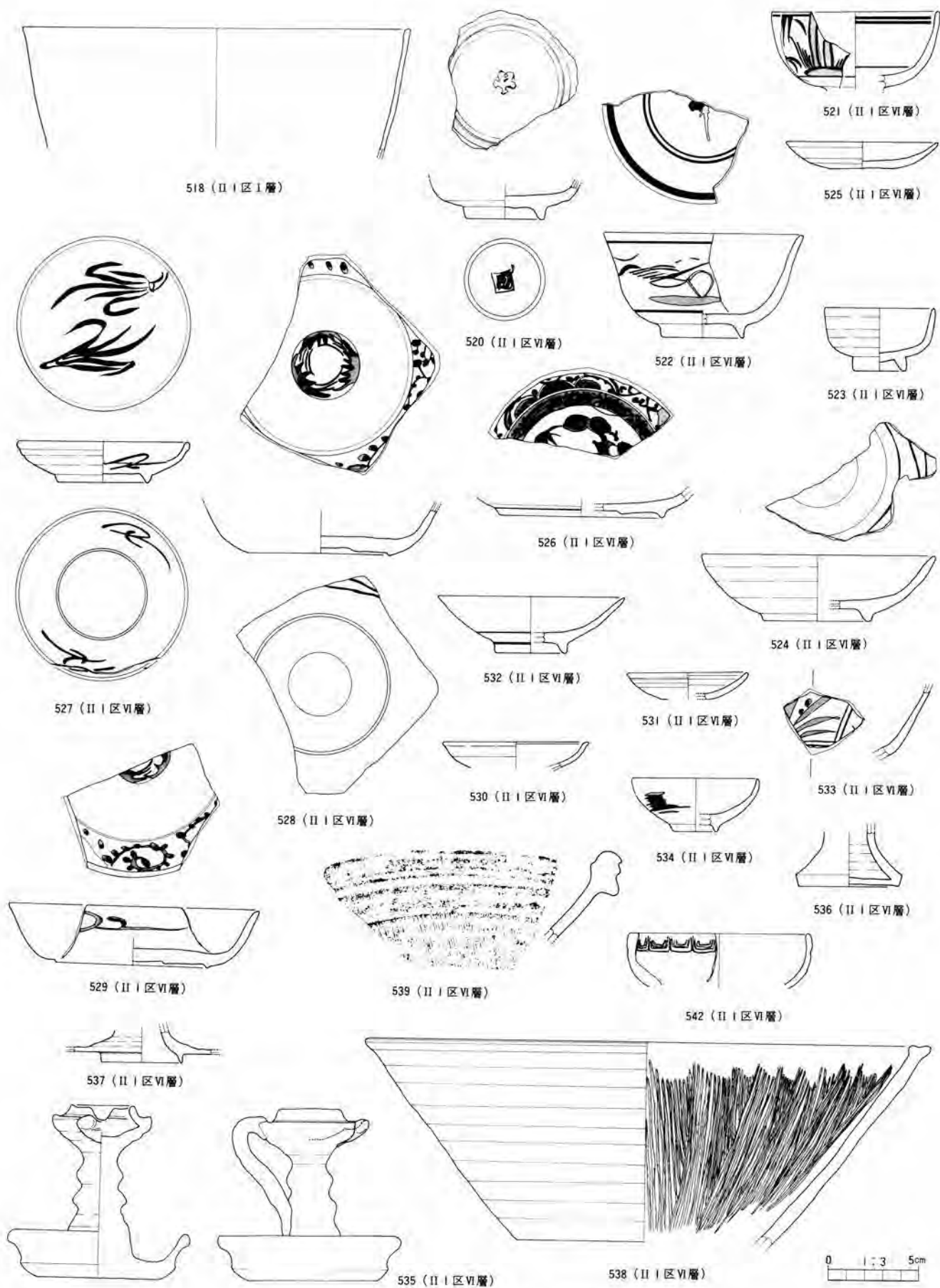
第72図 遺構外出土遺物(4)



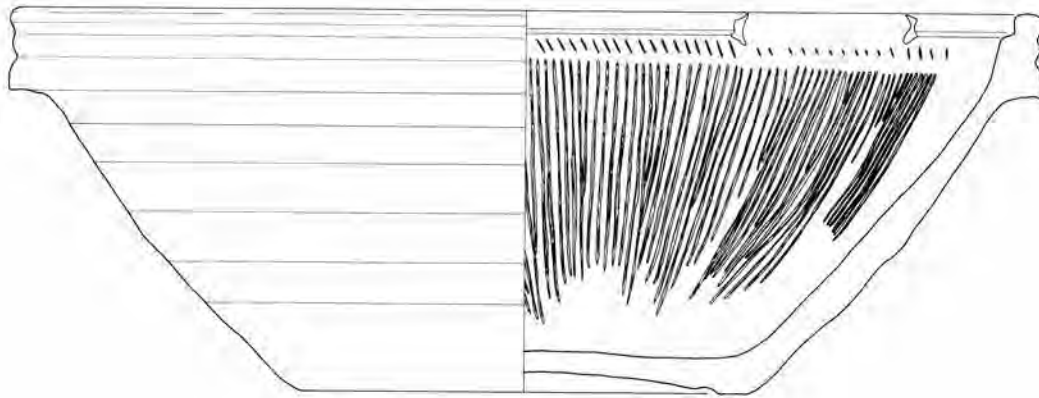
第73図 遺構外出土遺物(5)



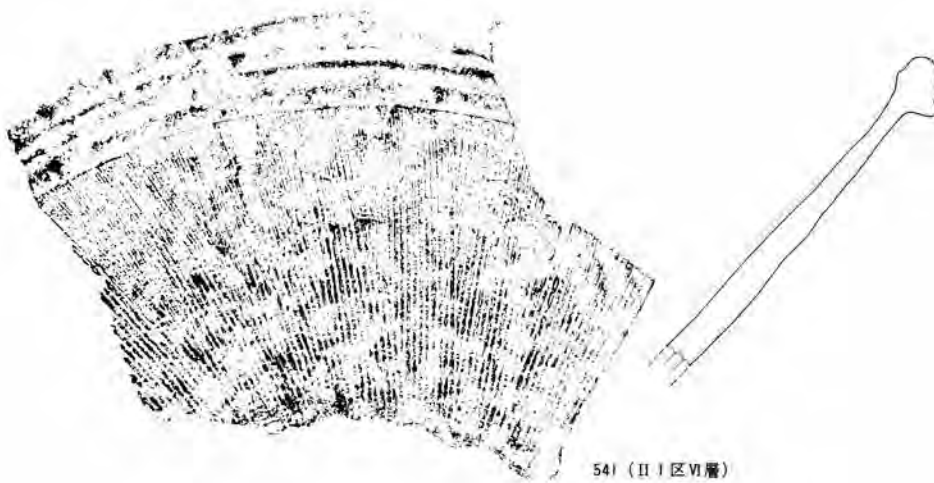
第74图 遺構外出土遺物(6)



第75図 遺構外出土遺物(7)



540 (II I 区VI層)



541 (II I 区VI層)



570 (II J 区I層)



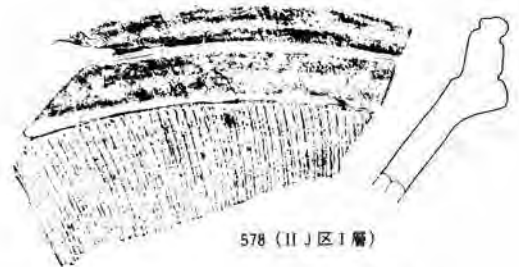
577 (II J 区I層)



571 (II J 区I層)



573 (II J 区I層)



578 (II J 区I層)



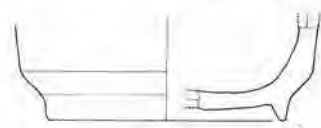
572 (II J 区I層)



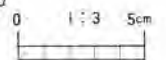
575 (II J 区I層)



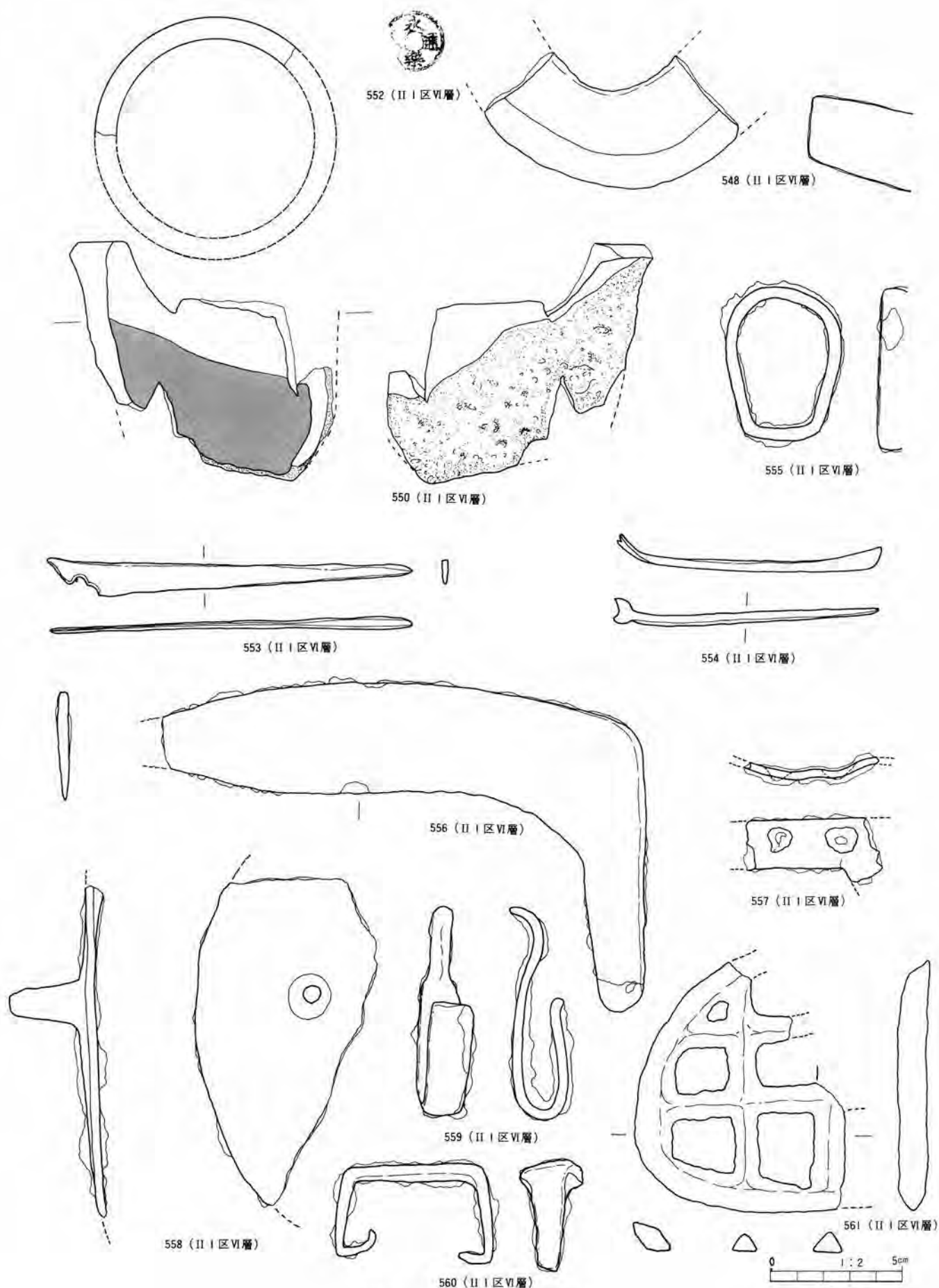
574 (II J 区I層)



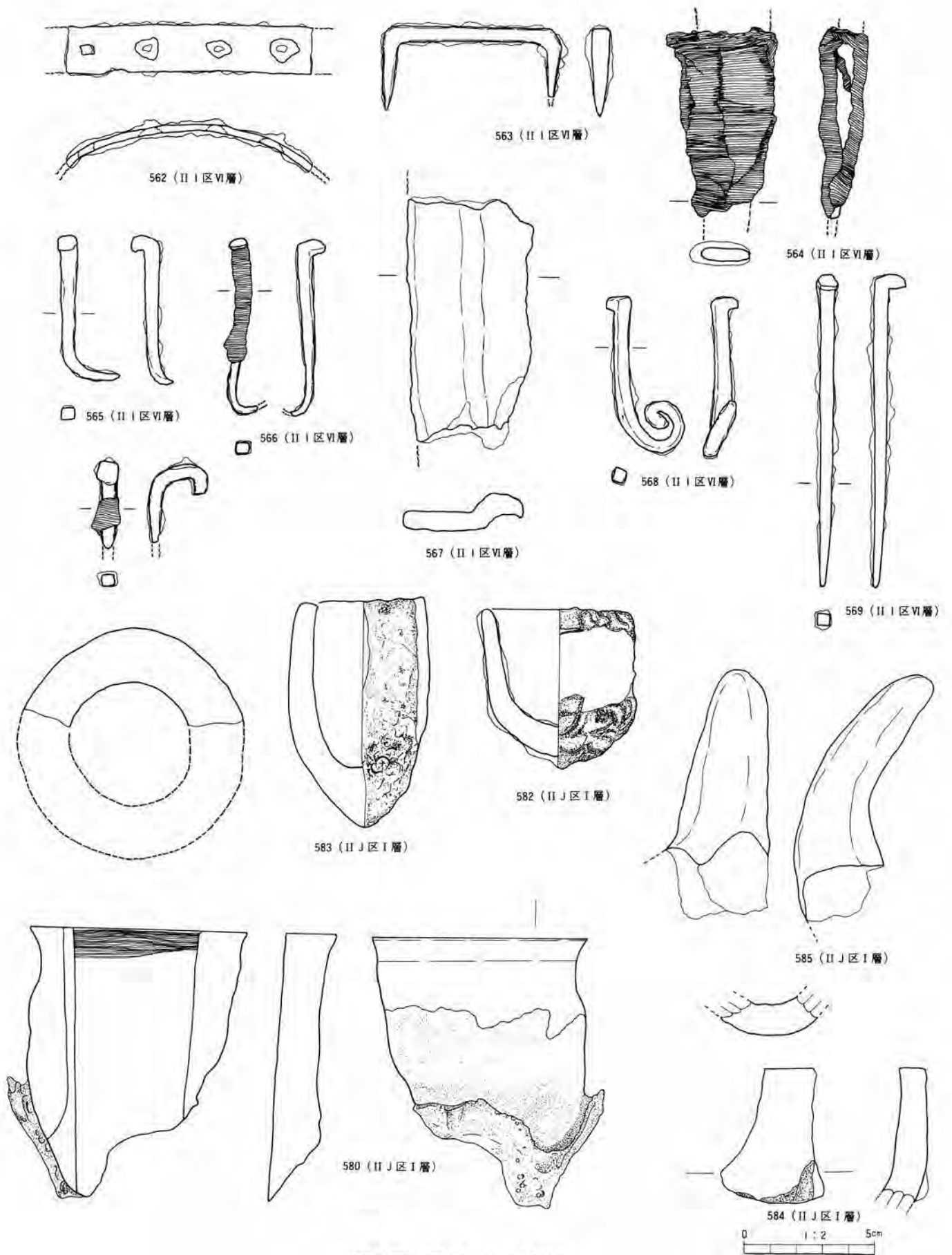
576 (II J 区I層)



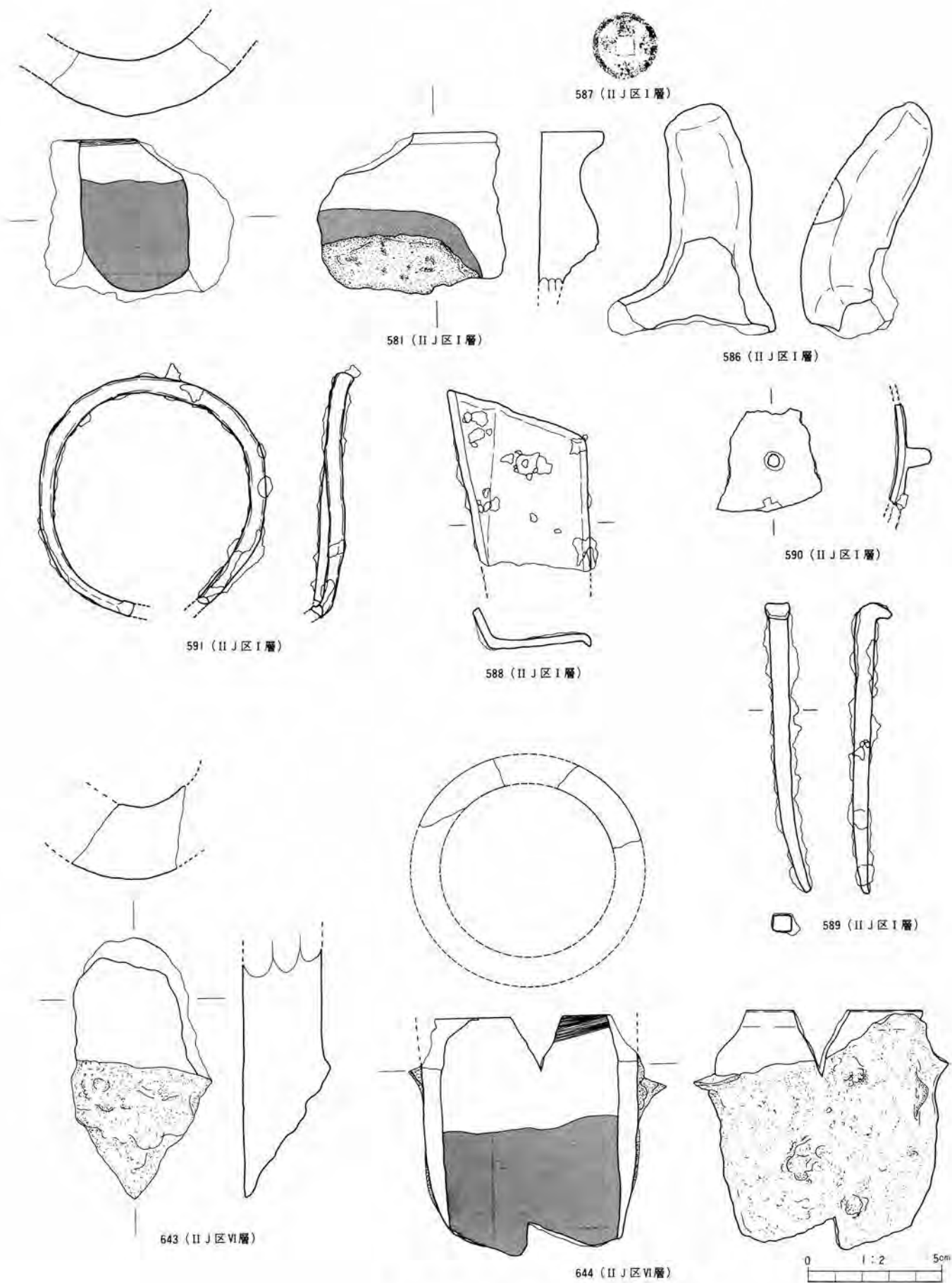
第76図 遺構外出土遺物(8)



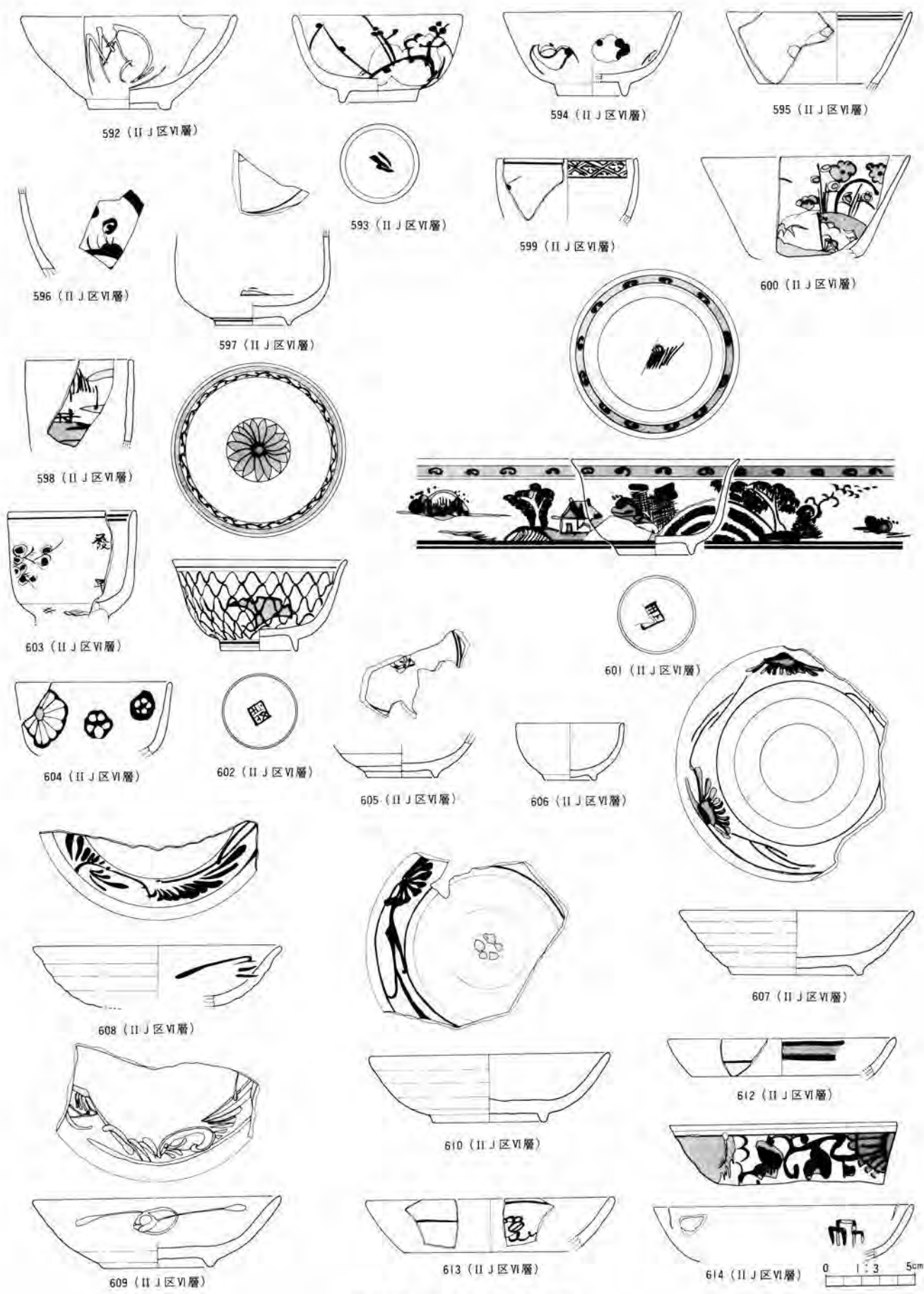
第77図 遺構外出土遺物(9)



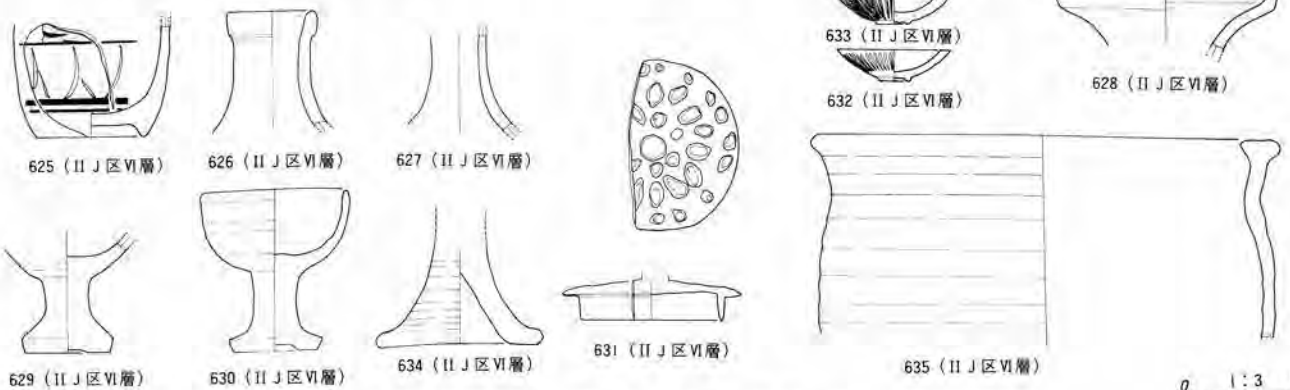
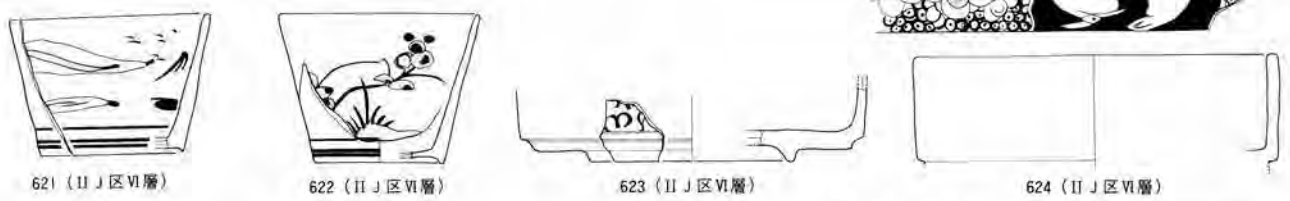
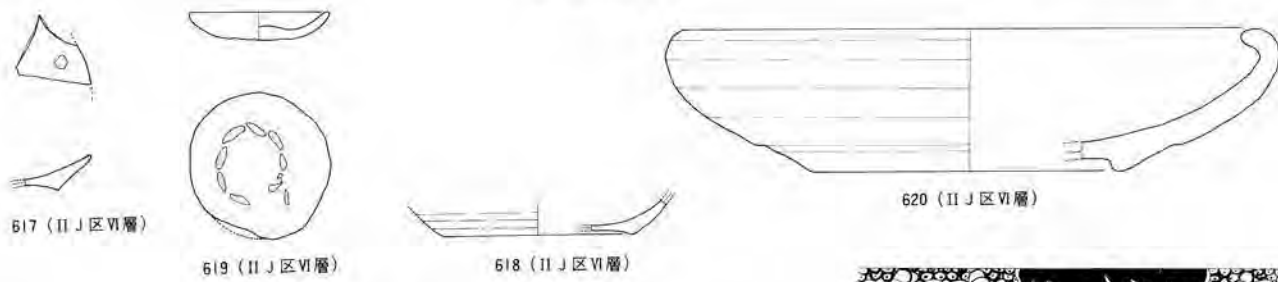
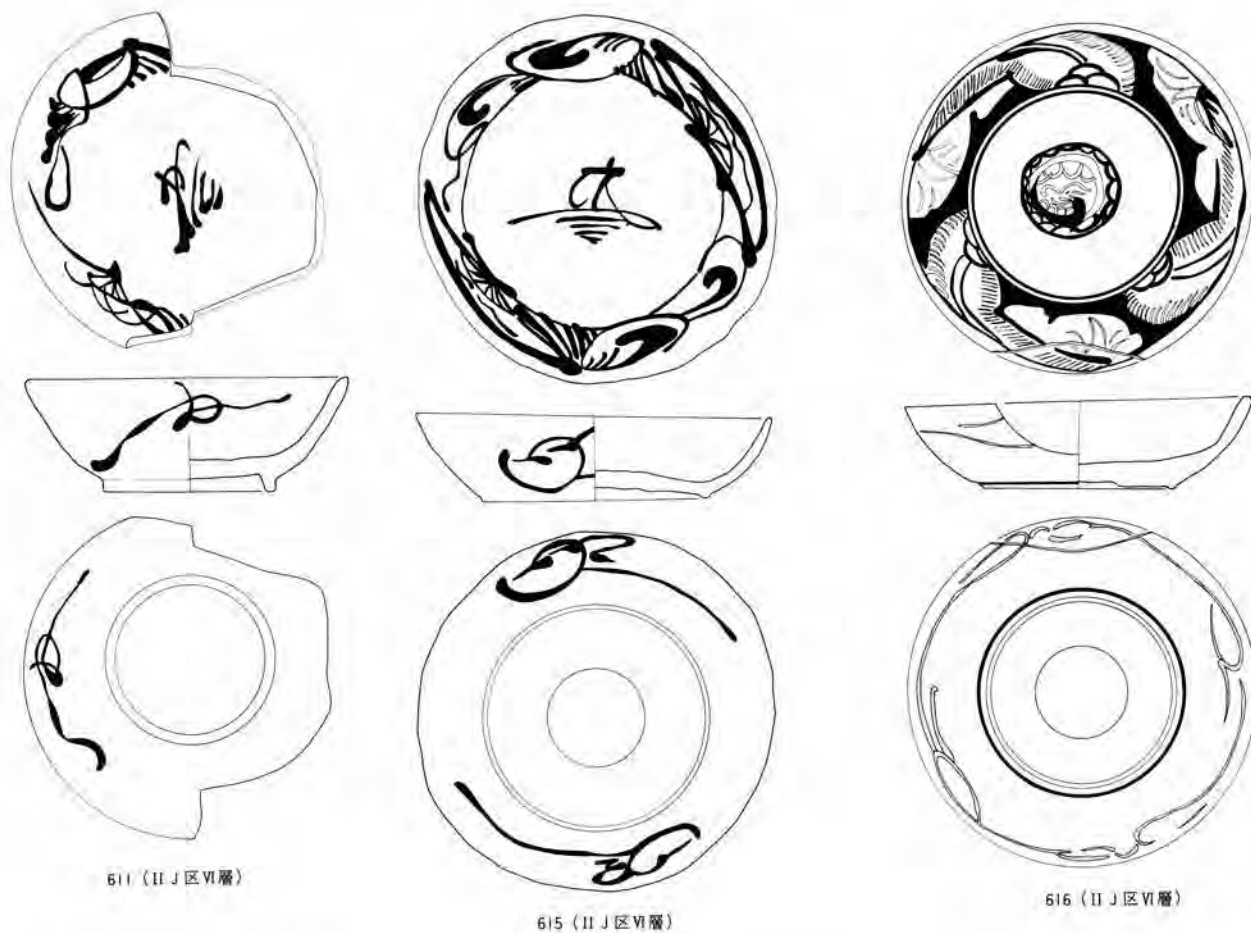
第78圖 遺構外出土遺物(10)



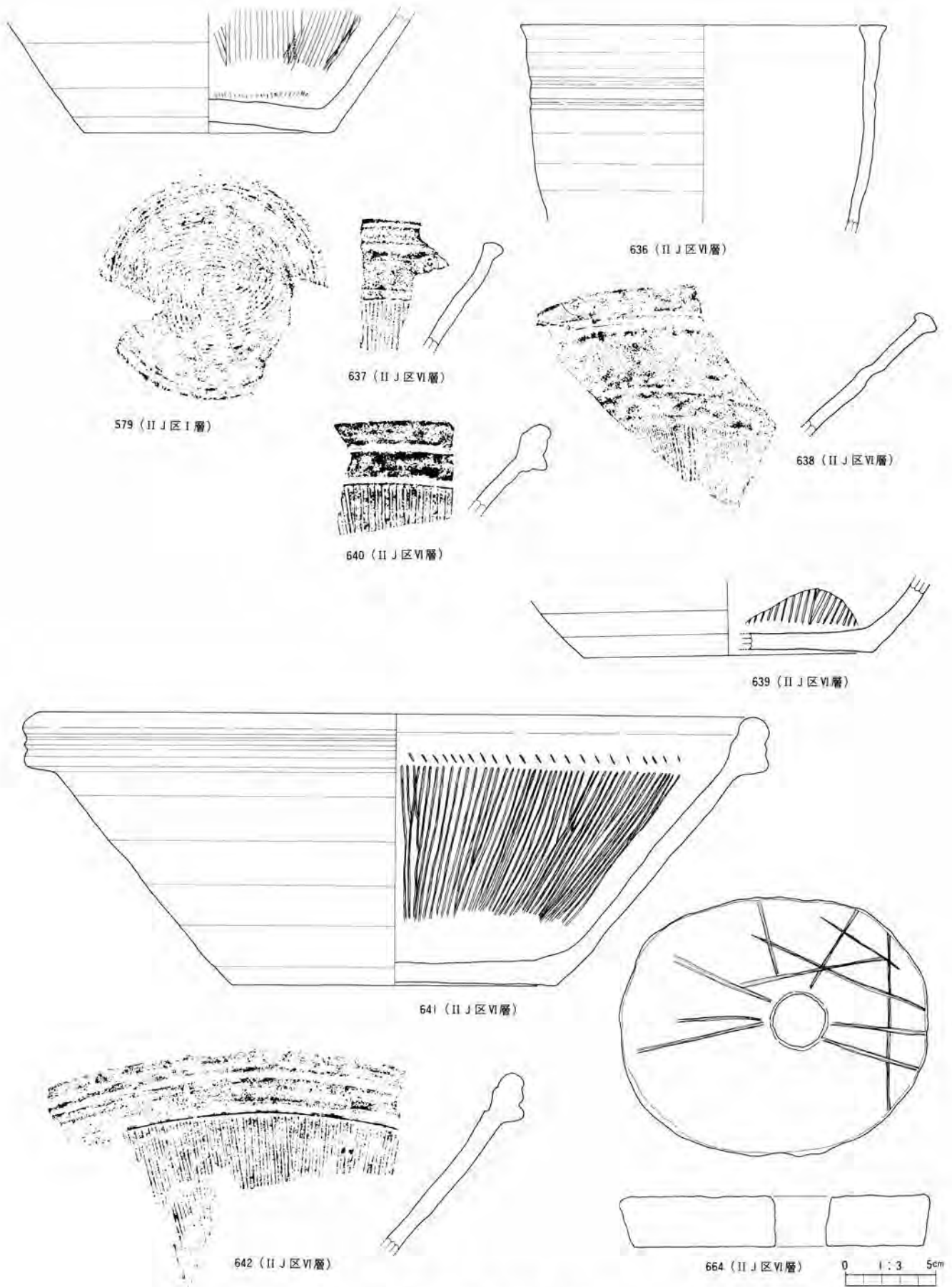
第79図 遺構外出土遺物(II)



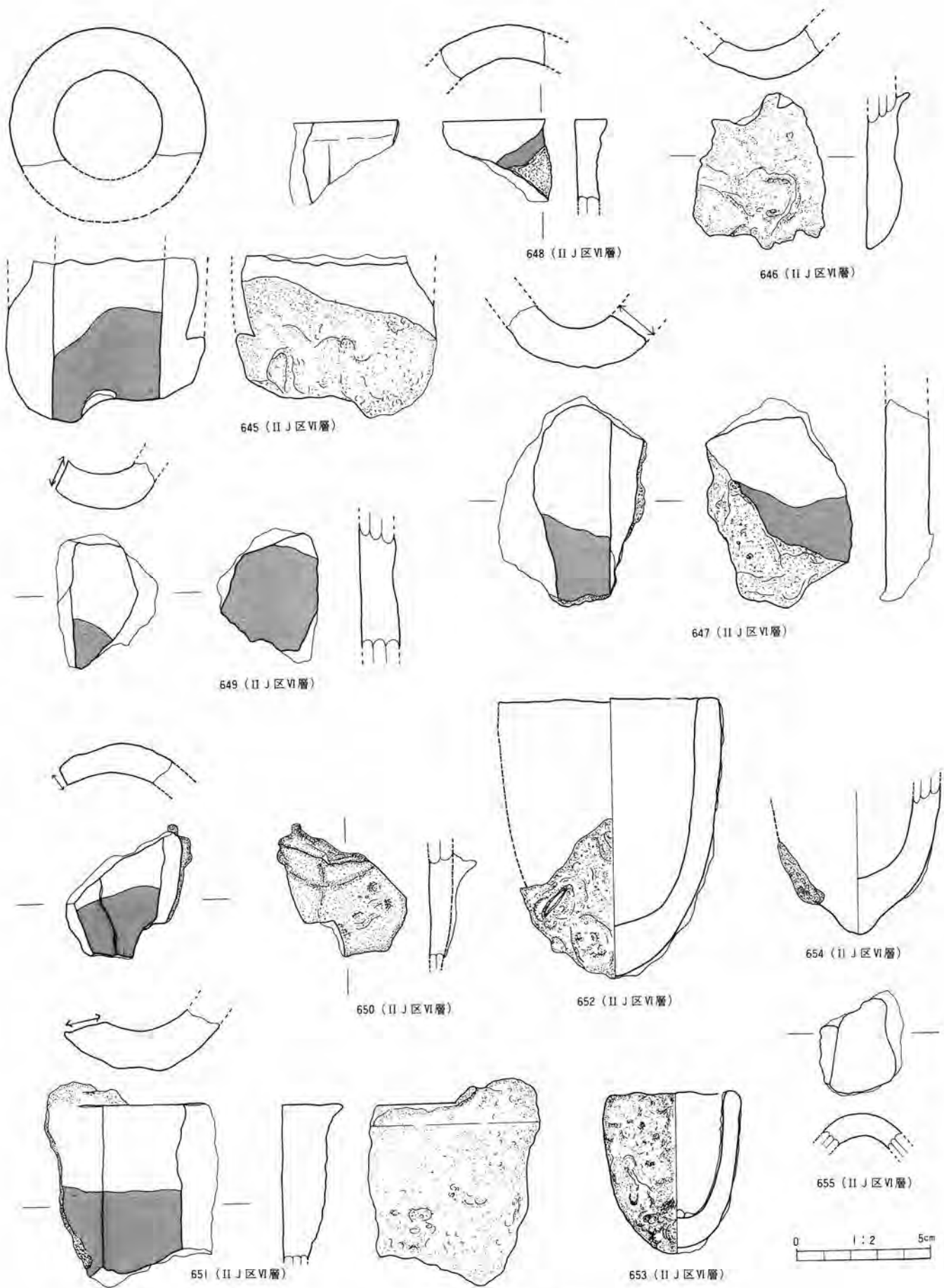
第80图 遺構外出土遺物(12)



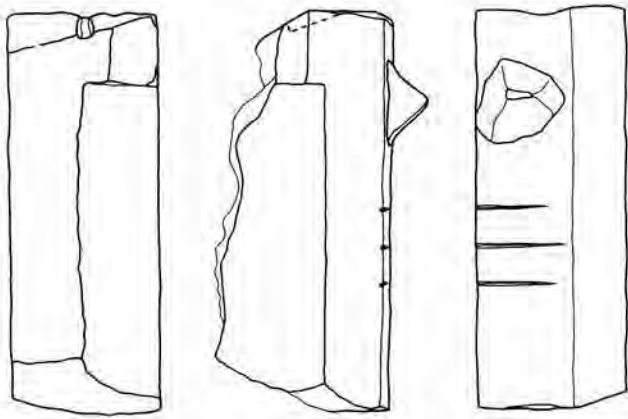
第81図 遺構外出土遺物(13)



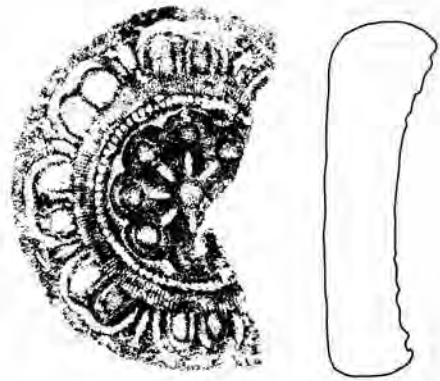
第82図 遺構外出土遺物(14)



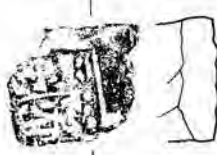
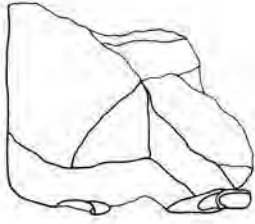
第83图 遺構外出土遺物(15)



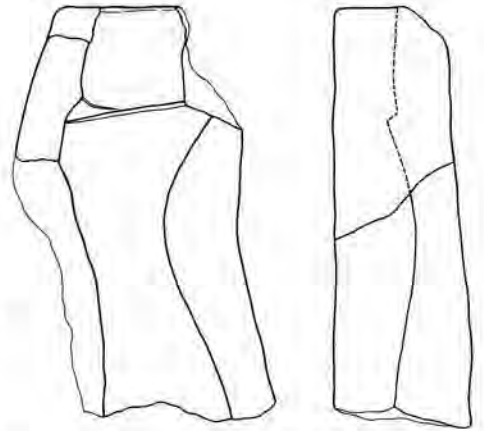
656 (II J区VI層)



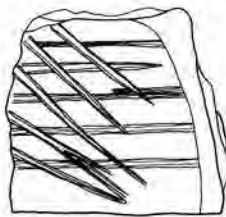
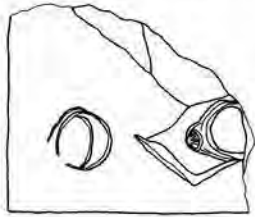
657 (II J区VI層)



667 (II J区VI層)



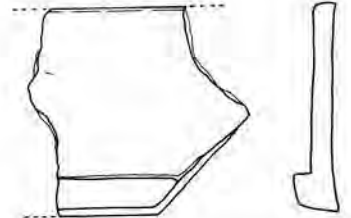
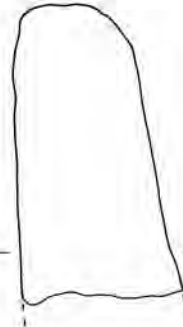
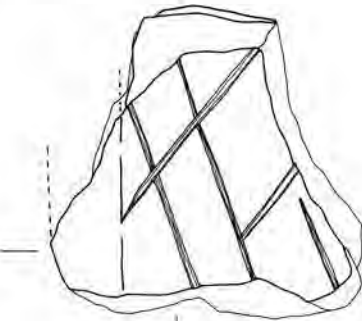
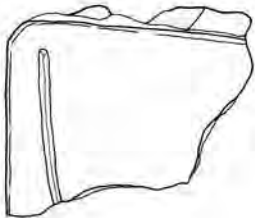
661 (II J区VI層)



658 (II J区VI層)



659 (II J区VI層)



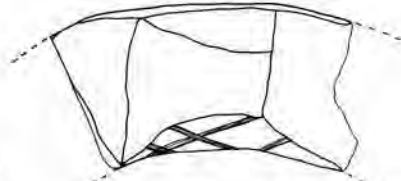
660 (II J区VI層)



668 (II J区VI層)



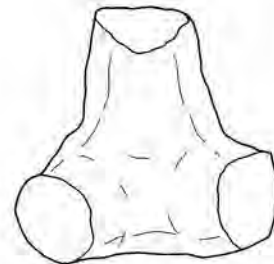
669 (II J区VI層) 670 (II J区VI層)



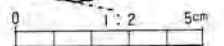
662 (II J区VI層)



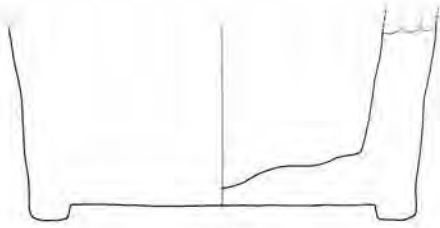
671 (II J区VI層)



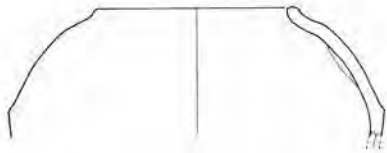
663 (II J区VI層)



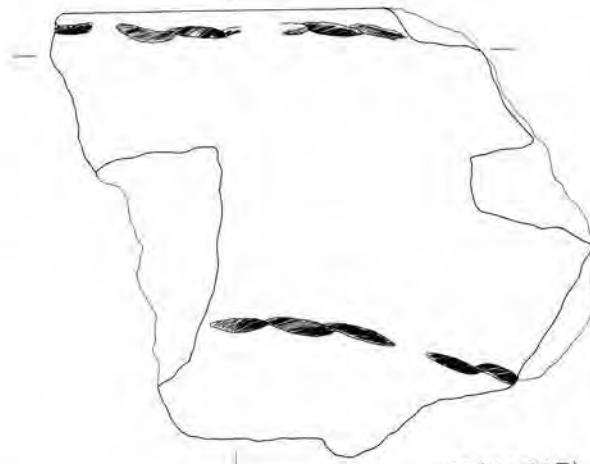
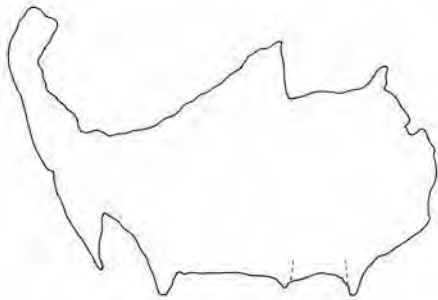
第84图 遺構外出土遺物(16)



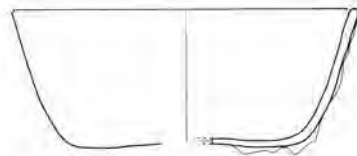
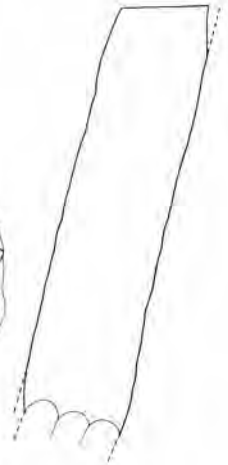
666 (II J区VI層)



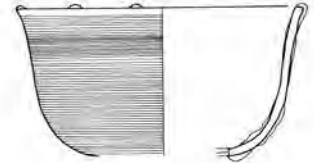
672 (II J区VI層)



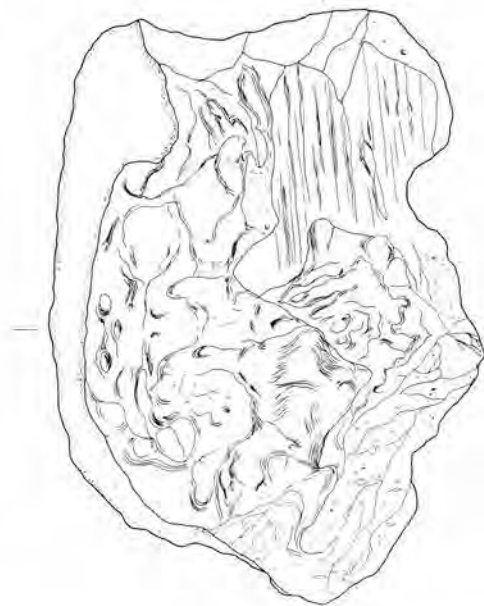
665 (II J区VI層)



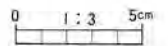
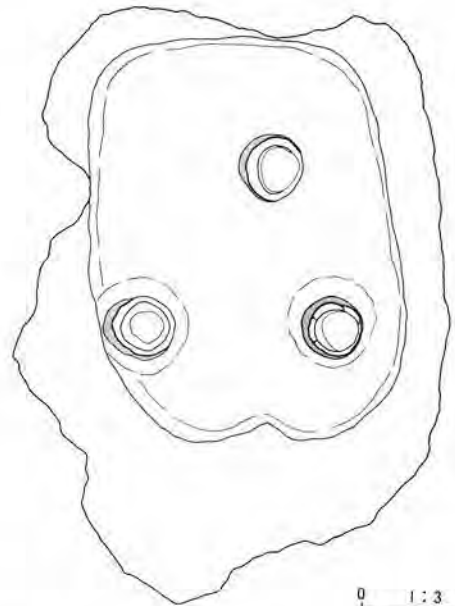
673 (II J区VI層)



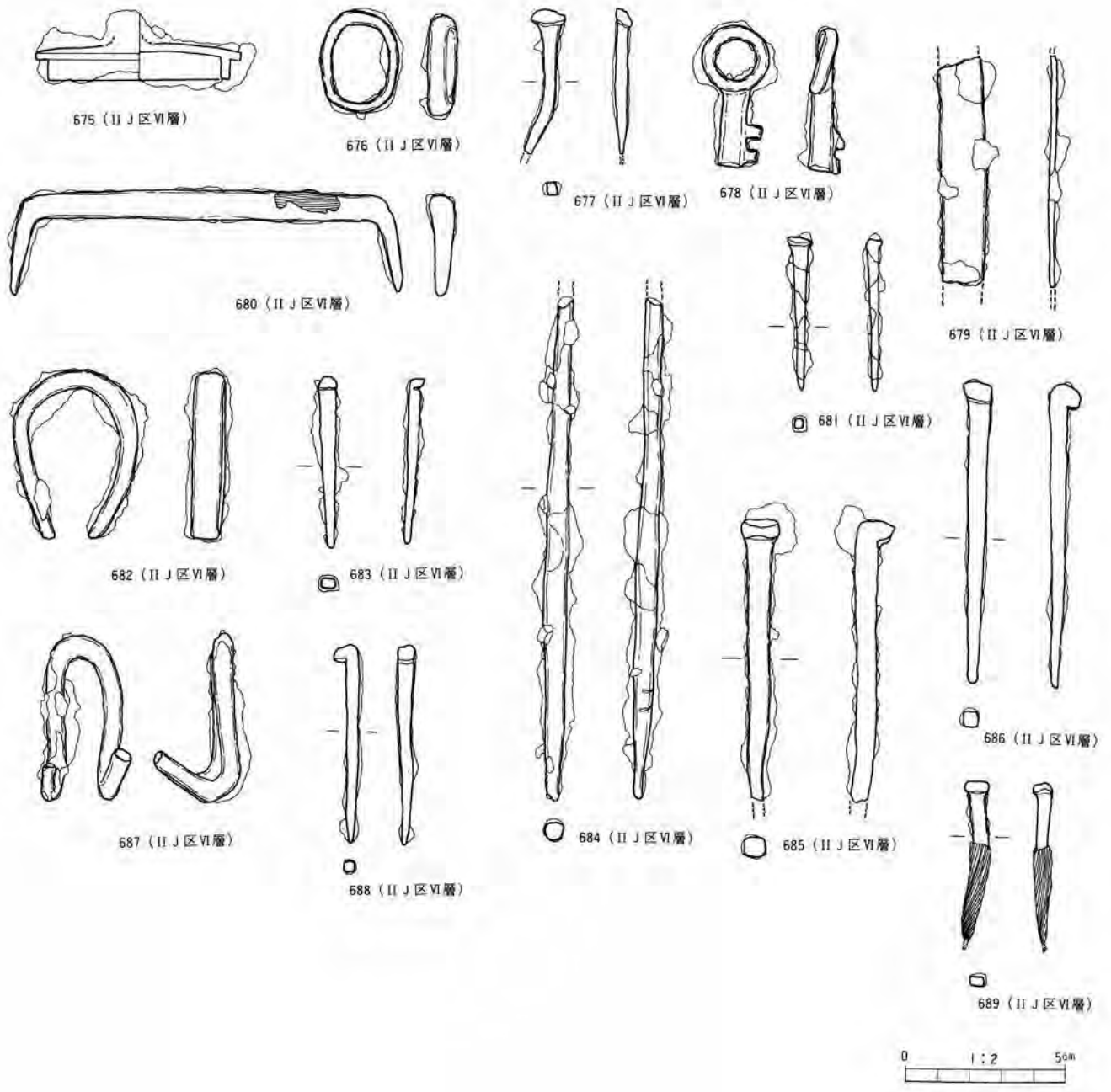
674 (II J区VI層)



690 (II J区VI層)



第85図 遺構外出土遺物(17)



第86図 遺構外出土遺物(18)

鉄銭計測表

(単位mm)

No.	出土地点	外径	内径	厚さ	No.	出土地点	外径	内径	厚さ
1	I A区表土			1	48	II I区2層			1.5
2	"			1	49	"	24		1.5
3	"	30		1	50	"			2
4	"	30		1	51	"	30		1.5
5	I A区2層	26		1	52	"	30.5	4×4	1.5
6	"	30		1	53	II J区表土			
7	"	25		1	54	"	29		1.5
8	I C区2層	25	4×4	1.5	55	"	30		1.5
9	I D区2層	25		1	56	"	27		1.5
10	"	30.5	5×6	1.5	57	"	26	5×5	1
11	"	25			58	"	26		1
12	I区層不明	25	5×5.5	1	59	"	30	5×5	1.5
13	II G区表土	24	5×5.5	1	60	"			1.5
14	"	24		1	61	"	28	5×4.5	1.5
15	II G区2層			1.5	62	"	30		1.5
16	"			2	63	II J区2層			
17	"	29		1	64	"	28.5	5.5×5.5	1
18	"	24.5	6×5.5	1.5	65	"	26		1
19	II H区表土	30		1.5	66	"	30		2
20	"				67	"	26		1
21	"	26	5.5×5.5	1	68	"	29	5.5×5.5	1
22	"	31	5.5×5	1	69	"	30	5.5×5.5	1
23	"			1	70	"	25	5×5	1
24	II H区2層	24	5.5×5.5	1.5	71	"			1
25	"	24	5×5	1	72	"	29		1
26	"	29		1	73	"	26	5×5	1
27	"	30		1.5	74	"	30		1
28	"	29		1	75	"	25.5	5.5	1
29	"				76	"	30		1.5
30	"	24		1	77	"	24	5×6	1.5
31	"	24		1	78	"		5×5	1
32	"	29			79	"	23.5	5×5	1.5
33	"	24		1	80	"			1
34	"	29		1	81	"		6×6	1.5
35	II I区2層	29	5×5	1	82	"	24	5×5	1
36	"			1.5	83	"	25	5×5	1
37	"	24.5	5.5×5.5	1.5	84	"	26	5.5×5	1
38	"	24	4×4	1.5	85	"			1.5
39	"			1.5	86	"	29	6×6	1.5
40	"			2	87	"			
41	"			1	88	"			
42	"	24.5	5×5.5	1	89	"	22		
43	"			1.5	90	"	30	5×5	1
44	"			1	91	"	30		1.5
45	"	24.5	5×5	1.5	92	"		5.5×5.5	1.5
46	"	24	5.5×5.5	1	93	"	26		1.5
47	"			1					

表3 鉄銭計測表

鉄銭も鉄滓と同様に尾根を中心に出土している。ほとんどの鉄銭が、錆びや腐食が甚だしく進み、正確な計測ができないものが多く、銭銘が判読できるものは皆無であった。

外径は、24.0cm～26.0cm、29.0cm～30.0cmの2つのグループに大別できる。

反応度 地区名	N	H	M	小計	反応度 地区名	N	H	M	小計
I A区1層					II A区1層	5570	15	2015	7600
					II A区焼土	465	10	310	785
I B区1層					II B区1層	350			
					II B区2層				
I C区1層	1390				II C区1層	1290			1290
					II C区2層	1790	335	190	2315
I D区					II D区				
I E区					II E区1層	275		60	335
					II E区2層	125			125
I F区					II F区1層	220			220
					II F区2層	110		135	245
I G区					II G区1層	385		120	505
					II G区2層	395			395
I H区					II H区1層	580			580
					II H区2層	2065	60	1085	3210
I I区					II I区1層	5025	90	265	5380
					II I区2層	106649	2165	12290	121104
I J区					II J区1層	11810	165	1375	13350
					II J区2層	77045	1720	10705	89470
合計	1390			1390		214149	4560	28550	247259

表4 鉄滓の分布(単位g)

鉄滓は、調査区全体から247kg出土している。ほとんどの鉄滓が、II区、すなわち尾根から出土していることが大きな特徴である。またその鉄滓の大部分が、II H、I、J区の上段の平場から出土している。今回の調査区外であるが、東の斜面が廃滓場になっており、トン数をもって数える量の鉄滓が確認されている。今回出土した鉄滓は、遺跡全体のごく一部のものであると思われる。

N、H、Mは、メタルチェッカーによる反応度である。

N：金属鉄は残留せず

H：ごく小さな金属鉄を残留する

M：ごく一般の金属鉄を残留する

自然遺物

自然遺物は、I A区の北部とII区から検出されている。量的にはII I、II J区からの出土遺物が大半を占めている。かなり新しい時期のものが含まれている表土層の遺物を省き、結果的にII I、J区のVI a、VI b層の遺物のみをまとめることになった。

なお、動物遺存体の同定は、陸前高田市立博物館佐藤正彦氏、岩手考古学会会員熊谷賢氏にお願いした。

黒森町I遺跡出土動物遺存体種名一覧

- | | |
|------------|---|
| I 軟体動物門 | MOLLUSCA |
| i) 二枚貝綱 | BIVALVIA |
| 1. イガイ | <i>Mytilus corsucus</i> Gould |
| 2. オオノガイ | <i>Mya arenaria oonogai</i> Makiyama |
| 3. ウバガイ | <i>Spisula sachalinensis</i> (Schrenck) |
| 4. トリガイ | <i>Fulvia mutica</i> (Reeve) |
| 5. ホタテガイ | <i>Patinopecten yessoensis</i> (Jay) |
| 6. アサリ | <i>Ruditapes philippinarum</i> (Adams et Reeve) |
| 7. コタマガイ | <i>Gomphina veneriformis melanaegis</i> (Römer) |
| 8. タマキガイ | <i>Glycymeris vestita</i> (Dunker) |
| ii) 腹足綱 | GASTROPODA |
| 1. エゾアワビ | <i>Haliotis discus hannai</i> Ino |
| 2. ユキノカサガイ | <i>Acmaea pallida</i> (Gould) |
| 3. バイ | <i>Babylonia japonica</i> (Reeve) |
| II 脊椎動物門 | |
| i) 硬骨魚綱 | |
| 1. カツオ | <i>Katsuwonus pelamis</i> (Linne) |
| 2. マダイ | <i>Pagrus major</i> (Temminck et Schiegel) |
| 3. マダラ | <i>Gadus macrocephalus</i> Tilesius |
| 4. カサゴ科 | Scorpaenidae gen. et sp. indet. |
| 5. アジ科ブリG | Carangidae gen. et sp. indet. |
| 6. マグロ類 | <i>Thunnus</i> sp. |
| ii) 鳥綱 | AVES |
| 1. キジ科 | Phasianidae gen. et sp. indet. |
| iii) 哺乳類 | MAMMALIA |
| 1. ネコ | <i>Felis catus</i> Linne |
| 2. イヌ | <i>Canis</i> sp. |

No.	種名	
1	イガイ	L3 R2
2	オオノガイ	L2 R2
3	ウバガイ	L45 R46
4	トリガイ	L1
5	ホタテガイ	L1 R4
6	アサリ	R2
7	コタマガイ	L1
8	タマキガイ	L1
1	エゾアワビ	11
2	ユキノカサガイ	2
3	バ	イ 1

第5表 自然遺物（貝類）

種名	部位	前上顎骨	口蓋骨	前鰓蓋骨	角舌骨	前頭骨	鋤骨	腹椎骨	尾椎骨
カサゴ科	L		1						
	R	1			1		1		
アジ科 ブリG	L								
	R								1
カツオ	L			1					
	R				1				1
マダイ	L	1							
	R					1			
マダラ	L								
	R	1							2
マグロ類	L								
	R								1

第6表 自然遺物（魚類）

種名	部位	頭骨	下顎骨	環椎	軸椎	頸椎	胸椎	腰椎	仙骨	尾椎	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	寛骨	中手骨	大腿骨	脛骨	踵骨	距骨	中足骨	肋骨
イヌ	L	1	2	2	2	7	20	11	1	4	1	2	1	2	1		2	1	2			
	R		1								2	1	1	2	1		1	2	2	1		10
ネコ	L		1																			
	R																					
キジ科	L													1			1	1				
	R											1			1			1			1	

第7表 自然遺物（哺乳類、鳥類）

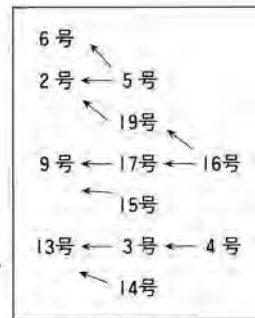
IV 調査のまとめ

宮古で古代から製鉄が行われていたことは、ここ数年の発掘で確認されているが、鑄造遺跡は、初めてのことである。大量の遺物の整理作業に時間を取られ、関連資料の蒐集に手を伸ばす余裕もなく、多くの課題を残す結果となった。

本遺跡の特徴ともいえるII区の墓壙と遺物包含層出土の陶磁器、I区の炉跡について若干の検討を加え、伝聞資料も含めた関連資料、記録を紹介し、まとめとしたい。

墓地跡

墓壙跡は19基検出した。江戸時代の墓地遺跡については、近世前期の墓地遺跡である「八丁堀3丁目遺跡」の例を取り上げ、葬法には火葬、土葬の2種類あり、埋葬形態として早桶（円筒形の座棺）、箱棺、襖棺、火葬骨蔵器、火葬骨直葬、網状製品に包んだ埋葬などが報告されている。また、近世前期には多様な墓制が混在していたことと、併せて近世中期中葉から近代にわたる「新宿区自証院遺跡」においては、火葬墓が1基しか検出できなかったことが指摘されている。(注1)



第8表 墓壙の切り合い

当遺跡の墓跡の葬法は、すべて土葬であり、蔵骨器等に納められたものはない。埋葬形態は、墓壙の平面形がすべてほぼ円形を呈していること、人骨の遺存状況などからみて早桶によるものと思われる。墓壙は検出面の違いからII C、D区とII H、I、J区に分かれ、II C、D区は切り合いの関係から3つのグループに大別できる(表8)。II C、D区の第1のグループは第2号、第6号、第9号、第13号の比較的新しい墓壙群である。第2のグループは、第3号、第5号、第14号、第15号、第17号、第19号であり、第1墓壙群に切られている墓壙群である。第3グループは、第4号、第16号であり、第2墓壙群に切られている墓壙群である。

各墓壙群の年代については陶磁器、煙管などの副葬品から、第1墓壙群は18世紀前葉以降、第2墓壙群は17世紀前葉以降に相当し、第3墓壙群は不明である。また、II H、I、J区の墓壙群は17世紀後半から18世紀前半に相当する。

当遺跡の墓地跡は、墓制、副葬品などから近世中期以降のものと思われる。

陶磁器

当遺跡の陶磁器は、9割以上がII H、I、J区から出土している。器種別にみると、日常飲食器が、大半を占め、そのほか灯火具、火入れ、仏具、花生などが含まれているが、碗、皿に次いで搗鉢が多いが目立っている。また、碗、皿には磁器、鉢、襖に陶器が使われているなかで、瓦質土器の火入れ、皿が各1点ずつ出土している。

表9は産地、年代が特定できたものをまとめたものであるが、ここで近世の陶磁器の流れをごく大まかにたどってみたい。16世紀から17世紀にかけて肥前唐津産の陶器が西日本、日本海沿岸に、瀬戸・美濃産の陶器が東日本、太平洋岸に出回り、全国の市場を2分していた。17世紀に始まったといわれる肥前の磁器の生産が急成長を遂げ、18世紀に至って瀬戸美濃産の陶器を圧倒するようになり、磁器生産における肥前の独占体制が確立される。19世紀の初頭から瀬戸

美濃でも磁器の生産が始まるとともに地方窯が相次いで興り、肥前系、瀬戸美濃系と称される磁器が増えるなど、200年続いた肥前磁器の独占が崩れていく。

当遺跡の陶磁器の変遷からも、瀬戸美濃産の陶器→肥前の磁器→肥前系、瀬戸美濃系磁器という全国的な動きをみてとることができる。

器種別でみると、18世紀において皿は瀬戸美濃産、碗は肥前産と分かれている。皿、碗などの飲食器には磁器、徳利、鉢、搦鉢等の容器、厨房具には陶器という生産地による明瞭な使い分けがあったことは報告されている。(注2) 当遺跡の例だけでは、一般的とはいいがたいが、使い分けが碗や皿にまで及んでいた1例と思われる。

19世紀以降の陶磁器で産地を特定できたものはごく一部であり、当遺跡から出土した陶磁器の大半が、産地年代が不明のまま残された。

第2号炉、第3号炉

鑄造遺跡は、鉄を溶かす溶解炉、鑄型、鑄型を据えて鉄を流し込む鑄造土壙などから構成される。溶解炉は、古来甑炉と呼ばれ、三層構造になっている(第87図)。鑄造土壙は、鑄込み炉とも呼ばれ、溶解炉より低い位置に、深く掘り込まれる。

溶解炉の据え方には、いくつかの方法がある(第88図)。溶解炉のなかには、防湿、熱の放出防止のため地下構造をもつものがある。地下構造は、基本的には炉台となる枠組を埋め込み、粘土や灰などを敷いて焼結させるというものである。

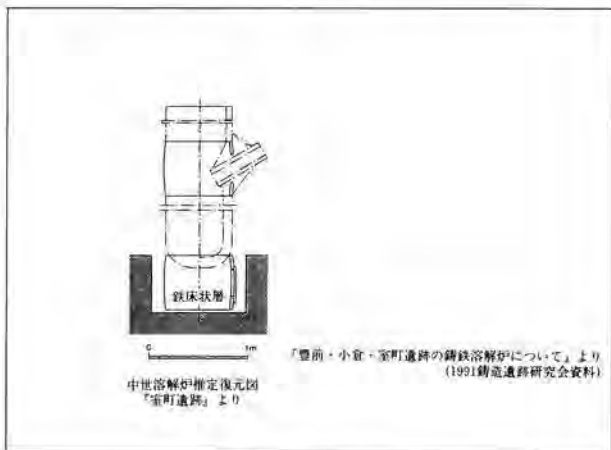
鑄造土壙は、土壙中に溝条の掘り込みや、内壁に石組みを積み上げたものなどの例が報告されている(「鑄造遺跡研究会資料」)。

以上のことを考慮にいれ、2号炉、3号炉を検討してみたい。

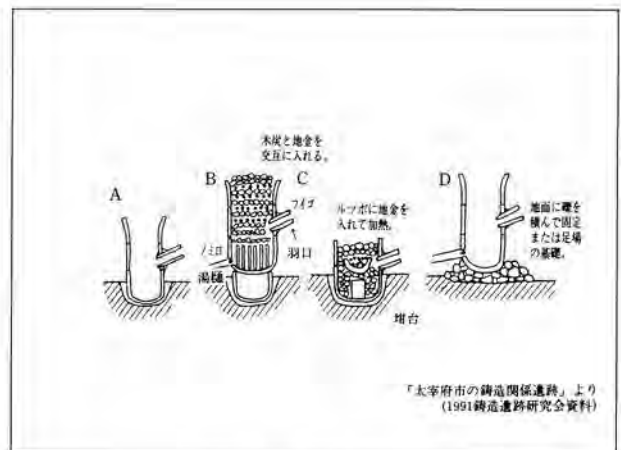
2号炉の浅い掘り込み、焼土を円形に囲む格好で遺存する土製品の一部、炭のひろがりなど溶解炉の下部構造であるの可能性を示し、さらに、炉の南側に散乱する大小の礫は、ファイゴ座を構築していたのではないかと、という推測も可能であると思われる。

3号炉については、斜面という炉の位置、斜面を掘り下げ、斜面側を開口し(鑄造が終了した際の取出口として土壙の一部を開口する例が報告されている)、石組を積み上げ、その上に粘土を張り付け焼結させている等の諸点からみて、鑄造土壙である可能性を示すものと思われる。

遺跡全体をみた場合、前述したように、尾根と背後の斜面に陶磁器、鉄滓などを廃棄していることが本遺跡の大きな特徴の一つである。廃滓場として背後の山を選んだ理由が問題になるが、あるいは新たな遺構の存在する可能性も考えられる。



第87図 溶解炉(1)



第88図 溶解炉(2)

黒森町 I 遺跡の鑄造関係の遺構、遺物は、遺構の位置、年代などからみて江戸時代に鑄物を生業としていた中沢家（通称「からかさ屋敷」）の遺跡とみて間違いないと思われる。「からかさ屋敷」の創業年代は、はっきりわかっていない。寛永2年（1705年）、初代が分家したといわれ、18世紀初めには既に操業していた。中沢家に鑄物を伝えたのは、南部藩に仕え、鍋、鉄瓶、鑿口、梵鐘を手掛けたという藤田善九郎（宝永六年（1709年）に二代目善助は、上閉伊郡達曾部村から盛岡に移っている）であるといわれている（中沢新平氏所蔵の系図による）。

次に紹介するのは黒森神社に奉納された鉄鉢、米山神社（宮古市津軽石）に奉納された鑿口にの銘文の一部である。いずれも当遺跡で製作されたものと思われる。

鉄鉢

奉納 黒森山

中略

山口施主

中沢与伝治

文化十一甲戌年

四月吉日

鑿口

施主 山口邑 中澤與惣右ヱ門

中略

天保十四年四月一日 鑄物師 中沢与作

(1843年)

昌常

中沢与伝治は中沢家の三代目、与作は二代目、與惣右ヱ門は六代目である。中沢家の菩提寺は、本遺跡の北百メートルほど所にある慈眼寺である。境内には、2代目与作の堂々とした墓碑が聳えるように立っており、往時の隆盛を偲ばせる。当時、鑄物が、諸工業のなかで最大級のものであったことを裏付けている。ちなみに、第48図の墓碑の鑄工中沢茂兵衛という人物の名は、中沢家の系図には見当たらず、中沢家の職人ではなかったかと推測される。

製品は、鉄鉢、鑿口の他に、岩泉の砂鉄で鑄造されたという鉄瓶などが確認されているが、常安寺（宮古市沢田）の梵鐘を鑄たという伝聞史料も伝えられている（梵鐘は、戦時中に供出し、現存しない）。

前述したように、宮古では、幕末になって鉄に関する記録が目立つようになる。そのなかで、本遺跡とは直接関係がないが、鑄物に関係のあるものを紹介する。

- | | |
|---------------|---|
| 弘化4年（1847年）6月 | 江戸鑄物師増田安次郎弟利助、職人26人を引き連れ宮古に来る。
大炮并御国産鍋吹方御用中帯刀御免（宮古市史六） |
| 同年 10月 | 久館で、鍋吹増田利助が6間に20間の鍋吹屋、居宅3間12間の家を建設、鍋吹を行う（宮古市史一） |
| 同年 10月 | 奥御国産差配役吉田徳蔵より、山口村の内牛沢山・馬子舞山・沢田山にて鍋吹立御用として炭釜建設願いに対し、地元の者反村、10月27日～12月22日迄馬子舞山で二釜、鷹ヶ沢山で一釜焼くこととなる。 |

陶磁器の流通経路、具体的な鑄造のプロセスと出土遺物の関係すけ、文献史料等による遺跡の立地、背景等の解明が今後の大きな課題である。

注1. 野沢均「江戸の墓地遺跡」(考古学ジャーナル 286、1988年)

注2. 佐々木達夫「物資の流れ—江戸の陶磁器—」(季刊考古学、第13号)

参考文献

佐賀県立九州陶磁文化館「国内出土の肥前陶磁」(昭和59年)

大橋康二「肥前陶磁」(ニューサイエンス社、平成元年)

「古伊万里」(別冊太陽63)

田口昭二「美濃焼」(ニューサイエンス社、昭和60年)

岩手県立博物館「北の鉄文化」(1990年)

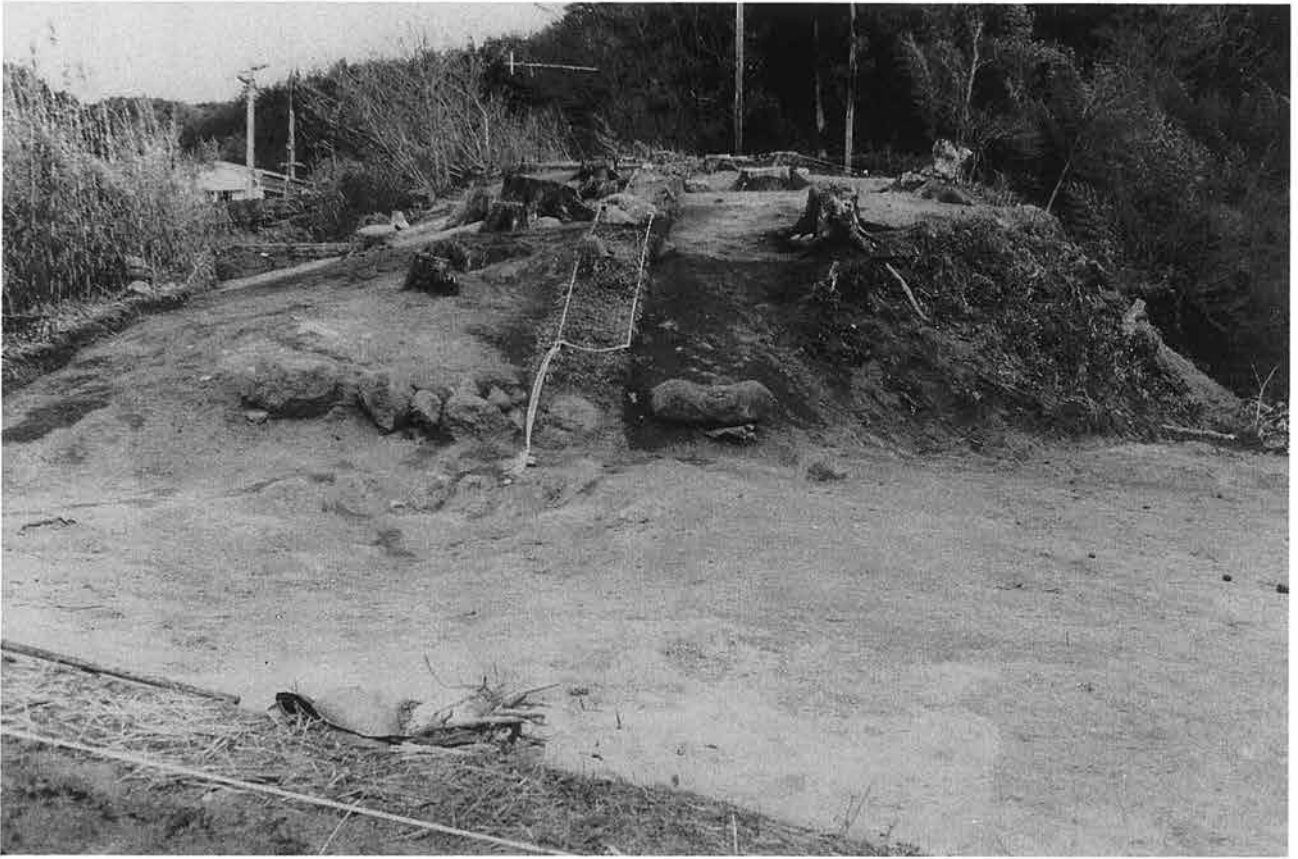
「第1回鑄造研究会資料」(1991、於京都造形芸術大学)

石野亨「鑄物の文化史」(小峰書店、1990年)

	瀬戸美濃	肥前	瀬戸美濃系	肥前系	国産磁器
1700年					
1800年					

第9表 黒森町I遺跡出土陶磁器の変遷

写 真 图 版



調査区尾根と平場（西から）



II C、D区墓墳域

第2図版



第2号炉跡



土製品



復元



土製品



土製品

第2号炉跡出土遺物



第3号炉跡検出状況



第3号炉跡断面

第4図版

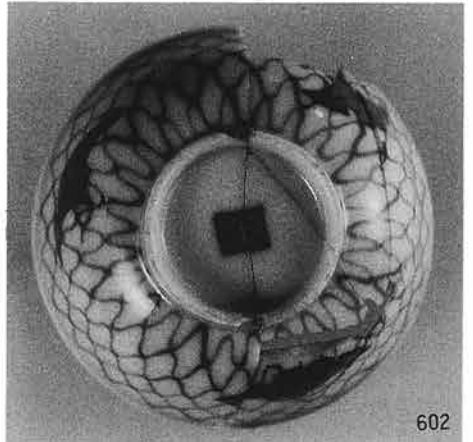


第2号掘立柱建物跡



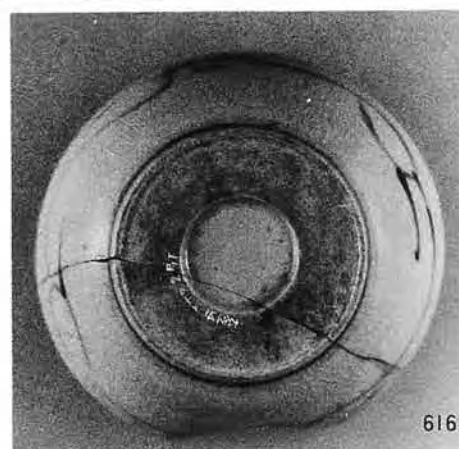
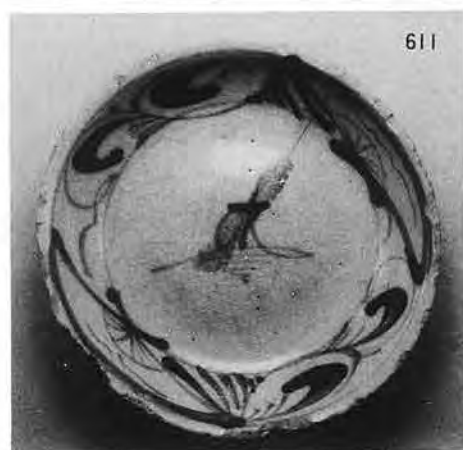
II 1、J区遺物出土状況

第5図版



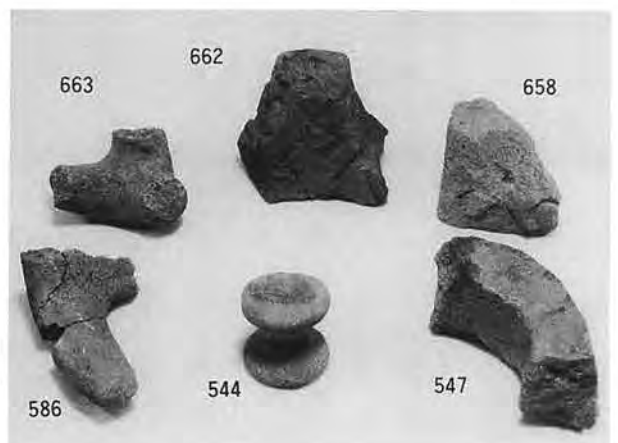
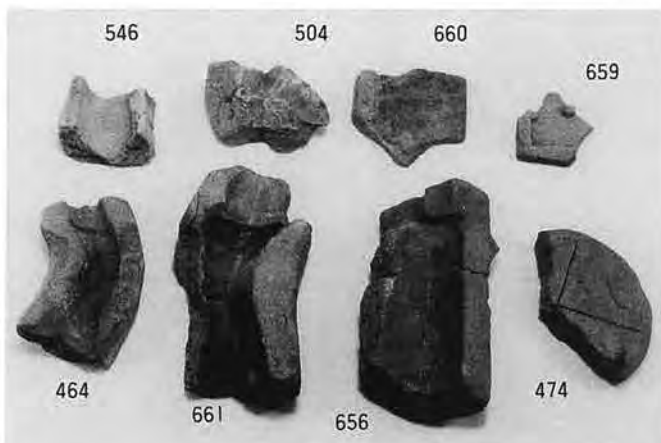
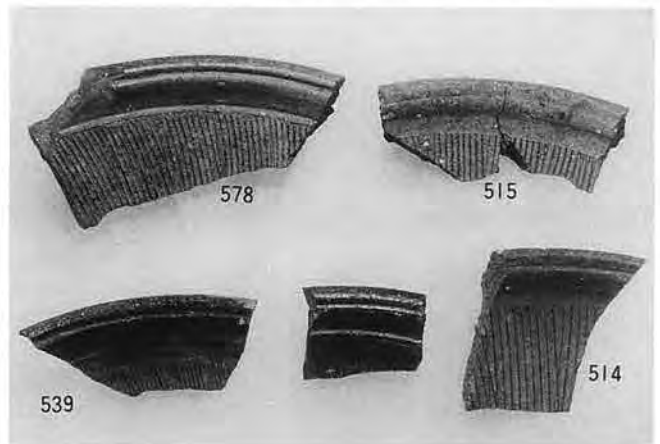
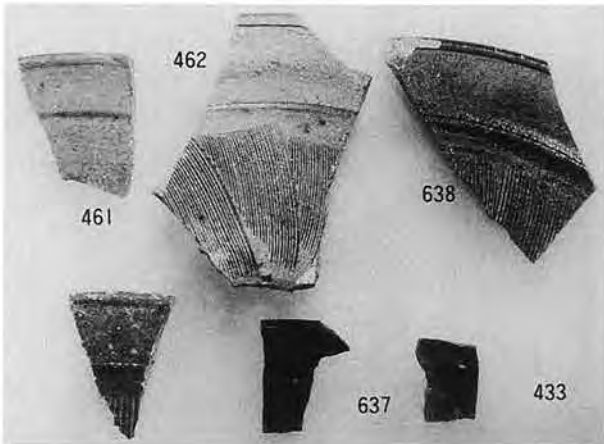
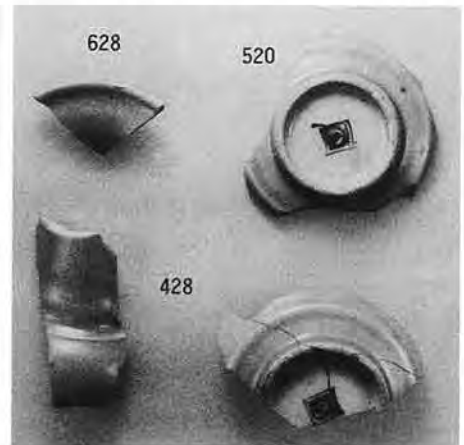
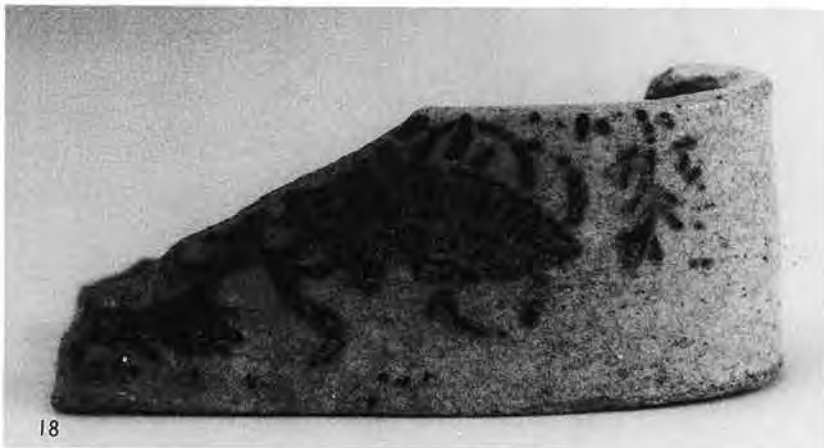
II J 区出土の陶磁器

第6図版



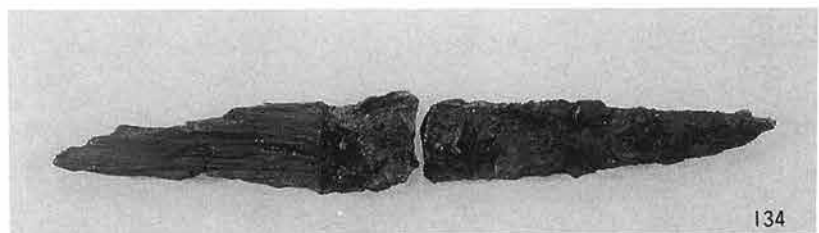
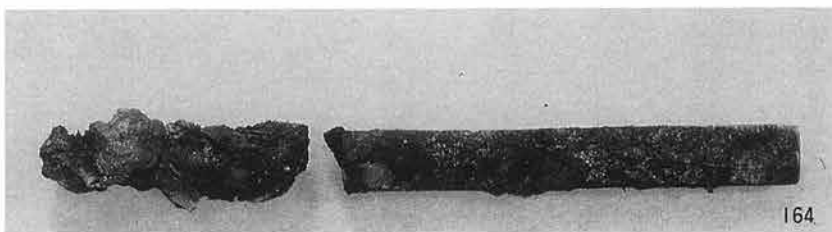
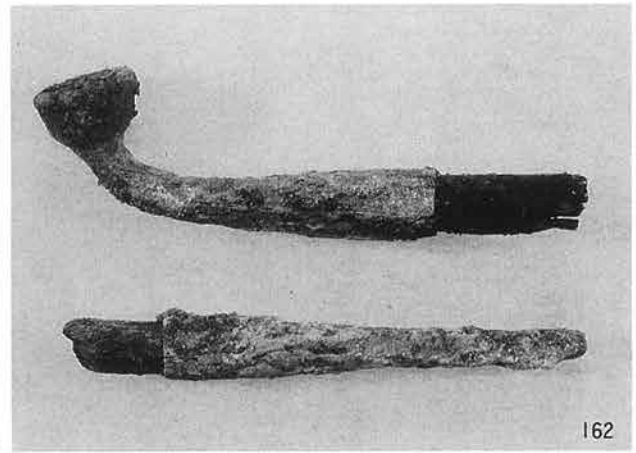
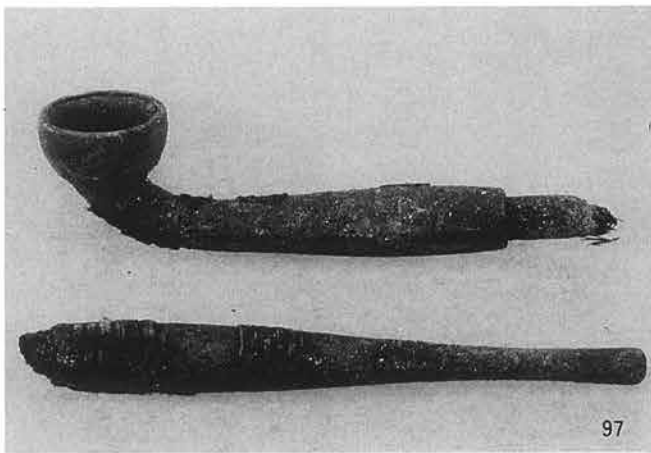
第12号墓墳、II J 区出土遺物（陶磁器）

第7図版

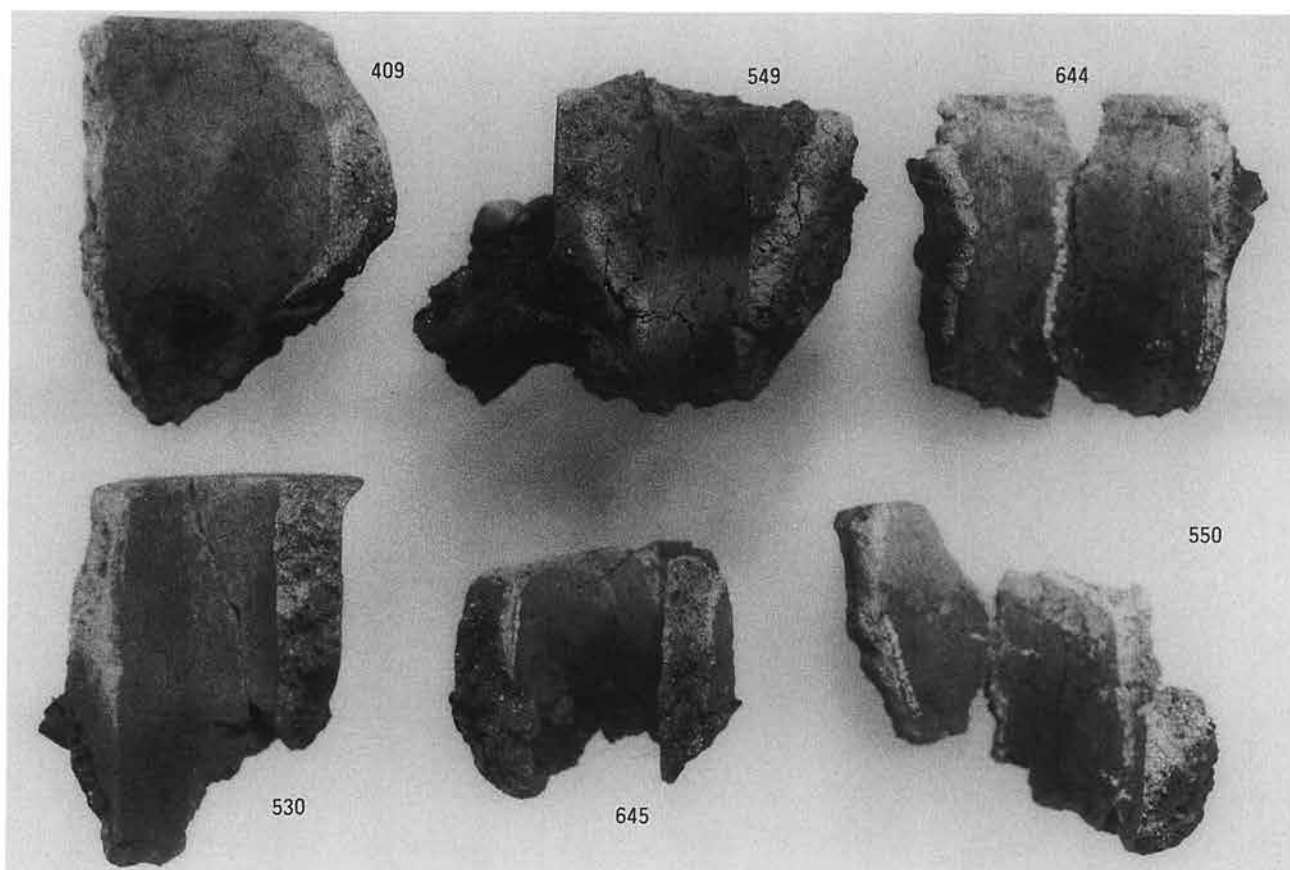
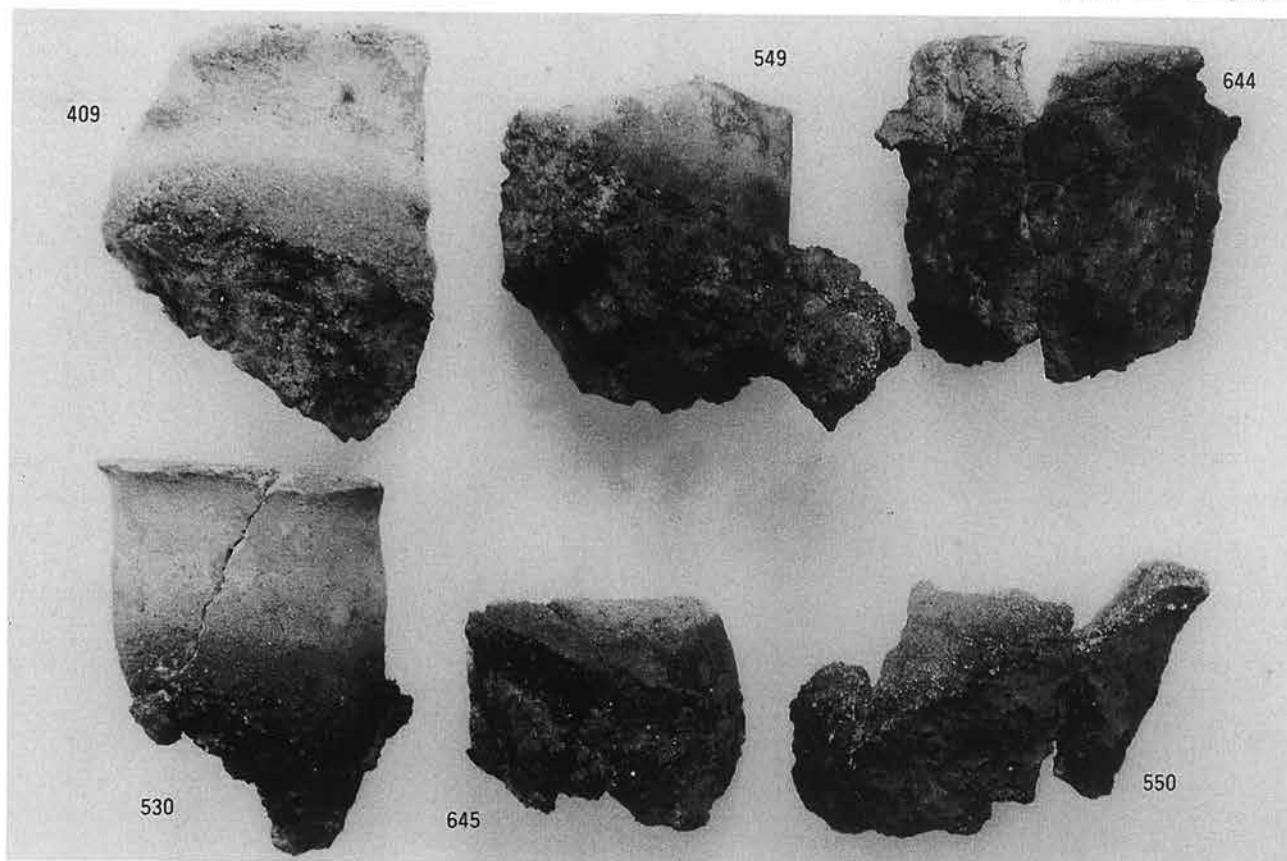


第3号墓墳、遺構外出土遺物（陶磁器、挿鉢、土製品）

第8図版

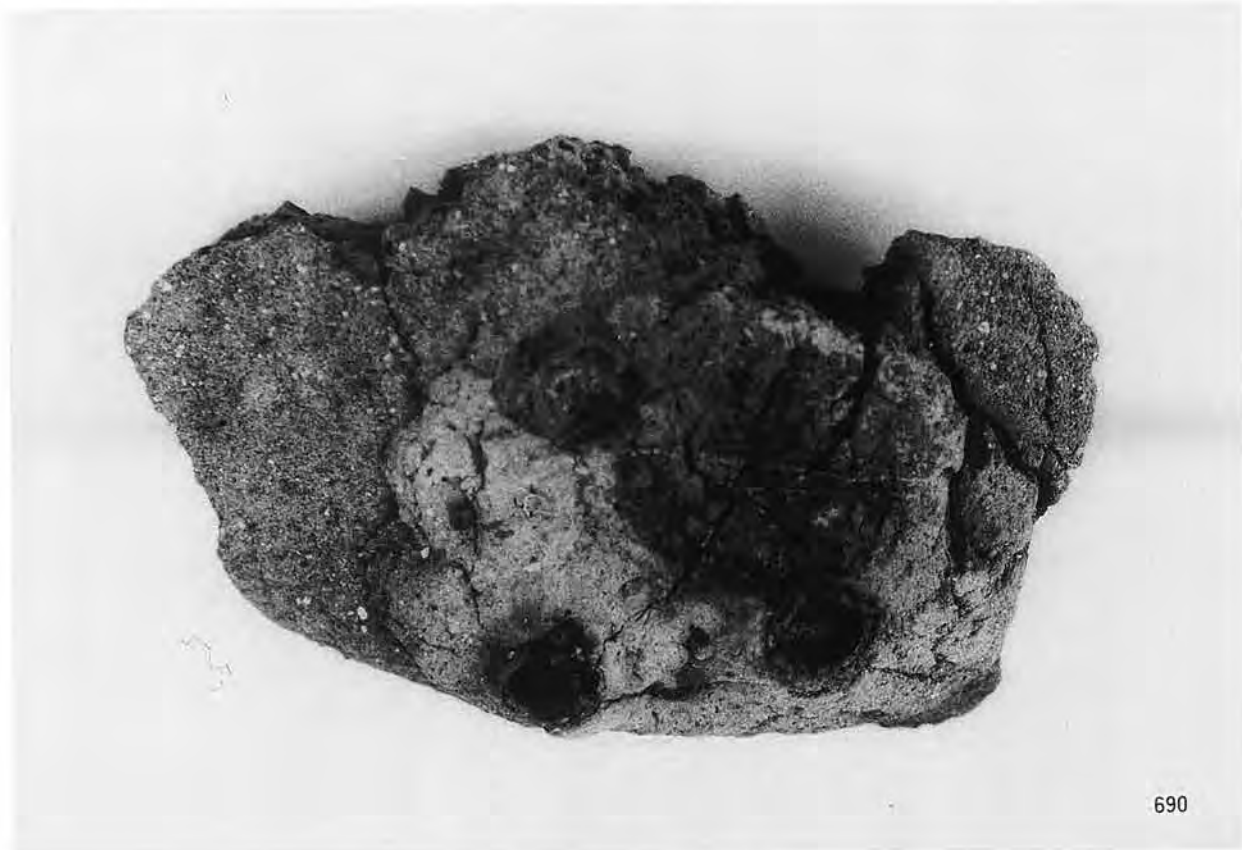
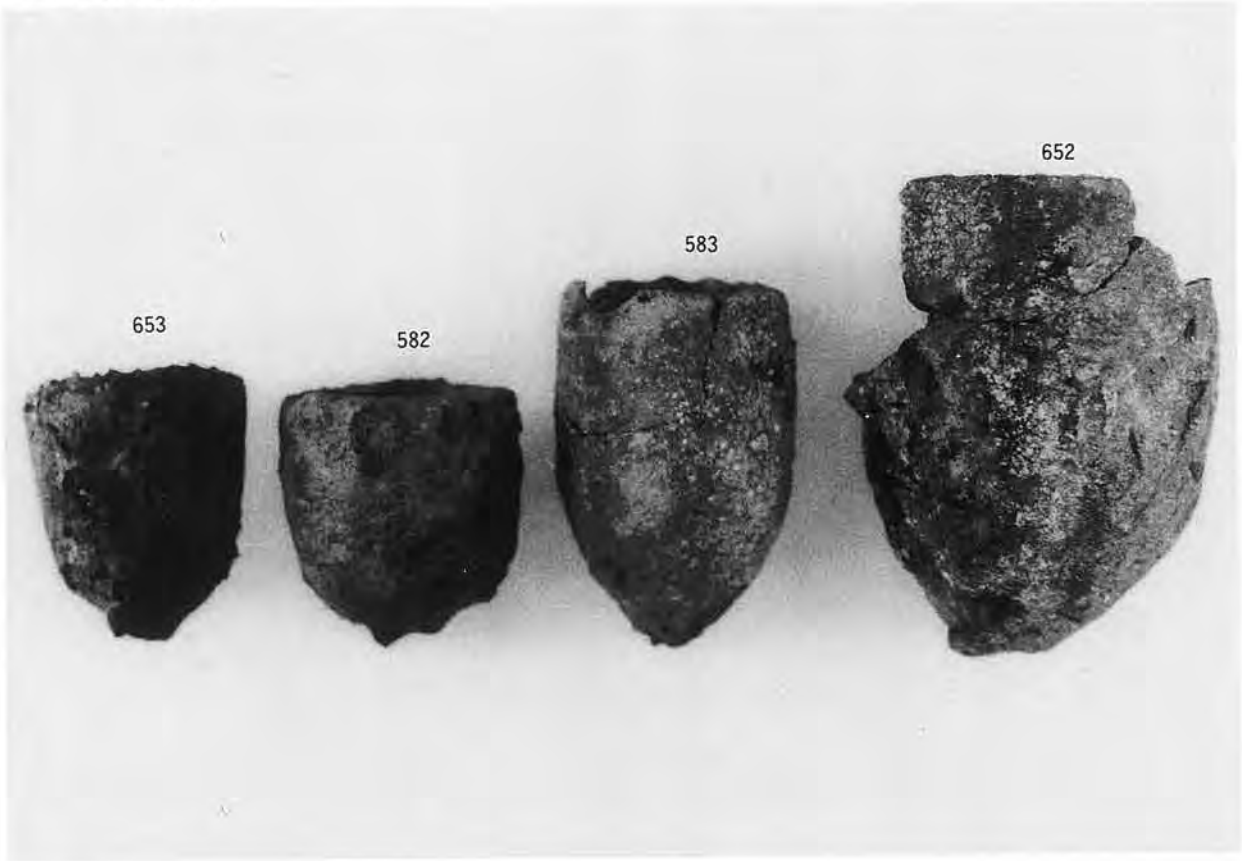


墓壙、遺構外出土遺物（土製品、石製品、銅製品）



遺構外出土遺物 (羽口)

第10図版



遺構外出土遺物（鉄滓）

宮古市埋蔵文化財調査報告書32

黒森町 I 遺跡

—平成3年度発掘調査報告書—

1992.3

発行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印刷 花坂印刷工業株式会社
岩手県宮古市新川町1-2

A Report on the Archaeological Research in Miyako City, No.32

KUROMORI-CHOU I in Miyako city is a ruin of the Edo period. The remains consist of graves, facilities for casting and a layer containing a great many cultural remains.

Miyako is centrally located in the Sanriku coastal area of the Iwate Pre. KUROMORI-CHOU I is at the foot of the Mt. Kuromori northwest of central Miyako.

The investigated area is divided into 2 parts. One is a flat land with stone hedge at its back. The other is a low mountain ridge behind the flat land. On the flat land we found post pits of 2 houses and 2 furnaces used for casting works. On the ridge 19 graves and a layer including many pieces of ceramic wares, pocelains, a large amount of slags and others were unearthed.

The artifacts show that the date of KUROMORI-CHOU I is ranging from the latter half of 17th century to the latter half of the 19th century. As well there are some casting works manufactured in this ruin, such as gongs, and mendicant priest's iron bowls which have been contributed to some shrines in Miyako.

Though the area we investigated this year is only a part of the whole ruin, the KUROMORI-CHOU I, we could get many valuable materials for studying the way of living and the casting industry of the Edo period in Miyako.

The Miyako Board of Education
Miyako, Iwate
Japan